

イザヤ書

第一章

アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサレムとに係る異象

二 天よきけ地よ耳をかたぶけよ エホバの語りたまふ言あり 曰くわれ子をやしなひ育てしにかれらは我に
四三 二 そむけり 牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる 然どイスラエルは識ずわが民はさとらず

五 罪ををかける國人よこしまを負ふたみ 悪をなす者のすゑ壊りそこなふ種族 かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり之をうとみて退きたり

六 ざる所なくその心はつかれはてたり 足のうらより頭にいたるまで全きところなくたゞ創痕と打傷と腫物とのみなり 而してこれを合すものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者もなし

七 なたれなんぢらの諸邑は火にてやかれなんぢらの田畑はその前にて外人にのまれ 既にあだし人にくつがへされて荒廢れたり シオンの女はぶだうぞのの廬のごとく瓜田の假舎のごとく また園をうけたる城のごとく

八 唯ひとり遺れり 萬軍のエホバわれらに少しの遺をとどめ給ふことなくば 我儕はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん

九 一〇 なんぢらソドムの有司よ エホバの言をきけ なんぢらゴモラの民よ われらの神の律法に耳をかたぶけよ
二 エホバ言たまはくなんぢらが獻ぐるおほくの犠牲はわれに何の益あらんや 我はをひつじの燔祭とこえたる

イ民一・二・六	二耶八・七	三〇・五・三	ワ哀三・二・二	羅九・	五〇・八・九・五一・
口申三・一	耶二・	リ耶八・二・二	二九	一六	一五・八・
一・二・六・一九・二二	ハ察五・二・二	又申二八・五一・五二	カ創一九・二・四	二一・二七	察六六
二九	結三六・四	ト察五七・三・四	太	ヨ申三三・三・二	結
米一・二・六・一・二	三・七	六・六	ル伯二七・一八	哀二	三
ハ察五・一・二	チ察九・一・三	耶二・	ヲ耶四・二・七	夕母前一五・二・二	詩
					二二
					米六・七

三 けもの膏あぶらにあけり われは牡牛おうしあるひは小羊こひつじあるひは牡山羊おやぎの血ちをよるこばす 三三 なんぢらは我われに見まえんと

三 きたるこのことを誰たがなんぢらに要もとめしや 徒いたづらにわが庭にはをふむのみなり 一三 むなしき祭物まつりものをふたゝび携たづふる

ことなかれ 燻物たきものはわがにくむところ 新月しんげつおよび安息日あんそくにちまた會衆くわいしゆうをよびあつむることも我わがにくむところなり

二四 なんぢらは聖會せいぐわいに惡あくを兼ね われ容ゆるすにたへす 一四 わが心こころはなんぢらの新月しんげつと節會せちまとをきらふ 是これわが重荷おもなり

二五 われ負おにうみたり 一五 我われなんぢらが手てをのぶるとき目めをおほひ 汝等なんぢらがおほくの祈禱いのりをなすときも聞きくことをせじ

二六 なんぢらの手てには血ちみちたり 一六 なんぢら己おのれをあらひ己おのれをきよくし わが眼前めまへよりその惡業あしわざをさり 惡あくをおこなふ

二七 ことを止め 一七 善ぜんをおこなふことをならひ 公平こうへいをもとめ 虐げしへたらるゝ者ものをたすけ 孤子みなしごに公平こうへいをおこなひ 寡婦やもめの

訟うつたへをあげつらへ 一八 エホバいひたまはく 率いざわれらともに論あひつらはん なんぢらの罪つとは緋ひのごとくなるも雪ゆきのごとく白しろくなり

一九 紅くれなるのごとく赤あかくとも羊ひつじの毛けのごとくにならん 一九 もし 若もしなんぢら肯うけがひしたがはゞ地ちの美産よきものをくらふことを得うべし

二〇 もし汝等なんぢらこばみそむかば劍つるぎにのまるべし 此こはエホバその御口みくちよりかたりたまへるなり

二一 忠信ちゆうしんなりし邑まちいかにして妓女うかれめとはなれる 昔むかしは公平こうへいにてみち正義せいぎその中なかにやどりしに 今いまは人ひとをころす者もの

二二 ばかりとなりぬ 三三 なんぢの白銀しろかねは滓かすとなり なんぢの葡萄酒ぶどうしゆは水みづをまじへ 三三 なんぢの長輩せきたちはそむきて盗人ぬすびとの

伴侶かたうととなり おのおの賄賂まひなひをよるこび 贓財おくりものをおひもとめ 孤子みなしごに公平こうへいをおこなはず 寡婦やもめの訟うたへはかれらの前まへにいづ

ること能あたはず

イ出二三・一七、三四 水利二三・二、三、六 一・二二 米三・四 ル詩三四・一四、三七、 一三 米六

ハ賽四三・二四 一・二二 米三・四 二七 慶五・一五 二二 米六 二二 何四・一八 結二

ト伯二七・九 詩一三 二・八 一 耶二二・三、一六 米 一四 詩五二・七 歌七・ 二八、一九 米三・一、七、三

ハ耳一・二四、二、一五 四・一 箴一・二八 一四 六・八 亞七・九、八 一四 一 何九・一五 一 耶五・二八 亞七・ 二民二八・二一 耶一四 又耶四・一四 一六 三 民二三・一九 多一 一〇

ラ申二八・六三 結五 申四八・三
 一・二三 ノ伯三二・三 詩一・ 才察五七・五
 ム耶六・二九、九・七 六、五・六、七三・二 夕察六五・三、六六・
 馬三・三 七、九二・九、一〇四 十結三三・二一 一七
 ウ耶三三・七 二三五 才察四三・一七 二二三 二二三
 ケ創四九・一 耶二三 エ米四・一
 一八 耶九・一〇
 一八 耶三二・六、五〇・五 キ詩七二・三、七
 亞八・二一・二三 二五五・八
 ア路二四・四七 二二三
 サ詩四六・九 何二・

二四

このゆるぎに主萬軍のエホバ、イスラエルの全能者のたまはく、
 報をすべし 我また手をなんぢの上にそへなんぢの滓をことごとく
 淨くしなんぢの鉛をすべて取去り
 なんぢの審士を舊のごとくなんぢの議官を始のごとくに復すべし
 然るのちなんぢは正義の邑忠信の邑となへら
 れん シオンは公平をもてあがなはれ 歸來るものも正義をもて贖はるべし
 されど愆をかすものと罪人
 とはともに敗れ エホバをすつる者もまた亡びうせん
 なんぢらはその喜びたる榿樹によりて恥をいだきその
 えらびたる園によりて慙赧むべし
 なんぢらは葉のかる榿樹のごとく水なき園のごとくならん
 權勢あ
 るものは麻のごとくその工は火花のごとく二つのもの一同もえてこれを撲滅すものなし

第二章

一 アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムにかゝる言
 二 するの日にエホバの家の山はもろもろの山のいたどきに堅立ちもろもろの嶺よりもたかく
 三 擧りすべての國は流のごとく之につかん おほくの民ゆきて相語いはん
 率われらエホバの山にのほりヤコブ
 の神の家にゆかん 神われらにその道ををしへ給はん
 われらその路をあゆむべしとそは律法はシオンよりいで
 四 エホバの言はエルサレムより出べければなり
 エホバはもろもろの國のあひだを鞠きおほくの民をせめたま
 はん 斯てかれらはその劍をうちかへて鋤となしその鎗をうちかへて鎌となし
 國は國にむかひて劍をあげず
 戦鬪のことを再びまなばざるべし

ヤコブの家よきたれ我儕エホバの光にあゆまん
 主よなんぢはその民ヤコブの家をすてたまへり此は

かれらのなかに東のかたの風俗みち皆ペリシテ人のごとく陰陽師となり異邦人のともがらと手をうちて盟を
たてしが故なり かれらの國には黄金白銀みちて 財寶の數かぎりなしかれらの國には馬みちて戰車のかす
限りなし かれらの國には偶像みち 皆おのが手の工その指のつくれる者ををがめり 賤しきものは屈めら
れ 尊きものは卑せらる かれらを容したまふなかれ なんぢ岩間にいり また土にかくれて エホバの畏るべき
容貌とその稜威の光輝とをさくべし この日には目をあげて高ぶるもの卑せられ 驕る人かどめられ 唯エホバ
のみ高くあげられ給はん
二二 二一 二二 二二 二一 二二 二一 二二 二一 二二
それは萬軍のエホバの一日ありすべて高ぶる者おどる者みづからを崇るものの上にのぞみて之をひく
し またレバノンのたかく聳たるすべての香柏 バシヤンのすべての檀樹 もろもろの高山 もろもろの聳え
たる嶺 すべてなたかき櫓すべての堅固なる石垣 およびタルシシのすべての舟すべての慕ふべき美はしき
ものに臨むべし この日には高ぶる者かどめられ 驕る人はひくよせられ 唯エホバのみ高くあげられ給はん
一八 一七 一七 一八 一七 一七 一八 一七 一七 一八
かくて偶像はことごとく亡びうすべし エホバたちて地を震動したまふとき 人々そのおそるべき容貌と
その稜威の光輝とをさけて巖の洞と地の穴とにいらん その日人々おのが拜せんとて造れる白銀のぐうざうと
黄金のぐうざうとを鷹鼠のあな蝙蝠の穴になげすて 岩々の隙けはしき山峽にいり エホバの起て地をふるひ
うごかしたまふその畏るべき容貌と稜威のかどやきとを避ん なんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ること
をやめよ斯るものは何ぞかぞふるに足らん

イ民二三・七	ハ賽二・一九、二一、二二、二四、二五	何二・二六、一八、二	ル王上一〇・二二	ヨ撒後一・九	ネ伯二七・三
口申一八・一四	六・一五	一耳三・一八	マ賽二・一一	タ賽二・一〇	ナ詩一四六・三
ハ詩一〇六・三五、五耶	ト賽四・一、一二、一三、一四	九・一一 阿八米	リ賽一四・八、三七、三九、四〇	レ賽三〇・二二、三二	
一〇・二二	〇・二二、一三、二二、二五	六・四・五・一〇、七、八	二四 結三一・三	カ賽三〇・三一、三二	
二申一七・一六、一七	四、二四・二二、二五	結三八・二四、一九	二二 二二 二二 二二	六・二二 來一一・七	ソ賽二・一九
ホ耶二二・二八	九、二六・二二、二七、二八	三九・二二、二二、二五	一、二六 亞九・一六	又賽三〇・二五	ツ賽二・一〇、一九

ラ利二六・二六
 米三三・二二
 才傳八・二二
 マ賽三・四
 三三三
 太二一・二二三
 ム王下二四・一四
 ノ則二三・一三、一八・ク詩二二八・二
 二〇、二二、一九・五
 ヤ傳八・二三
 フ米六・二
 エ賽五八・四
 米三・

第三章

一 みよ主ばんぐんのエホバ、エルサレムおよびユダの頼むところ倚ところなる凡てその頼むところ
 二 の糧すべてその頼むところの水 勇士 戰士 審士 預言者 卜筮者 長老 五十人の首 貴顯者
 三 議官 藝に長たる者および言語たくみなるものを除去りたまはん われ童子をもてかれらの君とし 嬰兒にかれ
 四 らを治めしめん 民たがひに相 虐げ 人おのおのその隣をしへたげ 童子は老たる者にむかひて高ぶり 賤しき
 五 ものは貴きものに對ひてたかぶらん そのとき人ちゝの家にて兄弟にすがりていはん 汝なほ衣あり われらの
 六 有司となりてこの荒敗をその手にてをさめよと その日かれ聲をあげていはん 我なんぢらを愈すものとなる
 七 を得じ わが家に糧なくまた衣なし 我をたてゝ民の有司とすることなかれと 是かれらの舌と行爲とはみな
 八 エホバにそむきてその榮光の目ををかしゝが故に エルサレムは敗れユダは仆れたればなり かれらの面色は
 九 その悪きことの證をなし ソドムのごとくその罪をあらはして隠すことをせざるなり かれらの靈魂はわざはひな
 一〇 るかな自らその惡の報をとれり なんぢら義人にいへ かならず福祉をうけん 彼等はそのおこなひの實を
 一一 くらふべければなり 惡者はわざはひなる哉かならず災禍をうけん その手の報きたるべければなり わが
 一二 民はをさなごに虐げられ婦女にをさめらる 唉わが民よ なんぢを導くものは反てなんぢを迷はせ汝のゆくべき
 一三 途を絶つ

一四 エホバ立いでて公理をのべ起てもろもろの民を審判し給ふ エホバ來りておのが民の長老ともろもろの
 一五 君とをさばきて言給はん なんぢらは葡萄園をくひあらせり 貧きものより掠めとりたる物はなんぢらの家にあり
 一六 いかねば汝等わが民をふみにじり貧きものの面をすりくだくやとこれ主萬軍のエホバのみことばなり

一六 エホバまた言給はくシオンの女輩はおごり項をのばしてあるき眼にて媚をおくり徐々としてあゆみゆく
 一七 その足にはりんりと音あり このゆるぎに主シオンのむすめらの頭をかぶるにしエホバ彼らの醜所をあらは
 一八 し給はん その日主かれらが足にかされる美はしき釧をとり 瓔珞半月飾 耳環手釧面帕 華冠脛飾
 一九 紳香盒符囊 指環鼻環 公服上衣外帔金囊 鏡細布の衣首帕被衣などを取除きたまはん 而
 二〇 して馨はしき香はかはりて臭穢となり 紳はかはりて繩となり 美はしく編たる髪はかぶるとなり 華かなる衣は
 二一 かはりて鹿布のころもとなり 麗顔はかはりて烙鐵せられたる痕とならん なんぢの男はつるぎにたふれな
 二二 んぢの勇士はたゝかひに仆るべし その門はなげきかなしみ シオンは荒廢れて地にすわらん
 二三 一 その日七人のをんな一人の男にすがりていはん 我儕おのれの糧をくらひ己のころもを着るべし
 二四 二 我儕になんぢの名をとなふることを許してわれらの恥をとりのぞけと
 二五 三 その日エホバの枝はさかえて輝かん 地よりなりいづるものの實はすぐれ並うるはしくして逃れのこれる
 二六 四 イスラエルの益となるべし 而してシオンに遺れるもの エルサレムにとゞまれる者すべて此等のエルサレム
 二七 五 に存ふる者のなかに録されたるものは聖となへられん そは主さばきするみたまと焼つくす靈とをもてシオ
 二八 六 ンのむすめらの汚をあらひ エルサレムの血をその中よりのぞきたまふ期きたるべければなり 爰にエホバは
 二九 七 シオンの山のすべての住所ともろもろの聚會とのうへに 晝は雲と煙とをつくり夜はほのほの光をつくり給はん
 三〇 八 あまねく榮のうへに覆庇あるべし また一つの假廬ありて 晝はあつさをふせぐ陰となり 暴風と雨とをさけて
 三一 九 かくるる所となるべし

第四章

イ申二八・二七 二 賽二二・二二 米一 八 賽二・一〇
 口 賽四七・二・三 一 一六 ト 賽二・一一・一七 又 耶二三・五 亞三
 八 士八・二二 永 耶一四・二 賽一・四 十 賽後三・二二 八、六・二二 耶三三・二二
 里 路一・二五 又 耶二三・五 亞三 耶三三・二二 耶三三・二二
 ル 勝四・三 歌三・五 力 出二三・二二
 亞二・五

夕詩八〇・八 歌八・ 三三三 可一三・一 二二・三
一二 賽二七・二耶 路二〇・九 一 二二・三
二・二一 太二一・レ 申三三・六 賽一・ 詩八〇・二二
ネ米二・二
ナ賽二二・一四
ラ結四五・一一
ム鐵二三・二九、三〇
傳一〇・一六 賽五・ 平伯三四・二七 詩二
ウ廢六・五、六
八・五

第五章

一 われわが愛する者のために歌をつくり 我があいするものの葡萄園のことをうたはん わが愛する
二 ものは土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり 彼その園をすきかへし石をのぞきて嘉ぶだうを
三 うゑ そのなかに望樓をたて 酒榨をほりて 嘉葡萄のむすぶを望みまてり 然るに結びたるものは野葡萄なりき
四 さればエルサレムに住るものとユダの人よ 請なんぢら我とわがぶだうぞのとの間をさばけ わが葡萄園
五 にわれの作たるほか何のなすべき事ありや 我はよきぶだうの結ぶをのぞみまちしに 何なれば野葡萄をむすびし
六 や 然ばわれわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん 我はぶだうぞのの籬笆をとりさりてその食あらさ
七 るゝにまかせその垣をこぼちてその踐あらさるゝにまかせん 我これを荒してふたゝび剪ことをせず耕す
八 ことをせず棘と荊とをはえいでしめん また雲に命せてそのうへに雨ふることなからしめん それ萬軍のエホ
九 バの葡萄園はイスラエルの家なり その喜びたまふところの植物はユダの人なり これに公平をのぞみたまひしに
一〇 反りて血をながしこれに正義をのぞみ給ひしにかへりて號呼あり
一一 禍ひなるかな彼らは家に家をたてつらね 田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず 己ひとり國のうち
一二 住んとす 萬軍のエホバ我耳につけて宣はく 實におほくの家はあれすたれ大にして美しき家は人のすむこと
一三 なきにいたらん 十段のぶだうぞの僅かに一バテをみのり一ホメルの穀種はわづかに一エバを實るべし
一四 ひなるかなかれらは朝つとにおきて濃酒をおひもとめ 夜のふくるまで止まりてのみ 酒にその身をやかるとなり
一五 かれらの酒宴には琴あり瑟あり鼓あり笛あり 葡萄酒ありされどエホバの作爲をかへりみず その手のなし
一六 たまふところに目をとめず

一三 斯るが故にわが民は無知にして虜にせられその貴顯者はうるそのもろもろの民は渴によりて疲れはてん

一四 また陰府はその欲望をひろくしその度られざる口をはるかれらの榮華かれらの群衆かれらの饒富および

一五 喜びたのしめる人みなその中におつべし 賤しき者はかどめられ 貴きものは卑くせられ 目をあげて高ぶる者

一六 はひくくせらるべし されど萬軍のエホバは公平によりてあがめられ 聖なる神は正義によりて聖とせられ給

一七 ふべし 而して小羊おのが牧場にあるごとくに草をはみ 豊かなるものの田はあれて旅客にくらはれん

一八 禍ひなるかな彼等はいつはりを繩となして悪をひき 索にて車をひくごとく罪をひけり かれらは云そ

一九 の成んとする事をいそぎて速かになせ 我儕これを見ん イスラエルの聖者のさだむることを逼來らせよ われら

二〇 これを知んと 禍ひなるかな かれらは悪をよびて善とし 善をよびて悪とし 暗をもて光とし 光をもて暗とし

二一 苦をもて甘とし 甘をもて苦とする者なり わざはひなる哉 かれらは己をみて智しとし 自らかへりみて聰とす

二二 者なり 禍ひなるかな かれらは葡萄酒をのむに丈夫なり 濃酒を和するに勇者なり かれらは賄賂によりて

二三 悪きものを義となし 義人よりその義をうばふ

二四 此によりて火舌の刈株をくらふごとく また枯草の火焰のなかにおつるがごとく その根はくちはてその

二五 花は塵のごとくに飛さらん かれらは萬軍のエホバの律法をすて イスラエルの聖者のことばを蔑したればなり

二六 この故にエホバその民にむかひて怒をはなち 手をのべてかれらを撃たまへり 山はふるひうごき かれらの屍

二七 は衢のなかにて糞土のごとくなれり 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手を伸したまふ

二八 かくて旗をたてよとほき國々をまねき 彼等をよびて地の極より來らしめたまはん 視よかれら趨りて速か

イ賽一・三 何四・六 八賽一〇・一六 彼後三・三、四 へ賽五・二一 ち出二五・七 又王下三三・一三、一 ヲ利二六・二四 賽九 一〇・四
路一九・四四 二賽六六・五 耶一七 ホ鐵三・七 羅一・二 二統一七・一五、二四 一伯一八・一六 何九 七 一二・一七、二一、
口賽二・九、一一、二七 二五 歷五・一八 二、二二、二六 二六 歷二・九 九 耶四・二四 一〇・四 中二八・四九 詩七

レ 伍五・六
ソ 耶五・二六
ツ 賽八・二二
二 三 哀三・二
三 二 七 八

ネ 王下一五・七
ナ 王上二二・一九
一 二 四 一 獸四・二
ム 獸四・八

ウ 詩七二・一九
中 出四〇・三四
八 一 〇
ノ 出四・一〇、六・三〇
士 六 二 二 一 三 一

二 二 耶一・六
才 獸八・三
ク 耶一・九
一 六
ヤ 創一・二六、三・二

二 一 一 七
マ 賽四三・八
二 四 一 二 一
路 八 一 〇 約 二 二
四 〇 徒 二 八 二 六

羅 一 一 八

二七 に来たるべし 二七 その中には疲れたふるゝものなく眠りまたは寝るものなしその腰の帯はとけずその履の紐は
二八 きれず 二八 その矢は鋭その弓はことごとく張りその馬のひづめは石のごとくその車の輪は疾風のごとしと稱へ
二九 られん 二九 その嗥ること獅のごとくまた小獅のごとく嗥うなりつゝ獲物をつかみて掠去れども之をすくふ者
三〇 なし 三〇 その日かれらが嘯響めくこと海のなりどよめくがごとしもし地をのぞまば暗と難とありて光は黒雲の
なかにくらくなりたるを見ん

第六章

一 ウ ज्या王のしにたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給ふを見しにその衣裾は殿にみち
二 たり 二 セラビムその上にたつ おのおの六の翼ありその二をもて面をおほひその二をもて足を
三 おほひ 三 そのふたつ 三 たがひに呼びひけるは聖なるかな聖なるかな聖なるかな萬軍のエホバ その榮光は
四 全地にみつ 四 斯よばはる者の聲によりて闕のもとを揺うごき家のうちに煙みちたり 五 このとき我いへり禍ひ
なるかな我ほろびなん 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢たるくちびるの者なるに わが眼ばんぐんのエホ
バにまします王を見まつればなりと

六 爰にかのセラビムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にしたづさへて我にとびきたり 七 わが口
八 に觸ていひけるは視よこの火なんぢの唇にふれたれば既になんぢの悪はのぞかれなんぢの罪はきよめられたり
九 と 我またエホバの聲をきく曰く われ誰をつかはさん誰かわれらのために往べきかと そのとき我いひけるは
われ此にあり我をつかはしたまへ 九 エホバいひたまはく 往てこの民にかくのごとく告よ なんぢら聞てきけよ

一 然どさとらざるべし見てみよ然どしらざるべしと 一〇 なんぢこの民のこゝろを鈍くしその耳をものうくしその
 二 眼をおほへ恐らくは彼らその眼にて見その耳にてきよその心にてさとり翻へりて醫さるゝことあらん 二
 に我いひけるは主よいつまで如此あらんか主こたへたまはく 邑はあれすたれて住むものなく家に人なく邦
 三 ことごとく荒土となり 二二 人々エホバに遠方までうつされ廢りたるところ國中におほくならん時まで 如此ある
 三 べし 二二 そのなかに十分の一のこる者あれども此もまた吞つくされんされど聖裔のこりてこの地の根となるべ
 し彼のテレピントまたは樞樹がきらるゝことありともその根ののこるがごとし

第七章

一 ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのととき アラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王
 二 ペカと上りきたりてエルサレムを攻しがつひに勝ことあたはざりき 二 ことゝにアラムとエフライム
 と結合なりたりとダビデの家につぐる者ありければ王のこゝろと民の心とは林木の風にうごかさるゝが如くに
 動けり

三 その時エホバ、イザヤに言たまひけるは 今なんぢと汝の子シャルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大
 四 路のかたはらなる上池の樋口にゆきてアハズを迎へ 四 これに告べしなんぢ謹みて静かなれ アラムのレヂン及
 五 びレマリヤの子はげしく怒るとも二の燼餘りたる煙れる片柴のごとし 懼るゝなかれ心をよわくするなかれ 五 ア
 六 ラム、エフライム及びレマリヤの子なんぢにむかひて悪き謀ごとを企てゝいふ 六 われらユダに攻上りて之を
 七 おびやかし我儕のためにこれを破りとりタビエルの子をもその中にたてゝ王とせんと 七 されど主エホバいひ
 八 たまはくこの事おこなはれずまた成ことなし 八 アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなり エフライム

イ時一九・七〇 祭 八米三・二二 一王下二五・二二 代下 三六・二
 六三・二七 二王下二五・二二 一王下二八・一七 祭 三六・二
 口耶五・二二 一王下二五・二二 二八・五、六 又後八・六

ル代下二〇・二〇　ワ太一・二三　路一・ヨ賽八・八　一六九
ヲ士六・三六　太一　三一・三四　タ賽八・四　ソ代下二八・二九　ナ賽五・二六　ラ王下二六・七、八代
三二八　カ賽九・六　レ王下二五・三〇、　ツ王上一二・二六　ナ賽二・一九　耶一六　下二八・二〇、二一
結五・一

九 は六十五年のうちに敗れて國をなさざるべし　またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子
なり　若しなんぢら信ぜずばかならず立ことを得じと

二〇 エホバ再びアハズに告ていひたまはく　なんぢの神エホバに一の豫兆をもとめよ　或はふかき處あるひ

二一 は上のたかき處にもとめよ　アハズいひけるは我これを求めじ　我はエホバを試むることをせざるべし　イ

二二 ザヤいひけるはダビデのいへよ請なんぢら聞なんぢら人をわづらはしこれを小事として亦わが神をも煩はさん

二三 とするか　この故に主みづから一の豫兆をなんぢらに賜ふべし　視よをとめ孕みて子をうまん　その名をインマ

二四 ヌエルと稱ふべし　かれ悪をすて善をえらぶことを知ころほひにいたりて　乳酥と蜂蜜とをくらはん　そは

二五 この子いまだ悪をすて善をえらぶことを知ざるさきになんぢが忌きらふ兩の王の地はすてらるべし　エホバは

二六 エフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を汝となんぢの民となんぢの父の家とにのぞませ

二七 給はん是アツスリヤの王なり

二八 其日エホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアツスリヤの地の蜂をよびたまはん　皆きたりて

二九 荒たるたに岩穴すべての荆棘すべての牧場のうへに止まるべし

三〇 その日主はかはの外ふより雇へるアツスリヤの王を剃刀として首と足の毛とを剃たまはん　また髯をも

三一 除きたまふべし

三二 その日人わかき牝犢ひとつと羊ふたつとを飼をらん　その出すところの乳おほきによりて乳酥をくらふ

三三 ことを得んすべて國のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらふべし

三三 その日千株に銀一千の價をえたる葡萄ありし處もことごとく荆と棘はえいづべし 二四 荆とおどろと地に

二五 あまねきがゆるゑに人々矢と弓とをもて彼處にゆくなり 二五 鋤をもて掘たがへしたる山々もいばらと棘のために

人おそれてその中にゆくことを得じその地はたゞ牛をはなち羊にふましむる處とならん

第八章

一 エホバ我にいひたまひけるは 一の大なる牌をとりそのうへに平常の文字にてマヘル シヤラル

二 ハシバズと録せ 二 われ信實の證者なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその證

三 をなさしむ 三 われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければ エホバ我にいひたまはくその名を

四 マヘル シヤラル ハシバズと稱へよ 四 そはこの子いまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちに ダマスコ

の富とサマリヤの財寶はうばはれてアツスリヤ王のまへに到るべければなり

五 エホバまた重て我につげたまへり云く 六 この民はゆるやかに流るゝシロアの水をすてゝレヂンとレマリ

七 ヤの子とをよろこぶ 七 此によりて主はいきほひ猛くみなぎりわたる大河の水をかれらのうへに堰入たまはん

八 是はアツスリヤ王とそのもろもろの威勢とにして 百の支流にはびこりもろもろの岸をこえ ユダにながれ

九 入り溢れひろがりてその項にまで及ばん インマヌエルよそののぶる翼はあまねくなんぢの地にみちわたらん

一〇 もろもろの民よさばめき騒げなんぢら推かるべし 遠きくにぐにの者よきけ腰におびせよ 汝等くだか

一〇 るべし 腰に帯せよなんぢら推かるべし なんぢら互にはかれつひに徒勞ならんなんぢら言をいだせ遂に

二 おこなはれじそは神われらとともに在せばなり 二 エホバつよき手をもて此如われに示しこの民の路にあゆま

三 ざらんことを我にさととして言給はく 三 此民のすべて叛逆となふるところの者をなんぢら叛逆となふるなか

イ賽五・六 二賽七・一六 へ尼三・一五 約九・七 リ賽三〇・二八 三八・三九 羅八・
口賽三〇・八 哈二・二 ホ王下一五・二九、一 ト賽七・一、二、六 又賽七・一四 三三
ハ王下一六・一〇 六・九 賽一七・三 七賽一〇・二、二 九耳三・九、一 一 徒五・ 三 賽七・二

夕彼前三・一四、一五 ネ賽二八・一六 路 二、一一・二五 申詩七一・七 亞三・八 十路一六・二九
 レ民二〇・一二 二・三四 羅九・三三 申賽五四・八 申賽一 下王下一五・二九 代 五・二六
 ソ詩七六・七 路二二 彼前二・八 申賽五三・三 九・三三 申賽一六・一一 八、一四 弗五・
 五 太二一・四四 路二 五、三八 申賽二九・四 申賽五・三〇 アリ二六・二四 王下
 ツ結一一・一六 〇・二八 羅九・三 ウ來二・一三 申賽九・一 一七・五、六 代上

一三 彼等のおそるるところを汝等おそるゝなかれ 憍くなかれ 一三 なんぢらはたゞ萬軍のエホバを聖としてこれを
 一四 畏みこれを恐るべし 一四 然らばエホバはきよき避所となりたまはん 然どイスラエルの兩の家には躓く石となり
 一五 妨ぐる磐とならん エルサレムの民には網罟となり機檻とならん 一五 おほくの人々これによりて蹶きかつ仆れ
 やぶれ網せられまた捕へらるべし

一六 證詞をつかね律法をわが弟子のうち封べし 一七 いま面をおほひてヤコブの家をかへりみ給はずといへど

一八 も我そのエホバを待そのエホバを望みまつらん 一八 視よわれとエホバが我にたまひたる子輩とはイスラエルの

一九 うちの豫兆なり奇しき標なり 此はシオンの山にいます萬軍のエホバの與へたまふ所なり

二〇 もし人なんぢらにつけて巫女および魔術者のさえづるがごとく細語がごとき者にもとめよといはゞ民は

二一 おのれの神にもとむべきにあらずやいかで活者のために死者にもとむることを爲んといへ 二〇 たゞ律法と證詞

二二 とを求むべし 彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ 二二 かれら國をへあるきて苦みうるんその飢る

二三 とき怒をはなち己が王おのが神をさして詛ひかつその面をうへに向ん 二三 また地をみれば艱難と幽暗とくるし

二四 みの闇とありかれらは昏黒におひやられん

第九章

一 今くるしみを受れども後には闇なかるべし 昔しはゼブルンの地ナフタリの地をあなどられしめ
 給ひしかど 後には海にそひたる地ヨルダンの外の地ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給へり
 二 幽暗をあゆる民は大なる光をみ 死蔭の地にすめる者のうへに光てらせり 三 なんぢ民をましその歡喜を大に

四 したまひければ かれらは收穫時かりいれどきによろこぶがごとく 掠物えものをわかつときに 樂むたのしがごとく 汝なんぢの前まへによろこべり 四
 は汝なんぢかれらがおへる 輓くびきとその肩かたの笞しもとと 虐しへたぐるもの 杖つえとを折をりて ミデアンの日ひのごとく なし給たまひ
 五 たればなり 五 すべて亂みだれたゝかふ 兵士つはもののよろひと 血ちにまみれたる衣ころもとは みな火ひのもえくさとなりて 焚やがるべし
 六 ひとりみどりこの 嬰兒みどりこわれらのために 生うれたり 我われ儕らは ひとりの子こをあたへられたり 政事まつりごとはその肩かたにあり 其の名なは 奇妙きみょう
 七 また 議士ぎし また 大能たいのうの 神かみ とこしへのちゝ 平和へいわの 君きみとなへられん 七 その 政事まつりごとと 平和へいわとは ましくはよりて 窮かきり
 なし 且かつダビデの位くらゐにすわりて その國くにををさめ 今いまよりのちとこしへに 公平こうへいと 正義せいぎとをもちて これを立たててこれを保たもちた
 まはん 萬軍ばんぐんのエホバの 熱心ねつしんこれを成なしたまふべし

九八 主し一言ひとことをヤコブにおくり之これをイスラエルの上うへにのぞませ給たまへり 九 すべてこの民たみエフライムとサマリヤ

一〇 に居をるものとは 知しならん かれらは 高たかぶり 誇ほこる心こころをもちていふ 一〇 かはら 瓦かはらくづるゝともわれら 斫石きりいしをもちて 建たてくはの木き

二 きらるゝともわれら 香柏かうはくをもちて之これにかへんと 二 この故ゆゑに エホバ、レヂンの 敵てきをあげもちめて イスラエルを

三 攻せめしめ その仇あにをたけび 勇いさましめたまはん 三 前に アラム人びとあり 後に ペシリテ人びとあり 口くちをはりて イスラエルを 呑のん

とす 然しかはあれど エホバの 怒いかりやまずして 尙なほその手てをのばしたまふ 一四 斯かるゆゑに エホバ 一日ひとひのうち 首かしらと尾おし

二四 然しかどこの民たみはおのれをうつものに 歸かへらず 萬軍ばんぐんのエホバを 求もとめず 一五 其かの首かしらとは 老おいたるもの 尊たかきもの 其かの尾おしとは 謙言けんげんをのぶ

一五 と 椽しめろのえたと 葦あしとを イスラエルより 斷切たちきりたまはん 一五 其かの首かしらとは 老おいたるもの 尊たかきもの 其かの尾おしとは 謙言けんげんをのぶ

一六 預言者よげんしゃをいふなり 一六 この民たみをみちびく者ものはこれに迷まよはせ 其かの引ひ導びをうくる者ものはほろぶるなり 一七 このゆゑ

一七 に 主しはその少壯者わかさまものをよろこびたまはず 其かの孤兒みなしごと 寡婦やもめとを 憐あはれ 一七 是これその民たみはことごとく 邪よこしまなり

イ士五・三〇 八 賽六六・一五、一六 ホ約三・二六 士多二・二三 又但二・四四 路一・ 三三七・三二 王耶五・三何七・一〇 ヨ賽三・一二
 口士七・二二 詩八三 二 賽七・二四 路二・ へ太二八・一八 哥前 三三二・三三 ヲ賽五・二五、一〇・四 力賽一〇・一七 歌一 夕詩一四七・一〇、
 九 賽一〇・二六 一一 一五・二五 一五・二四 一五・二四 賽 耶四・八 八・八 一一

ソ 賽九・二二、二二、五 ナ米七・二、六
 ・二五、一〇・四 ラ利二六・二六
 ツ 賽一〇・一七 馬四 ム 賽四九・二六 耶一
 ・二 九・九
 五・二五、一〇・四 オ伯三一・一四
 中 詩五八・二、九四 ク 賽五・二五、九
 二〇 一、二七、二二 九・
 ノ 何九・七 路一九・ ヤ 耶五二・二〇
 四四 四四 マ 賽九・二七 米四

悪をおこなふ者なりおのおのの口は愚かなる言をかたればなり 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手をのばしたまふ

一八 悪は火のごとくもえ棘と荊とを食つくし茂りあふ林をやくべければみな煙となりむらがりて上騰らん

一九 萬軍のエホバの怒によりて地はくろく焼 その民は火のもえくさとなり 人々たがひに相憐むことなし 人

二 みにぎに攪めどもなほ飢ひだりに食へども尙あかず おのおのその腕の肉をくらふべし マナセはエフライム

をエフライムはマナセをくらひ 又かれら相合てユダを攻ん 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手をのば

したまふ

第一〇章

一 不義のおきてをさだめ暴虐のことばを録すものは禍ひなるかな かれらは乏きものの訴をうけ
 二 ずわが民のなかの貧しきものの権利をはぎ 寡婦の資産をうばひ 孤兒のものを掠む なんぢら懲

しめらるゝ日きたらば何をなさんとするか 敗壞とほきより來らんとし何をなさんとするか なんぢら逃れゆきて

誰にすくひを求めんとするか また何處になんぢらの榮をのこさんとするか たゞ縛められたるものの下にか

がみ殺されたるものしたに伏仆れんのみ 然はあれどエホバのいかり止すして尙ほその手をのばしたまふ

五 咄アツスリヤ人なんぢはわが怒の杖なりその手の筭はわが忿恚なり われ彼をつかはして邪曲なる國を

せめ我かれに命じて我がいかれる民をせめてその所有をかすめその財寶をうばはしめ かれらを街の泥のごとく

七 に蹂躪らしめん されどアツスリヤ人のこゝろざしは斯のごとくならず その心の念もまた斯のごとくならず

九八 そのころは敗壞をこのみあまたの國をほろぼし絶ん 九 かれ云わが諸侯はみな王にあらずや カルノはカル

一〇 ケミシの如くハマテはアルバデの如くサマリヤはダマスコの如きにあらずや 一〇 わが手は偶像につかふる國々

二 を得たりその彫たる像はエルサレムおよびサマリヤのものに勝れたり 二 われ既にサマリヤとその偶像とに行

へるごとく亦エルサレムとその偶像とにおこなはざる可んやと

三 このゆるに主いひたまふ我シオンの山とエルサレムとに爲んとする事をことごとく遂をはらんととき我ア

三 ツスリヤ王のおごれる心の實とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし 三 そは彼いへらくわれ手の力と智慧とに

よりて之をなせり我はかしこし國々の境をのぞきその獲たるものをうばひ 又われは丈夫にしてかの位に坐す

四 るものを下したり 四 わが手もろもろの民のたからを得たりしは巢をとるが如くまた天が下を取收めたりしは

遺しすてたる卵をとりあつむるが如くなりきあるひは翼をうごかしあるひは口をひらきあるひは喃々する者も

なかりしなりと

一五 斧はこれをもちて伐ものにむかひて己みづから誇ることをせんや 鋸はこれを動かす者にむかひて己み

づから高ぶることをせんや 此はあだかも笞がおのれを擧るものを動かし杖みづから木にあらざるものを擧んと

一六 するにひとし 一六 このゆるに主萬軍のエホバは肥たるものを瘠しめ且その榮光のしたに火のもゆるが如き火焰

一七 をおこし給はん 一七 イスラエルの光は火のごとくその聖者はほのほの如くならん 斯て一日のうちに荊とおどろ

一八 とを焼ほろぼし 一八 又かの林と土肥たる田圃の榮をうせしめ 靈魂をも身をもうせしめて病るものの衰へたるが

一九 如くなさん 一九 かつ林のうちに残れる木わづかにして童子も算へうるが如くなるべし

イ王下一八・二四、三 八代下三五・二〇 へ耶五〇・一八 チ伯三一・二五
三、一九・一〇 二王下一六・九 ト賽三七・二四 結二 リ耶五一・二〇 王下下一九・二三
口歴六・二 永王下一九・三一 八・四 但四・三〇 又賽五・一七 王下下一九・二三

ワ王下一六・七 代下
 二八・二〇
 カ賽七・三
 ヨ羅九・二七
 夕賽六・一三
 レ賽二八・二二
 ソ賽二八・二二 但九
 二七 羅九・二八
 ツ出一四・
 ネ賽三七・六
 ナ賽五四・七
 ラ但一・三六
 ム士七・二五 賽九・四
 ウ王下一九・三五
 牛出一四・二六 二七
 ノ賽一四・二五
 オ詩一〇五・一五 但
 九・二四 約登二・
 二〇
 ク母前一三・二三
 ヤ母前一・四
 マ母前五・四四
 ケ士一八・七
 フ番二一・一八
 コ番一五・三一
 エ母前二・二 二三・
 一九 尼一・三二
 ラ賽三七・二二
 ア賽一三・二
 サ歴二・九

三〇 その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを撃し者にたよらず誠意をもて
 三二 イスラエルの聖者エホバにたよらん 三二 その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかへるべし 三三 あゝイ
 三三 スラエルよなんちの民は海の沙のごとしといへども遺りて歸りきたる者はたゞ僅少ならんそは敗壞すでにさだ
 三三 まり義にて溢るべければなり 三三 主萬軍のエホバの定めたまへる敗壞はこれを徧く國內におこなひ給ふべし
 三三 このゆるぎに主萬軍のエホバいひたまはくシオンに住るわが民よアツスリヤ人エジプトの例にならひ答を
 三五 もて汝をうち杖をあげて汝をせむるとも懼るゝなかれ 三五 たゞ頃刻にして忿恚はやまん我がいかりは彼等を
 三六 ほろぼして息ん 三六 萬軍のエホバむかしミデアン人をオレブの巖のあたりにて撃たまひしごとくに禍害をおこし
 三七 て之をせめ又その杖を海のうへに伸しエジプトの例にしたがひてこれを擧たまはん 三七 その日かれの重荷はな
 三九 んちの肩より下 三九 かれの軛はなんちの頸よりはなれその軛はあぶらの故をもて壞れん
 三九 三九 かれアイにきたりミグロンを過ミクマシにてその輜重をとどめ 三九 渡口をすぎてゲバに宿ることゝに於て
 三〇 ラマはをのゝきサウルギベア人は逃れはしれり 三〇 ガリムの女よなんち聲をあげて叫べライシよ耳をかたぶけ
 三二 て聽けアナトテよなんちも聲をあげよ 三二 マデメナはさすらひゲビムの民はのがれ走れり 三三 この日かれノブ
 三三 に立とゞまりシオンのむすめの山エルサレムの岡にむかひて手をふりたり
 三三 主ばんぐんのエホバは雄々しくたけびてその枝を断たまはん 三三 丈高きものは伐おとされ聳えたる者はひく
 三四 くせらるべし 三四 また鍔をもて茂りあふ林をきり給はん 三四 レバノンに能力あるものに倒さるべし

第一章

一 エツサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて實をむすばん 二 その上にエホバの
 靈とどまらん （イ） これ智慧聰明の靈 謀略才能の靈 知識の靈 エホバをおそるゝの靈なり （三） かれは

エホバを畏るゝをもて歡樂としまた目みるところによりて審判をなさず耳きくところによりて斷定をなさず

正義をもて貧しき者をさばき 公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなしその口の杖をもて國をうち

その口唇の氣息をもて惡人をころすべし 正義はその腰の帶となり 忠信はその身のおびとならん

おほかみは小羊とともにやどり 豹は小山羊とともにふし 犢をじし肥たる家畜ともに居てちひさき童子

にみちびかれ 牝牛と熊とはくひものを同じし 熊の子と牛の子とともにふし 獅はうしのごとく藁をくらひ

乳兒は毒蛇のほらにたはふれ 乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん 斯てわが聖山のいづこにても害ふ

ことなく傷ることなからん 彼は水の海をおほへるごとくエホバをしるの知識地みつべければなり

その日エツサイの根たちでもろもろの民の旂となり もろもろの邦人はこれに服ひきたり 榮光はそのとど

まる所にあらん

その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのもをアツスリヤ、エジプト、バテロス、エテ

オピア、エラム、シナル、ハマテおよび海のしましまより贖ひたまふべし エホバは國々の爲に旂をたてゝイス

ラエルの逐やられたる者をあつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん またエフライムの猜は

うせユダを惱ますものは斷れ エフライムはユダをそねまずユダはエフライムを惱ますことなかるべし かれ

イ賽二一・一〇 徒一 二賽六一・一 太三・ へ伯四・九 馬四・六 三賽六五・二五 結三 爾賽二・二一
 三・二三 一六 約一・三三、 撒後二・八 默一 四・二五 何二・一八 羅一五 夕亞一〇・一〇
 口賽五三・一一 臨六・ 三三、三三・三四 一六、二・二六、 里伯五・二三 賽二・ 二・二二
 一・二 默五・五 ホ詩七二・二、四 默 一九・一五 四、三五・九 ワ羅一五・一〇 夕亞三・一八 結三七
 ハ賽四・二 耶二三・五 一九・一一 卜弗六・一四 又哈二・一四 力來四・一 二六、一七、三二

ツ但一・四一
 才出二・二九 賽五
 一・一〇、六三・一
 二、二三
 牛賽二・二一
 ノ詩八三・一八
 才出二・二九 賽五
 八・一四
 夕約四・一〇、一四、
 七・三七、三八
 才代上一六・八 詩
 一〇五・一
 マ詩一四・四一六
 ケ詩三四・三
 フ出二五・一、二一 詩
 六八・三三、九八・一
 四、一六
 一賽五四・一 番三・
 一四
 エ詩七一・二二、八九
 二八 賽四一・一
 サ賽五・二六、一八・三
 耶五〇・二
 一賽二一・一、四七・
 一耶五〇、五一・
 五耳三・一
 一賽二一・一、四七・
 一耶五〇、五一・
 五耳三・一

二五
 らは西なるペリシテ人の境にとびゆき相共にひがしの子輩をかすめその手をエドムおよびモアブにのべアンモ
 ンの子孫をおのれに服はしめん
 一五
 エホバ、エジプトの海汙をからし河のうへに手をふりて熱風をふかせその
 河をうちて七の小流となし履をはきて渉らしめたまはん
 一六
 斯てその民ののこれる僅かのもの爲にアツスリ
 ヤより來るべき一つの大路あり昔イスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし

第一二章

一
 その日なんぢ言ん エホバよ我なんぢに感謝すべし汝さきに我をいかり給ひしかどその怒はやみ
 て我をなくさめたまへり
 二
 視よ神はわが救なり われ依頼ておそるゝところなし 主エホバはわが
 力わが歌なり エホバは亦わが救となりたまへりと
 三
 此故になんぢら欣喜をもて救の井より水をくむべし
 四
 その日なんぢらいはん エホバに感謝せよその名をよべその行爲をもろもろの民の中につたへよその名のあがむ
 べきことを語りつけよと
 五
 エホバを頌うたへそのみわざは高くすぐれたればなりこれを全地につたへよ
 六
 シオンに住るものよ聲をあげてよばはれイスラエルの聖者はなんぢの中にて大なればなり

第一三章

一
 アモツの子イザヤが示されたるバビロンにかゝる重負の預言
 二
 なんぢらかぶろの山に旗をたて聲をあげ手をふり彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ
 三
 われ
 既にきよめ別ちたるものに命じわが丈夫ほこりにいさめる者をよびてわが怒をもらさしむ
 四
 山におほくの
 人の聲きこゆ大なる民あるがごとしもろもろの國民のよりつどひて喧めく聲きこゆこれ萬軍のエホバたゝか
 ひの軍兵を召したまふなり
 五
 かれらはとほき國より天の極よりきたるこれエホバとその忿恚をもらす器と

ともに全國をほろぼさんとて来るなり

七六 なんぢら泣號ぶべしエホバの日ちかづき全能者よりいづる敗亡きたるべければなり 七 この故にすべての

八 手はたれ凡の人のこゝろは消ゆかん 八 かれら憎きおそれ艱難と憂とにせまられ子をうまんとする婦のごとく

九 苦しむ互におどろき相みあひてその面は燄のごとくならん 九 視よエホバの日苛くして忿恚とはげしき怒とを

一〇 もて來りこの國をあらしその中よりつみびとを絶滅さん 一〇 天のもろもろの星とほしの宿は光をはなたず日は

一一 いでてくらく月はその光をかゞやかさゞるべし 一一 われ惡ことのために世をつみし不義のために惡きものを

一二 ばつし驕れるものの誇をとゞめ暴ぶるものの傲慢をひくゝせん 一二 われ人をして精金よりもすくなくオフルの

一三 黄金よりも少なからしめん 一三 かくて亦われ萬軍のエホバの忿恚のとき烈しき怒りの日に天をふるはせ地をうご

一四 かしてその處をうしなはしむべし 一四 かれらは逐るゝ鹿のごとく集むるものなき羊のごとくなりて各自おのれの

一五 民にかへりおのれの國にのがれゆかん 一五 すべて其處にあるもの見出さるれば刺れ拘留らるゝものは劍にたふ

一六 され 一六 彼等の嬰兒はその目前にてなげくだかれその家財はかすめうばはれその妻はけがさるべし

一七 視よわれ白銀をもかへりみず黄金をもよるこばざるメデア人をおこして之にむかはしめん 一八 かれらは弓

一八 をもて若きものを射くだき腹の實をあはれむことなく小子をみてをしむことなし 一九 すべての國の中にてうるは

一九 しくカルデヤ人がほこり飾となせるバビロンはむかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん 二〇

二〇 こに住むもの永くたえ世々にいたるまで居ものなくアラビヤ人もかしこに幕屋をはらず牧人もまたかしこには

イ番一・七 黙六・一七 二馬四・一	三二・三・一五 太二	リ詩二一〇・五 哀一	カ創一九・二四・二五
口伯三一・二三 耳一 ホ詩一〇四・三五 箴	四・二九 可一三・二	二・二二	中二九・二三 耶四
・二五	二・二二	四 路二一・二五	又耶五〇・一六、五一
ハ詩四八・六 賽二一	ハ 賽二四・二二、三三	ト 賽二・二七	二八・三一
・三	結三二・七 耳二・	チ 基二・六	ル 詩一三七・九 翁三
			ワ 賽一四・四、二二
			ヨ 耶五〇・三、三九、
			五二・二九、六二

夕暮三四・一一一・一五
 黙一八・二
 ツ詩一〇二・一三
 ナ賽四九・二二、六〇
 ム賽一三・一九
 哈二
 ノ賽五五・一一
 結
 三二・一六
 オ結三三・二一

三 二
 その群をふさすることなく 二
 たゞ猛獸かしこにふし 吼るものその家にみち 駝鳥かしこにすみ 牡山羊かしこ
 三
 に躍らん 三
 豺狼その城のなかになき野犬えいぐわの宮にさけばん 三
 その時のいたるは近きにあり その日は延る
 ことなかるべし

第一四章

一 エホバ、ヤコブを憐みイスラエルをふたゝび撰びて之をおのれの地におきたまはん 異邦人これに
 二 加りてヤコブの家にむすびつらなるべし 二
 もろもろの民はかれらをその處にたづさへいたらん
 而してイスラエルの家はエホバの地にてこれを奴婢となし 曩におのれを虜にしたるものを虜にし おのれを
 虐げたるものを治めん

三 エホバなんぢの憂と艱難とをのぞき 亦なんぢが勤むるからき役をのぞきて安息をたまふの日 四
 なんぢ

五 この歌をとなへバビロン王をせめていはん 虐ぐる者いかにして息みしや 金をはたる者いかにして息みしやと

六 エホバあしきものの咎ともろもろの有司の杖とををりたまへり 六
 かれらは怒をもてもろもろの民をたえず

七 撃てはうち 忿恚をもてもろもろの國ををさむれど 七
 その暴虐をとどむる者なかりき 今全地やすみを得おだ

八 やかを得 ことごとく聲をあげてうたふ 八
 實にまつ樹およびレバノンの香柏さへもなんぢの故により歡びて

九 いふ 汝すでに仆たれば樵夫のほりきたりてわれらを攻ることなしと 九
 下の陰府はなんぢの故により動きて汝の

一〇 きたるをむかへ 世のもろもろの英雄の亡靈をおこし 國々のもろもろの王をその位より起おこらしむ 一〇
 かれら

二 は皆なんぢに告ていはん 汝もわれらのごとく弱くなりしや 汝もわれらと同じくなりしやと 二
 なんぢの榮華と
 なんぢの琴の音はすでに陰府におちたり 蛆なんぢの下にしかれ 蚯蚓なんぢをおほふ

二二 あしたの子明星よいかにして天より隕しやもろもろの國をたふし、者よいかにして斫れて地にたふれ
 二三 しや 汝さきに心中におもへらく われ天にのぼり我くらゐを神の星のうへにあげ 北の極なる集會の山に
 二四 ざし たかき雲漢にのぼり至上者のごとくなるべしと 然どなんぢは陰府におとされ坑の最下にいれられん
 二六 なんぢを見るものは熟々なんぢを視なんぢに目をとめていはん この人は地をふるはせ列國をうごかし 世
 二七 を荒野のごとくしもろもろの邑をこぼち捕へたるものをその家にとさかへさざりしものなるかと もろもろ
 二八 の國の王たちはことごとく皆たふとき狀にておのおのその家にねぶる 然どなんぢは忌きらふべき枝のごと
 二九 くおのが墓のそとにすてられ その周圍には劍にて刺ころされ坑におろされ石におほはれたる者ありて 踐つけ
 三〇 らる、屍にことならず 汝おのれの國をほろぼしおのれの民をころし、が故にかれらとおなじく葬らるゝ
 ことあたはずそれ悪をおこなふものの裔はとこしへに名をよばるゝことなかるべし
 三一 先祖のよこしまの故をもて その子孫のために戮場をそなへ 彼等をしてたちて地をとり世界のおもてに
 三二 邑をみたすことなからしめよ 萬軍のエホバのたまはく 我立てかれらを攻めバビロンよりその名と遺りたる
 三三 ものを絶滅し その子孫の孫をたちほろぼさんとこれエホバの聖言なり われバビロンを刺蝟のすみかとし
 三四 沼とし且ほろびの筭をもてこれを掃除かんとこれ萬軍のエホバのみことばなり
 三五 萬軍のエホバ誓をたて、言給はく わがおもひし事はかならず成 わがさだめし事はかならず立ん われ
 アツスリヤ人をわが地にてうちやぶり わが山々にてふみにじらんこゝにおいて彼がおきし軛はイスラエル人
 よりはなれ 彼がおはせし重負はイスラエル人の肩よりはなるべし これは全地のことにつきて定めたる謀略

イ賽三四・四 二詩四八・二 へ太一一・二三 八、一〇九・一三 一リ鐵一〇・七 耶五一 一ル伯一八・一九 一ワ賽一〇・二七
 口太一一・二三 永賽四七・八 撒後二 一ト伯一八・一九 詩二 一チ出二〇・五 太二三 一六二 一ヲ賽三四・二一 一番二
 一八八・一〇 一四 一、一〇、三七・二 一三五 一又王上一四・一〇 一、二四 一カ代下二〇・六 一伯九

二二・二三・二四 賽四三・二二 但四 夕時八七・一五、一 二四、二二・二二 七・一八 八・三一
詩三三・一一 二二 三三・三五 〇二・二六 夕耶四八・一 結二五 ネ賽一六・一二 耶四七・五、四八・ 夕耶四八・三八 夕耶四八・五
九・二二、二二・三〇 三代下一六・二〇 〇番三・二二 昭二一 八・一一 昭二・一 ナ利二一・五 賽三・ 一、三七、三八 結 夕賽一六・一一 耶四 半民三二・三六

二七 なり 是はもろもろの國のうへに伸したる手なり 萬軍のエホバさだめたまへり誰かこれを破ることを得んや

その手をのばしたまへり誰かこれを押返すことを得んや

二八 アハズ王の死たる年おもにの預言ありき

二九 曰くペリシテの全地よなんぢをうちし杖をれたればとて喜ぶなかれ 蛇の根より蝮いでその果はとびかけ

三〇 巨蛇となるべければなり いと貧しきものはものくひ乏しきものは安然にふさん われ飢饉をもてなんぢの

三二 根をしなせ汝がのこれる者をころすべし 門よなげけ邑よさけべ ぺリシテよなんぢの全地きえうせたりそは

けぶり北よりいできたりその軍兵の列におくるよものなし

三三 その國の使者たちに何とこたふべきや 答へていはん エホバ、シオンの基をおきたまへりその民のなかの

苦しむものは避所をこの中にえん

第一五章

一 モアブにかゝる重負のよげん 曰く
モアブのアルは一夜の間にあらされて亡びうせ 一夜のまに荒されてほろびうせ

二 かん かれバイテおよびデボンの高所にのぼりて哭き 莫アブはネボ及びメデバの上にてなげきさけぶ おのおの

三 その頭を禿にしその鬚をことごとく剃たり かれら鹿服をきてその衢にあり 屋蓋または廣きところにて皆なき

四 さげび悲しむこと甚だし へシボンとエレアレと叫びてその聲ヤハズにまで聞ゆ この故にモアブの軍兵を

五 あげ その靈魂うちにて在てをのけり わが心モアブのために叫びよばはれり その貴族はゾアルおよびエグラ

六 テシリシヤにのがれ 哭つゝルヒテの坂をのぼり ホロナイムの途にて敗亡の聲をあぐ 六 ニムリムの水はかわき

七 草はかれ苗はつきて緑蔬あらず このゆるぎに彼等はその獲たる富とその藏めたる物をたづさへて柳の河をわた
 八 らん その泣號のこゑはモアブの境をめぐり 悲歎のこゑはエグライムにいたり なげきの聲はベエルエリムに
 九 いたる デモンの水は血にて充 われデモンの上にひとしほ禍害をくはへ モアブの遁れたる者とこの地の遺り
 たるものにとに獅をおくらん

第一六章

一 なんぢら荒野のセラより羔羊をシオンの女のおくりて國の首にをさむべし モアブの女輩
 二 はアルノンの津にありてさまよふ鳥のごとく巢をおはれたる雛のごとくなるべし 相謀りて審判
 三 をおこなひ 亭午にもなんぢの蔭を夜のごとくならしめ 驅逐人をかくし 遁れきたるものを顯はすなかれ わが
 四 驅逐人をなんぢとともに居しめ 汝モアブの避所となりて之をそこなふ者のまへより脱れしめよ 勒索者はうせ 害ふものはたえ暴虐者は地より絶れん
 五 ひとつの位あはれみをもて堅くたち眞實をおこなふ者そのうへに坐せ ん 彼ダビデの幕屋にをりて審判をなし 公平をもとめて義をおこなふに速し
 六 われらモアブの傲慢をきけりその高ぶること甚だし われらその誇とたかぶりと忿恚とをきけりその大言 はむなし
 七 この故にモアブはモアブの爲になきさけび民みな哭さけぶべし なんぢら必らず甚だしく心をいた
 八 めてキルハレステの乾葡萄のためになげくべし そはヘシボンの畑とシブマのぶだうの樹とは凋みおとろへ
 九 たりその枝さきにはヤゼルにまでいたりて荒野にはびこりのびて海をわたりしが 國々のもろもろの主その美は しき枝ををりたり
 十 この故にわれヤゼルの哭とひとしくシブマの葡萄の樹のためになかん ヘシボンよエレ
 十一 アレよわが涙なんぢをひたさん そは聞聲なんぢが果物なんぢが收穫の實のうへにおちきたればなり
 十二 欣喜と

イ王下二七・二五 二民二一・一三 へ詩七二・二、九六・ 一〇・一〇
 口王下二四・七 永但七・一四、二七、米 一三、九八・九 チ賽二八・二五 又王下三・二五
 ハ王下三・四 四・七、路一・三三 卜耶四八・二九 番二 耶四八・二〇 耶四八・三二 一三三
 四・七、路一・三三 卜耶四八・二九 番二 耶四八・二〇 耶四八・三二 一三三
 四・七、路一・三三 卜耶四八・二九 番二 耶四八・二〇 耶四八・三二 一三三

かれが堅固なるまちまちは昔イスラエルの子輩をさけてすてさりたる森のなか嶺のうへに今のこれる荒跡のごとく荒地となるべし 一〇 そは汝おのがすくひの神をわすれ己がちからとなるべき磐を心にとめざりしによる 二 このゆるゑになんぢ美しくしき植物をうる異やうの枝をさし 二一 かつ植たる日に籬をまはし朝に芽をいださしむれども患難の日といたましき憂の日ときたりて收穫の果はとびさらん

三 唉おほくの民はなりどよめけり海のなりどよめく如くかれらも鳴動めけりもろもろの國はなりひゞけり 三三 大水のなりひゞくが如くかれらも鳴響けり 三三 もろもろの國はおほくの水のなりひゞくがごとく鳴響かんされど神かれらを攻たまふべしかれら遠くのがれて風にふきさらるゝ山のうへの糝糠のごとくまた旋風にふきさらるゝ塵のごとくならん 三四 視よゆふぐれに恐怖あり いまだ黎明にいたらずして彼等は亡たりこれ我儕をかすむる者のうくべき報われらを奪ふものひくべき鬪なり

第一八章

一 唉エテオピアの河の彼方なるさやさやと羽音のきこゆる地 二 この地兼のふねを水にうかべ海路より使者をつかはさんとてその使者にいへらく疾走る使よなんぢら河々の流のわかるゝ國にゆけ 三 丈たかく肌なめらかなる始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人を踐にじる民にゆけ 三 すべて世にをるもの地にすむものよ山のうへに旗のたつとき汝等これを見ラツバの鳴響くときなんぢら之をきけ 四 そはエホバわれに如此いひ給へりいはく空はれわたり日てり收穫の熱むしてつゆけき雲のたるゝ間われわが居所にしづかに居てながめん 五 收穫のまへにその芽またく生その花ぶだうとなりて熟せんとするときかれ鎌をもて蔓をかり枝をきり去ん 六 斯てみな山のたけきとりと地の獸となげあたへらるべし猛鳥そのうへ

イ詩六八・一九 二詩八三・一三 何一 三〇・四、五、九 番 ト祭五・二六
 口耶六・二三 三・三 二・二二、三・一〇
 八詩九・五 水祭二〇・四、五 結 へ祭一八・七

テ詩六八・三一、七二 又詩一八・一〇、一〇 四三・二二 二〇・二三 力祭三〇・四 耶四六 三〇・二二 七・二六
一〇 祭一六・一 耶四六・一三 結二 四・三 ヲ士七・二三 母前一 ワ祭八・一九、四七 二六 結二九・一九 夕王下一九・二四 夕王上一〇・二八 歳 七・二六
番三・一〇 馬一・九、三〇 九、三〇 耶 四・一六、二〇 代下 一二 耶五一・三六 結 夕王上一〇・二八 歳 七・二六

七 にて夏をすごし地のけものその上にて冬をわたらん 七 そのとき河々の流のわかるゝ國の丈たかく肌なめらかなる始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人をふみにじる民より 萬軍のエホバにさゝぐる禮物をたづさへて 萬軍のエホバの聖名のところシオンの山にきたるべし

第十九章

一 エジプトにかゝる重負のよげんいはく

エホバははやき雲にのりてエジプトに來りたまふ エジプトのもろもろの偶像はその前にふるひ

二 をのゝきエジプト人のこゝろはその衷にて消ゆかん 我エジプト人をたけび勇ましめてエジプト人を攻しめ

三 ん斯てかれら各自その兄弟をせめおのおのその鄰をせめ 邑は邑をせめ國はくにを攻べし エジプト人の靈魂

うせてその中むなしくならん われその謀略をほろぼすべし かれらは偶像および呪文をとなふるもの巫女魔術者

四 にもとむることを爲ん われエジプト人を苛酷なる主人の手にわたさん あらあらしき王かれらを治むべし 是

主萬軍のエホバの聖言なり

六五 海の水はつき河もまた涸てかわかん 六 また河々はくさき臭をはなち エジプトの埴はみな漸次にへりて

七 かわき葦と蘆とかれはてん 七 ナイルのほとりの草原ナイルの岸にほどこかき所すべてナイルの最寄にまきたる

八 者はことごとく枯てちりうせん 八 漁者もまた歎き すべてナイルに釣をたるゝ者はかなしみ 網を水のうへに施

一〇九 ものはおとろふべし 練たる麻にて物つくるもの白布を織ものは恥あわて 一〇 その柱はくだけ一切のやとはれ

たる者のこゝろ憂ひかなしまん

二 誠やゾアンの諸侯は愚なりパロの最もかしこき議官のはかりごとは癡鈍べし 然ばなんぢら何でパロに

二 　むかひて我はかしこきものの子われは古への王の子なりといふを得んや　　三　なんぢの智者いづくにありや彼ら

三　もし萬軍のエホバの定めたまひしエジプトに係はることを曉得ばこれをなんぢに告るこそよけれ　　三　ゾアンの

もろもろの諸侯は愚かなりノアの諸侯は惑ひたりかれらはエジプトのもろもろの支派の隅石なるに却てエジブ

二四　トをあやまらせたり　　一四　エホバ曲れる心をその中にまじへ給ひしにより彼等はエジプトのすべて作ところを謬

一五　らせ恰かも酔る人の哇吐ときによろめくが如くならしめたり　　一五　エジプトにて或は首あるひは尾あるひは椶櫚の

えだまたは葦すべてその作ところの工なかるべし

一六　その日エジプトは婦女のごとくならん　萬軍のエホバの動かしたまふ手のその上にうごくが故におそれ

一七　をのゝくべし　　一七　ユダの地はエジプトに懼れらるこの事をかたりつぐれば聴くもの皆おそるこれ萬軍のエホバ、

エジプトに對ひて定めたまへる謀略の故によるなり

一八　その日エジプトの地に五の邑ありカナンの方言をかたりまた萬軍のエホバに誓ひをたてんその中のひと

つは日邑となへらるべし

一九　その日エジプトの地の中にエホバをまつる一つの祭壇ありその境にエホバをまつる一柱あらん　　三〇　これ

エジプトの地にて萬軍のエホバの徴となり證となるなりかれら暴虐者の故によりてエホバに號求むべければエ

二　ホバは救ふもの護るものを遣してこれを助けたまはん　　二二　エホバおのれをエジプトに知せたまはんその日エジ

三　プト人はエホバをしり犠牲と祭物とをもて之につかへん　誓願をエホバにたてよ成とぐべし　　三三　エホバ、エジプト

を撃たまはん　エホバこれを撃これを醫したまふこの故にかれらエホバに歸らん　エホバその懇求をいれて之を

イ 耶一・二〇　二九・一〇　イ 耶二・一四　二九・二五　イ 耶三・二七　二七
ロ 耶二・一六　二九・二四　ハ 王上三三・二二　三　ホ 耶五・三〇　翁三　ト 番三・九　四・四　番三二・一　二七
ハ 王上三三・二二　三　ホ 耶五・三〇　翁三　ト 番三・九　〇・二六、二七　又 馬一・二一

ル 一・一六 弗二・一〇 一・八、二一 一・二七 耶一三・二 三〇・三、五、七、
ヲ 詩一〇〇・三 弗二 王下一八・一七 三 弗八・一八 二、二六 米一・一六 三六・六
九・二三 何二・二三 カ 律前一九・二四 米 多 律後二〇・四 弗三 王下一八・二一 弗 九・一四

いやし給はん

三三 その日エジプトよりアツスリヤにかよふ大路ありてアツスリヤ人はエジプトにきたりエジプト人はアツ
スリヤにゆきエジプト人とアツスリヤ人と相共につかふることをせん

二四 その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし三あひならび地のうへにて福祉をうくる者となる
二五 べし 萬軍のエホバこれを祝して言たまはくわが民なるエジプトわが手の工なるアツスリヤわが産業なるイ
スラエルは福ひなるかな

第二〇章

一 アツスリヤのサルゴン王タルタンを遣してアシドドにゆかしむ彼がアシドドを攻てとりし年に
二 あたり この時エホバ、アモツの子イザヤに托てかたりたまはく往なんぢの腰よりあらたへの衣
三 をとき汝の足より履をぬげこゝに於てかれその如くなし赤裸跣足にて歩めり エホバ言給くわが僕イザヤは
四 三年の間はだかはだしにてあゆみエジプトとエテオピアとの豫兆となり奇しき標となりたり 斯のごとくエ

ジプトの虜とエテオピアの俘囚とはアツスリヤの王にひきゆかれその若きも老たるもみな赤裸跣足にて髻まで
五 もあらはしエジプトの恥をしめすべし かれらはその恃とせるエテオピアその誇とせるエジプトのゆるぎをもて
六 懼れはぢん その日この濱邊の民いはん視よわれらの恃とせる國われらが遁れゆきて助をもとめアツスリヤ

王の手より救出されんとせし國すでに斯のごとし我儕はいかにして脱かるゝを得んやと
一 うみべの荒野にかゝる重負のよげんいはく
二 荒野よりおそるべき地より南のかたの暴風のふきすぐるが如くきたれり われ苛き黙示をしめ

第二一章

一 うみべの荒野にかゝる重負のよげんいはく
二 荒野よりおそるべき地より南のかたの暴風のふきすぐるが如くきたれり われ苛き黙示をしめ

されたり 欺騙者はあざむき荒すものはあらずべし エラムよ上れメデアよかこめ 我すでにすべての歎息をやめ

しめたり 三 この故にわが腰は甚だしくいたみ 産にのぞめる婦人の如き苦しみ我にせまれり われ悶へ苦しみて

四 聞ことあたはず我をのきて見ことあたはず 四 わが心みだれまどひて憎き怖ること甚だし わが樂しめる夕は

五 かはりて懼れとなりぬ 五 彼らは席をまうけ筵をしきてくひのみす もろもろの君よたちて盾にあぶらぬれ 六 エ

七 ホバかく我にいひ給へり 汝ゆきて斥候をおきその見るところを告しめよ 七 かれ馬にのりて二列にならび來るも

八 のを見 また驢馬にのりたると駱駝にのりたるとをみば 耳をかたぶけて詳細にきくことをせしめよと 八 かれ獅

九 の如く呼はりて曰けるは わが主よわれ終日やぐらに立よもすがら斥候の地にたつ 九 馬にのりて二列にならびた

る者きたれり 彼こたへていはくバビロンは倒れたり 倒れたりそのもろもろの神の像はくだけて地にふしたり

一〇 蹂躪らるゝわが民よ わが打場のたなつものよ 我イスラエルの神萬軍のエホバに聞るところのものを汝に

つげたり 二 ドマに係るおもにの預言いはく

三 人ありセイルより我をよびていふ 斥候よ夜はなにのときぞ 斥候よ夜はなにの時ぞ 三 ものみ答へていふ

朝きたり夜またきたる 汝もしとはんとおもはゞ問 なんぢら歸りきたるべし

一三 アラビヤにかゝる重負のよげん 曰く

一四 デダンの客商よなんぢらはアラビヤの林にやどらん 一四 テマの地のたみよ水をたづさへて渴ける者を

一五 むかへ糧をもて逃遁れたるものを迎へよ 一五 かれらは刃をさけ 既にぬきたる劍すでに張たる弓およびたゝかひ

イ 賽三三・一
ロ 賽三三・一七 耶四
九・三四

ハ 賽一五・五、一六・
ホ 申二八・六七
ヘ 但五・五
ト 賽二一・九

チ 哈二・一
リ 耶五二・八 默一四
八、一八・二

ヌ 賽四六・一 耶五〇
ヤ 代上一・三〇 耶四
ル 耶五一・三三

ワ 耶四九・二八
カ 代上一・九、三二
二 阿一

ヨ賽一六・一四 ヴ賽三二・一三 ム王上七・二、一〇・ 下三二・四、五、三〇 オ耳一・二三
 夕詩一二〇・五 賽六 ソ耶四・一九、九・一 ナ耶四九・三五 平尼三・一六 ク耶九・三 賽一五・
 〇・七 ツ哀一・五、二・二 ラ賽一五・一 ウ王下二〇・二〇 代 ノ賽三七・二六 二米一・二六

一六 一の艱難をさけて逃きたれり 一六 一六 一六 一六
 一七 榮華はつきはてん 一七 一七 一七 一七
 神エホバのかたり給へるなり

第二章

一 異象の谷にかゝる重負のよげん 曰く
 二 なんぢら何故にみな屋蓋にのぼれるか 二 二 二 二 二
 三 汝はさわがしく喧すしき邑ほこりたのしむ邑なんぢ

四 うちの殺されたるものは剣をもて殺されしにあらず 亦たよかひにて死しにもあらず 三 三 三 三 三
 五 なんぢの有司はみな
 六 汝はさわがしく喧すしき邑ほこりたのしむ邑なんぢ

七 汝の民はとほくにげゆきしかど見出されて皆ともに縛められたり
 八 この故にわれいふ回顧てわれを見るなかれ 我いたく哭かなしまん わが民のむすめの害はれたるによりて我を
 九 ながさめんと勉むるなかれ

一〇 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五
 一〇 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九
 二 家はかぞへ且その家をこぼちて垣をかたくし 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

一〇 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九
 二 家をかぞへ且その家をこぼちて垣をかたくし 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
 三 されどこの事をなし給へるものを仰望まずこの事をむかしより營みたまへる者をかへりみざりき 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 四 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 五 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

喜びたのしみ牛をほふり羊をころし肉をくらひ酒をのみていふ我儕くらひ且のむべし明日はしぬべければなり
 一四 万軍のエホバ黙示をわが耳にきかしたまはくまことにこの邪曲はなんぢらが死にいたるまで除き清め
 らるるを得ずとこれ主萬軍のエホバのみことばなり

一五 主ばんぐんのエホバ如此のたまふゆけ宮ををさめ庫をつかさどるセブナにゆきていへ 一六 なんぢこゝに

何のかゝはりありや また茲にいかなる人のありとして己がために墓をほりしや 彼はたかきところに墓をほり磔
 一七 をうがちて己がために住所をつくれり 視よエホバはつよき人のなげうつ如くに汝をなげうち給はん 一八 なん

ぢを包みかためふりまはして闊かなる地に球のごとくなげいだしたまはん 主人のいへの恥となるものよ汝そこ
 一九 にて死そのえいぐわの車もそこにあらん 我なんぢをその職よりおひその位よりひきおとさん 二〇 その日われ

二 わが僕ヒルキヤの子エリアキムを召て なんぢの衣をきせ 汝の帯をもて固め なんぢの政權をその手にゆだね
 三 べし 斯て彼エルサレムの民とユダの家とに父とならん 我またダビデのいへの鑰をその肩におかん 彼あくれ

三 ばとづるものなく彼とづればあくるものなし 我かれをたて、堅處にうちし釘のごとくすべし 而してかれは
 四 その父の家のさかえの位とならん 二四 その父の家のもろもろの榮は彼がうへに懸る その子その孫およびすべて

五 の器のちひさきもの皿より瓶子にいたるまでも然らざるなし 二五 萬軍のエホバのたまはくその日かたき處にうち
 たる釘はぬけいで斫れておちん そのうへにかゝれる負もまた絶るべし 二六 これはエホバ語り給へるなり

一 ツロに係るおもにの預言いはく

タルシシのもろもろの舟よなきさけべ ツロは荒廢れて屋なく入べきところなければなり かれら

第二十三章

イ 五五六・二二 哥前 一 博前三・一四 結二 ホ王下一八・三七 賽 一 帖七・八
 一五・三三 四・一三 三六・三 七
 口 五・九 二 玉上四・六 二 王下一八・一八 へ 母後一八・一八 三 王下一八・一八 又 九・八
 一 七
 四 結二六・一 二 四
 二 七・一 二 八・一
 一 九 亞九・一

此事をキツテムの地にて告しらせらる。うみべの民よもだせ曩には海をゆきかふシドンの商賈くさぐさの物を
かしこに充せたり。ツロは大なる水をわたりくるシホルの種物とナイルがはの穀物とによりて收納をえたり
ツロはもろもろの國のつどふ市なりき。シドンよはづべしそは海すなはち海城かくいへり曰くわれ苦しまず
うまず壯男をやしなはず處女をそだてざりきと。この音信のエジプトにいたるとき彼等ツロのおとづれに
よりて甚くうれふべし。なんぢらタルシシにわたれ海邊のたみよ汝等なきさげぶべし。これは上れる世
いにしへよりありし邑おのが足にてうつり遠くたびすまひせる邑なんぢらの樂しみの邑なりしや
斯のごとくツロに對ひてはかりしは誰なるかツロは冕をさづけし邑その中のあきうどは君その中の貿易
するものは地のたふとき者なりき。これ萬軍のエホバの定め給ふところにしてすべて華美にかざれる驕奢を
けがし地のもろもろの貴者をひくゝしたまはんが爲なり。タルシシの女よナイルのごとく己が地にあふれよ
なんぢを結びかたむる帯ふたゝびなかるべし。エホバその手を海の上のべて國々をふるひうごかし給へり
エホバ、カナンにつきて詔命をいだしその保砦をこぼたしめたまふ。彼いひたまはく虐げられたる處女シドン
のむすめよ汝ふたゝびよろこぶことなかるべし。起てキツテムにわたれ彼處にてなんぢまた安息をえじ
カルデヤ人のくにを視よこの民はふたゝびあることなしアツスリヤ人この國を野のけもの居所にさだ
めたりかれら櫓をたてもろもろの殿をこぼちて荒墟となせり。タルシシのもろもろの舟よなきさげべなんぢ
の保砦はくだかれたり。その日ツロは七十年のあひだ忘れらるべしひとりの王のながらふる日のかずなり
七十年終りてのちツロは妓女のうたの如くならん。さきに忘れられたるうかれめよ琴をとりて城市をへめぐり

七 巧たくみに弾たじておほくの歌うたをうたひ人にふたゝび記念おぼひらるべし 七十なな年ねんをはりてエホバまたツロを顧かへみたまはん
 八 ツロはふたゝびその利潤くばさをえて地ちのおもてにあるもろもろの國くにと淫たはれをおこなふべし 一八 その貿易あきなひとその獲えたる
 利潤くばさとはきよめてエホバに獻さぐべければ之これをたくはへず積つことをせざるなりその貿易あきなひはエホバの前まへにをるもの
 の用ようとなり飽あくらふ料りやうとなり華美はなやかなるころもの料りやうとならん

第二四章

一 視みよエホバこの地ちをむなしからしめ荒廢あれたれしめこれを覆くつへしてその民たみをちらしたまふ 二 かく
 て民たみも祭司さいしもひとしく僕しもべも主しゆもひとしく下婢しためも主婦いへとじもひとしく買かひものも賣うひものもひとしく貸かす
 三 のも借かりものもひとしく利りをはたるものも利りをいだす者ものもひとしくこの事ことにあふべし 三 地ちはことごとく空ひたしく
 四 ことごとく掠かめられんとはエホバの言いひたまへるなり 四 地ちはうれへおとろへ世よは萎なえおとろへ地ちのたふときものも
 五 萎なえはてたり 五 民たみおきてにそむき法りををかしとこしへの契約けいやくをやぶりたるがゆゑに地ちはその下したにけがされたり
 六 このゆるゑに呪詛のろひは地ちをのみつくしそこに住するものは罪つみをうけまた地ちの民たみはやかれて僅わづかばかり遺のこれり 七 あた
 七 六 八 らしき酒さけはうれへ葡萄ぶどうはなえ 心こころたのしめるものはみな歎息たんそくせざるはなし 八 鼓つづみのおとは寂しまり歡よろこぶものの聲こゑは
 九 やみ琴ことの音ねもまたしづまれり 九 彼等かれらはふたゝび歌うたうたひ酒さけのます濃酒こゝろさけはこれをのむものに苦にがくなるべし 一〇 騒さわ
 一〇 ぎみだれたる邑まちはすでにやぶられ每家いへはことごとく閉とて人ひとのいるなし 一一 街頭ちやうには酒さけの故ゆゑによりて叫さけぶこゑあり
 一一 すべての歡喜よろこびはくらくなり地ちのたのしみは去さゆけり 一二 邑まちはあれすたれたる所ところのみのこりその門もんもこぼたれて
 一三 破やぶれぬ 一三 地ちのうちにもろもろの民たみのなかにて遺のこるものは橄欖かんらんの樹きのうたれしのちの果みの如ごとく葡萄ぶどうの收かり穫いは
 一四 はてしのちの實みのごとし

イ 歌一七・二二 二 結七・二二、二三 八 馬四・六 手 歌七・三四、一六、
 口 亞二四・二〇、二二 水 創三・一七 民 三五 十 賽一六・八九 耳 九、二五・一〇 結 一 賽一七・五六
 八 何四・九 三三 一・二〇、二二 二六・二三 何二

又馬一・二一 四八・四三、四四 啓一八・七七
 ル耶五・二一 五・一九 三耶四・二三
 王上一九・二七 耶七・創七・一一 夕察一九・二四
 ヲ詩七六・二二 二來二二・二二
 ツ歌一九・四、六 二九 結三二・七 八・二八
 耳二・三一、三・一五 詩九八・一
 一民二三・一九 夕歌二一・二三

一四 これらのもの聲をあげてよばはん エホバの稜威のゆるをもて海より歡びよばはん 一五 この故になんぢら

一六 東にてエホバをあがめ海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあがむべし 一六 われら地の極より歌をき

一七 けりいはく榮光はたゞしきものに歸すと

一七 われ云らく我やせおとろへたり我やせおとろへたり 我はわざはひなるかな 欺騙者はあざむき欺騙者は

一七 いつはりをもて欺むけり 地にすむものよ恐怖と陷阱と罟とはなんぢに臨めり 一八 おそのの聲をのがるゝ者は

一八 おとしあなたに陥りおとしあなたの中よりいつるものは罟にかゝるべしそは高處の窓ひらけ地の基ふるひうごけ

一九 ばなり 地は碎けにくだけ地はやぶれにやぶれ地は揺にゆれ 二〇 地はゑへる者のごとく躑きによるめき假廬

のごとくふりうごくその罪はそのうへにおもく遂にたふれて再びおくることなし

二二 その日エホバはたかき處にて高きところの軍兵を征め地にて地のもろもろの王を征めたまはん 二三 かれ

二三 らは囚人が阱にあつめらるゝごとく集められて獄中にとざされ 多くの日をへてのち刑せらるべし かくて

萬軍のエホバ、シオンの山およびエルサレムにて統治めかつその長老たちのまへに榮光あるべければ 月は面

あからみ日ははぢて色かはるべし

第二十五章

一 エホバよ汝はわが神なり 我なんぢを崇めなんぢの名をほめたゝへん 汝さきに妙なる事をおこな

二 ひ古時より定めたることを眞實をもて成たまひたればなり 二 なんぢ邑をかへて石堆となし 堅固

三 なる城を荒墟となし 外人の京都を邑とならしめず永遠にたつることを得ざらしめたまへり 三 この故につよき民

四 はなんぢをあがめ 暴びたる國々の城はなんぢをおそるべし 四 そはなんぢ弱きものの保砦となり 乏しきものの

難たやみのときの保たも砦とりでとなり 雨あめ風かぜのふききたりて垣かきをうつごとく暴あらしぶるものの荒あれきたるときさけどころの避ひ所ところとなり 熱あつをさくる
 蔭かげとなりたまへり 五 なんぢ外人あだしびとの喧さわ嘩やみをおさへて早あわける地ちより熱あつをとりのぞく如ごとくならしめ 暴あらしぶるものの凱かちうた歌た
 をとどめて雲くもの陰かげをもて熱あつをとどむる如ごとくならしめたまはん

六 萬まん軍ぐんのエホバこの山やまにてもろもろの民たみのために肥こえたるものをもて宴えんをまうけ 久ひさしくたくはへたる葡ぶ萄たう酒しゆ
 七 をもて宴えんをまうく 隨ずおほき肥こえたるもの久ひさしくたくはへたる清すめるぶだう酒しゆの宴えんなり 七またこの山やまにてもろもろの

八 民たみのかぶれる面かほ帕ほひともろもろの國くにのおほへる外おほ帳ひぎぬをとりのぞき とこしへまで死しを吞のみたまはん 主しゆエホバはす
 べての面かほより涙なみだをぬぐひ 全ぜん地ちのうへよりその民たみの凌はづ辱かしめをのぞき給たまはん これはエホバの語かたりたまへるなり

九 その日ひ此かく如ごといはんこれはわれらの神かみなりわれら俟まち望のぞめり彼かれわれらを救すくひたまはん 是これエホバなりわれら
 一〇 まちのぞめり我われ儕らそのすくひを歡よろこびたのしむべしと エホバの手みてはこの山やまにとどまりモアブはその處ところにて

二 あくたの水みづのなかにふまるゝ藁わらのごとく蹂ふ躪にじられん 彼かれそのなかにて游あそぶ者もののおよがんとして手てをのばすが如ごとく
 三 己おのが手てをのばさん 然されどエホバその手ての詭たは計かりとともにその傲たか慢ぶりを伏ふせたまはん 五 なんぢの垣かきたかき堅けん固こなる城しろは

エホバかたぶけたふし地ちにおとして塵ちりにまじへたまはん

第二十六章

一 その日ひユダの國くににてこの歌うたをうたはん われらに堅けん固こなる邑まちあり 神かみすくひをもてその垣かきその藩かこひと
 二 なしたまふべし 五 なんぢら門もんをひらきて忠ちゆう信しんを守まもるたゞしき國くに民びとをいれよ 三 なんぢは平やす康かちに
 四 やすきをもて心こころ志ざしかたき者ものをまもりたまふ 彼かれはなんぢに依より頼たのめばなり 四 なんぢら常とこ盤とほにエホバによりたため
 五 主しゆエホバはとこしへの巖いはなり 五 たかきに居するものを仆たふしそびえたる城しろをふせしめ地ちにふせしめて塵ちりにまじへ

イ賽四・六 二但七・一四 太八・二八
 口説九・二 太二二・四 一 一 へ何一三・一四 好前 ト黙七・一七、二一・四 リ詩二〇・五
 ハ賽二・二、三 水哥後三・一五 弗四 一五・五四 歌二〇 チ創四九・一八 多二 ヌ賽二六・五
 ル賽二・二一 二二〇
 フ賽六〇・一八 力賽四五・一七
 ワ詩一一八・一九、 日賽二五・二二、三三
 一九

多詩三七・二三
ツ傳八・一二種二・四
ウ賽二三・八 約一六 ノ結三七・二
レ賽六四・五
ネ詩一四三・一〇
ラ代下二二・八
オ但二二・二
ソ詩六三・六 歌三・一
ナ伯三四・二七 詩二
ム創五・一五
平詩一七・一四

七六 給へり かくて足これをおふまん 苦しむものは足にて之をおふみ 貧しき者はその上をおゆるまん 義きものの道

は直からざるなし なんぢ義きものの途を直く平らかにし給ふ

八 エホバよ審判をおこなひたまふ道にてわれら汝をまちのぞめり われらの心はなんぢの名となんぢの記念

九 の名をしたふなり わがこゝろ夜なんぢを慕ひたり わがうちなる靈あしたに汝をもとめん そは汝のさばき

一〇 地におこなはるゝとき世にすめるもの正義をまなぶべし 悪者はめぐまるれども公義をまなばず 直き地に

ありてなほ不義をおこなひエホバの稜威を見ることがをこのます

二 エホバよなんぢの手たかく擧れどもかれら顧みず 然どなんぢが民をすくひたまふ熱心を見ればはぢをいだ

三 かん 火なんぢの敵をやきつくすべし エホバよ汝はわれらのために平和をまうけたまはん 我儕のおこなひし

四 ことは皆なんぢの成たまへるなり エホバわれらの神よなんぢにあらぬ他の主ども曩にわれらを治めたり 然

どわれらはたゞ汝によりて汝の名をかたりつけん かれら死たればまたいきす 亡靈となりたればまた復らず

五 なんぢかれらを糺してこれを滅ぼしその記念の名をさへ悉くうせしめたまへり エホバよなんぢこの國民を

ましたまへり 此くにびとを増たまへり なんぢは尊ばれたまふ なんぢ地の界をことごとく擴めたまへり

一六 エホバよかれら苦難のときに汝をおふぎのぞめり 彼等なんぢの懲罰にあへるとき切になんぢに禱告せり

一七 エホバよわれらは孕める婦のうむとき近づきてくるしみ その痛みによりて叫ぶがごとく汝のまへに然ありき

一八 われらは孕みまた苦しみたれどその産るところは風にいたり われら救を地にほどこさず世にすむ者うまれい

一九 でざりき なんぢの死者はいきわが民の屍はおきん 塵にふすものよ醒てうたうたふべし なんぢの露は草木を

うるほす露のごとく地はなきたまをいださん

わが民よゆけなんぢの室にいり汝のうしろの戸をとちて忿^{いさとほり} 悲のすぎゆくまで暫時^{しほし}かくるべし ^ニ視よ
エホバはその處をいでて地にすむもの^の不義をたゞしたまはん 地はその上なる血をあらはにして殺^{ころ}されたる
ものをまた掩^{おほ}はざるべし

第二十七章

その日エホバは硬く大いなるつよき劍をもて疾走^{とくはし}るへびレビヤタン^{レビヤタンを}曲りうねる蛇^{へび}レビヤタンを
罰^{ばつ}しまた海にある鱈^{いわ}をころし給ふべし

その日^{この}如此^{ごと}うたはん^のうるはしき葡萄園あり之^{これ}をうたへよ われエホバこれを護^{まも}りをりをり水そよぎ

夜も晝もまもりて害^{あや}ふものあらざらしめん 我^{われ}にいきどほりなし願^{ねが}はくは荆棘のわれと戦^{たたか}はんことを然^さば
われすよみ迎^{むか}へて皆^{みな}もろともに焚^{やまつ}盡さん 寧^なろわが力^{ちから}にたよりて我^{われ}とやはらぎを結^{むす}べ われと平和^{やはらぎ}をむすぶ

後^{のち}にいたらばヤコブは根をはりイスラエルは芽をいだして花さきその實^みせかいの面^{おもて}にみちん

ヤコブ主^{しゅ}にうたるよといへども彼^{かれ}をうちしもの^の主^{しゅ}にうたるよが如^{ごと}きことあらんや 汝^{なんぢ}がヤコブを逐^{おひ}たまへる懲罰^{こらしめ}は度^{のり}にかなひぬ 東風^{こちう}のふき

彼^{かれ}をころしよもの^の殺^{ころ}さるよが如^{ごと}きことあらんや 汝^{なんぢ}がヤコブを逐^{おひ}たまへる懲罰^{こらしめ}は度^{のり}にかなひぬ 東風^{こちう}のふき

し日^ひなんぢ^のあらしき風^{かぜ}をもてこれをうつし給^{たま}へり 斯^かるがゆゑにヤコブの不義^{ふぎ}はこれによりて潔^{きよ}められん 此^これ

に因^よりてむすぶ果^みは罪^{つみ}をのぞくことをせん 彼^{かれ}は祭壇^{さいだん}の^のもろもろの石^{いし}を砕^{くだ}けたる石灰^{いしほひ}のごとくになし アシラの像^{ざう}と

日の像^{ざう}とをふたよび建^たることなからしめん 堅固^{けんこ}なる邑^{まち}はあれてすさまじく棄去^{すて}られたる家^{いへ}のごとく また荒野^{あれの}

のごとし 曠^{こう}このところにて草^{くさ}をはみ此^{この}所^{ところ}にてふし 且^{かつ}そこなる樹^きのえだをくらはん 二 二 其^{その}枝^{えだ}かるよとき

イ出^い一三二・二三三 八米^{やち}一・三 猶^{なほ}一四 二詩^に七四・一三、一四 へ察^へ五・一 二一 三詩^に一・二一、四、五 又^{また}察^{さつ}二五・四 一 耶^一一〇・二四、 一 耶^一一〇・二四、

口^く詩^し三〇・五 察^{さつ}五四 二詩^に七四・一三、一四 へ察^へ五・一 二一 三詩^に一・二一、四、五 又^{また}察^{さつ}二五・四 一 耶^一一〇・二四、 一 耶^一一〇・二四、

七、八 哥^か後^ご四・一七 未^み察^{さつ}五一・九 結^{くわつ}二九 ト詩^と八〇・八 耶^一二二 一 耶^一二二、一、四、五 又^{また}察^{さつ}二五・四 一 耶^一一〇・二四、 一 耶^一一〇・二四、

-

申三・二八 第一 三・一、七、四四・ツ太二四・三一 默 ナ察二八・四
三 耶八・七 二・二、二、二四 一・二、一、二五 ラ察三〇・三〇 結一 ム察二八・一
申三・二八 第四 ソ察二・一一 ネ察二八・三 三・二、一 ウ察二八・一
何四。 ノ察五六・一〇、一二

折^{せり}とらる婦人きたりてこれを焼^やん 折とらる婦人きたりてこれを焼ん 这是無知の民なるが故に之をつくれる者あはれま^すこれを形^{かた}づくれるもの恵^{めぐ}まざるべし

三 その日なんぢらイスラエルの子輩よ エホバは打落したる果をあつむるごとく 大河の流よりエジプトの川にいたるまでなんぢらを一つ一つにあつめたまふべし

三 その日大なるラツパ鳴ひどきアツスリヤの地にさすらひたる者エジプトの地におひやられたる者きたりてエルサレムの聖山にてエホバを拜むべし

第二十八章

一 酔るものなるエフライム人よなんぢらの誇の冠はわざはひなるかな 酒におぼるゝものよ肥たる谷の首にある凋んとする花のうるはしき飾はわざはひなるかな 二 みよ主はひとり^の力ある強剛者

二 をもち給へりそれは雹をまじへたる暴風のごとく壊りそこなふ狂風のごとく大水のあふれ漲るごとく烈しくかれを地になげうつべし 三 酔るものなるエフライム人のほこりの冠は足にて踐にじられん 肥たる谷のかし

三 らにある凋んとする花のうるはしきかざりは 夏こぬに熟したる初結の無花果のごとし 見るものこれをみて取る手おそしと香いるゝなり 四 その日萬軍のエホバその民ののこれる者のために榮のかんむりとなり美しき冠となり給はん 五 さばきの席にさするものには審判の靈をあたへ 軍を門よりおひかへす者には力をあたへ給ふべし

六 然どかれらも酒によりてよろめき濃酒によりてよろほひたり 祭司と預言者とは濃酒によりてよろめき酒にのまれ濃酒によりてよろほひ 而して黙示をみるときによろめき審判をおこなふときにも躓けり 八 膳には吐たるものと穢とみちて潔きところなし

イザヤ書 二七・一二——二八・八

九 かれは誰にをしへて知識をあたへんとするか 誰にしめして音信を曉らせんとするか 乳をたち懐をはなれ
 一〇 たる者にするならんか 一〇 そは誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度へのりをくはへ度へのりを

くはへ 此にもすこしく彼にもすこしく教ふ

二二 このゆるぎに神あだし唇と異なる舌とをもてこの民にかたりたまはん 曩にかれらに言たまひけるは此は

三 安息なり 疲困者にやすみをあたへよ 此は安慰なりとされど彼らは聞ことをせざりき 斯るがゆるぎにエホバの

言かれらにくだりて誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度へのりをくはへ度へのりをくはへ 此に

もすこしく彼にも少しくをしへん之によりて彼等すゝみてうしろに仆れそこなはれ罫にかゝりて捕へらるべし

二四 なんぢら此エルサレムにある民ををさむるところの輕慢者よエホバの言をきけ 二五 なんぢらは云り我ら

死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり 漲りあふるゝ禍害のすぐるときわれらに來らしそはわれら虚偽をもて

一六 避所となし欺詐をもて身をかくしたればなりと 一六 このゆるぎに神エホバかくいひ給ふ 視よわれシオンに一つの

石をすゑてその基となせり 此は試をへたる石たふとき隅石かたくすゑたる石なり 此に依頼むものはあわつ

一七 ることなし 一七 われ公平を準繩とし正義を錘とす 斯て雹はいつはりにてつくれる避所をのぞきさり水はその匿

れたるところに漲りあふれん 一八 汝らが死とたてし契約はきえうせ陰府とむすべるちぎりは成ことなしされば

一八 漲り溢るゝわざはひのすぐるとき汝等はこれに踐たふさるべし 一九 その過るごとになんぢらを捕へん 朝々に

二〇 すぎ晝も夜もすぐこの音信をきゝわきまふるのみにても憎きををるなり 二〇 その状は床みじかくして身をのぶる

二二 ことあたはず衾せまくして身をおほふこと能はざるが如し 二二 そはエホバ往昔ペラヂムの山にて起たまひしが

イ耶六・一〇 二創四九・二四 詩一 羅九・三三・一〇・ホ賽二八・二五
 口哥前二四・二二 一八・三三 太二二 一一 弗二・二〇 へ母後五・二〇 代上
 へ摩二・四 四二 徒四・二二 彼前二・六・七・八 一四・一一

ごどくにたちギベオンの谷にて忿恚をはなちたまひしが如くにいきどほり而してその所爲をおこなひ給はん
奇しき所爲なりその工を成たまはん異なる工なり 三三 この故になんぢら侮るなかれ恐くはなんぢらの縲紲きび
しくならん 我すでに全地のうへにさだまれる敗亡あるよしを主萬軍のエホバより聞たればなり

三三 なんぢら耳をかたぶけてわが聲をきけ懇ろにわが言をきくべし 二四のうふ 農夫たねをまかに何で日々たがへし
二四 日々その地をすきその土塊をくだくことのみを爲んや 二五 もし地の面をたひらかにせばいかで罌粟をまき馬芹

二五 の種をおろし小麥をうねにうる大麥をさだめたる處にうる粗麥を畔にうるざらんや 二六 斯のごときはかれの神
二六 これに智慧をあたへて教へたまへるなり 二七 けしは連枷にてうたす馬芹はそのうへに車輪をきしらせ罌粟を

二七 うつには杖をもちひ馬芹をうつには棒をもちふ 二八 麥をくだくか否くるまにきしらせ馬にふませて落すことは
二八 すれども斷ずしかするにあらずこれを砕くことをせざるべし 二九 此もまた萬軍のエホバよりいつその謀略は

二九 くすしくその智慧はすぐれたり

一 第二十九章 あゝアリエルよアリエルよ あゝダビデの營をかまへたる邑よ としに年をくはへ節會まはりきた
二 らば われアリエルをなやまし之にかなしみと歎息とあらしめん 彼をアリエルのごとき者とな
三 すべし われ汝のまはりに營をかまへ保砦をきづきて汝をかこみ 櫓をたてよなんぢを攻べし かくてなん
四 ぢは卑くせられ地にふしてもものいひ塵のなかより低聲をいだしてかたらん 汝のこゑは巫女のこゑのごとく地
五 よりいで汝のごとはは塵のなかより轉づるがごとし

然どなんぢのあだの群衆はこまやかなる塵の如くあらぶるものの群衆はふきさらるゝ糝糠の如くならん

六 俄にまたく間にこの事あるべし 萬軍のエホバはいかづち地震おほごる暴風つむじかぜ及びやきつくす火

七 の燄をもて臨みたまふべし 斯てアリエルを攻てたかふ國々のもろもろアリエルとその城とをせめたか

八 ひて難ますものはみな夢のごとく夜のまぼろしの如くならん 飢たるものの食ふことを夢みて醒きたればそ

の心なほ空しきがごとく渴けるものの飲ことを夢みて醒きたれば疲れかつ頻にのまんことを欲するがごとくシ

オンの山をせめて戦ふくにぐにの群衆もまた然あらん

九 なんぢらためらへ而しておどろかんなんぢら放肆にせよ而して目くらまんかれらは酔りされど酒のゆゑ

一〇 にあらずかれらはよろめけりされど濃酒のゆゑにあらず そはエホバ酣睡の靈をなんぢらの上にそぎ而し

二 てなんぢらの目をとぢなんぢらの面をおほひたまへりその目は預言者そのかほは先知者なり かゝるが故に

すべての黙示はなんぢらには封じたる書のことばのごとくなり 文字しれる人にわたして請これを讀といはん

三 答へて封じたるがゆゑによむこと能はずといはん また文字しらぬ人にわたして請これをよめといはん

こたへて文字しらざるなりといはん

一三 主いひ給はくこの民は口をもて我にちかづき口唇をもてわれを敬へどもその心はわれに遠かれりその

一四 われを畏みおそるは人の誠命によりてをしへられしのみ この故にわれこの民のなかにて再びくすしき事を

おこなはんそのわざは奇しくしていとあやしかれらの中なる智者のちゑはうせ聰明者のさときはかくれん

一五 己がはかりごとをエホバに深くかくさんとする者はわざはひなるかな暗中にありて事をおこなひていふ

一六 誰かわれを見んやたれか我をしらんやと なんぢらは曲れりいかで陶工をみて土塊のごとくおもふ可

イ賽三〇・一三 八賽三七・三六 へ賽二八・七、八 リ詩六九・二三 賽六 ル賽八・一六 ヲ結三三・三一 太一 カ西二・二二 哥前二・一九
口賽二八・二、三〇 二伯二〇・八 ト賽五一・二一 又母前九・九 二一五、九、六、一 五・八、九、可七、六、 ヨ哈一・五 三〇 ホ詩七三・二〇 又母前九・九 二一五、九、六、一 五・八、九、可七、六、 ヨ哈一・五 夕耶四九・七 阿八 ソ詩九四・七

ツ 賽四五・九 羅九・ム 賽二・五
 二〇 二〇 賽二八・一四、二二
 一 賽三三・一五 半米二・一
 二 賽三五・五 ノ 廢五・一〇、一二
 三 賽六一・一 才 二八・二一
 四 賽二八・七
 五 賽二九・一五
 六 賽二九・一九
 七 賽二七・二二、二九
 八 賽二七・二二、二九
 九 賽二七・二二、二九
 一〇 賽二七・二二、二九
 一一 賽二七・二二、二九
 一二 賽二七・二二、二九
 一三 賽二七・二二、二九
 一四 賽二七・二二、二九
 一五 賽二七・二二、二九
 一六 賽二七・二二、二九
 一七 賽二七・二二、二九
 一八 賽二七・二二、二九
 一九 賽二七・二二、二九
 二〇 賽二七・二二、二九
 二一 賽二七・二二、二九
 二二 賽二七・二二、二九
 二三 賽二七・二二、二九
 二四 賽二七・二二、二九
 二五 賽二七・二二、二九
 二六 賽二七・二二、二九
 二七 賽二七・二二、二九
 二八 賽二七・二二、二九
 二九 賽二七・二二、二九
 三〇 賽二七・二二、二九
 三一 賽二七・二二、二九
 三二 賽二七・二二、二九
 三三 賽二七・二二、二九
 三四 賽二七・二二、二九
 三五 賽二七・二二、二九
 三六 賽二七・二二、二九
 三七 賽二七・二二、二九
 三八 賽二七・二二、二九
 三九 賽二七・二二、二九
 四〇 賽二七・二二、二九
 四一 賽二七・二二、二九
 四二 賽二七・二二、二九
 四三 賽二七・二二、二九
 四四 賽二七・二二、二九
 四五 賽二七・二二、二九
 四六 賽二七・二二、二九
 四七 賽二七・二二、二九
 四八 賽二七・二二、二九
 四九 賽二七・二二、二九
 五〇 賽二七・二二、二九
 五一 賽二七・二二、二九
 五二 賽二七・二二、二九
 五三 賽二七・二二、二九
 五四 賽二七・二二、二九
 五五 賽二七・二二、二九
 五六 賽二七・二二、二九
 五七 賽二七・二二、二九
 五八 賽二七・二二、二九
 五九 賽二七・二二、二九
 六〇 賽二七・二二、二九
 六一 賽二七・二二、二九
 六二 賽二七・二二、二九
 六三 賽二七・二二、二九
 六四 賽二七・二二、二九
 六五 賽二七・二二、二九
 六六 賽二七・二二、二九
 六七 賽二七・二二、二九
 六八 賽二七・二二、二九
 六九 賽二七・二二、二九
 七〇 賽二七・二二、二九
 七一 賽二七・二二、二九
 七二 賽二七・二二、二九
 七三 賽二七・二二、二九
 七四 賽二七・二二、二九
 七五 賽二七・二二、二九
 七六 賽二七・二二、二九
 七七 賽二七・二二、二九
 七八 賽二七・二二、二九
 七九 賽二七・二二、二九
 八〇 賽二七・二二、二九
 八一 賽二七・二二、二九
 八二 賽二七・二二、二九
 八三 賽二七・二二、二九
 八四 賽二七・二二、二九
 八五 賽二七・二二、二九
 八六 賽二七・二二、二九
 八七 賽二七・二二、二九
 八八 賽二七・二二、二九
 八九 賽二七・二二、二九
 九〇 賽二七・二二、二九
 九一 賽二七・二二、二九
 九二 賽二七・二二、二九
 九三 賽二七・二二、二九
 九四 賽二七・二二、二九
 九五 賽二七・二二、二九
 九六 賽二七・二二、二九
 九七 賽二七・二二、二九
 九八 賽二七・二二、二九
 九九 賽二七・二二、二九
 一〇〇 賽二七・二二、二九

んや 造られし者おのれを作れるものをさして我をつくれるにあらずといふをえんや 形づくられたる器はかたち
 づくりし者をさして智慧なしといふを得んや

暫くしてレバノンのはかりて良田となり 良田は林のごとく見ゆるとききたるならずや 謙だるものはエホバによりてその歡喜

この書のことばをきく盲者の目はくらきより闇よりみることを得べし 暴るものはたえ侮慢者はうせ邪曲の

をまし人のなかの貧きものはイスラエルの聖者によりて快樂をうべし かれらは訟をきく時まげて人をつみし邑門にていさむ

機をうかどふ者はことごとく斷滅さるべければなり 義人をしりぞく

るものを謀略におとしいれ 虚しき語をかまへて 義人をしりぞく

この故にむかしアブラハムを贖ひたまひしエホバはヤコブの家につきて如此いひたまふヤコブは今より

恥をかうむらず その面はいまより色をうしなはず かれの子孫はその中にわがおこなふ手のわざをみんその

時わが名を聖としヤコブの聖者を聖としてイスラエルの神をおそるべし 心あやまれるものも知識をえつづ

やけるものも教誨をまなばん

エホバのたまはく 悖れる子輩はわざはひなるかな かれら謀略をすれども我によりてせず 盟を

第三〇章 必ずしもわが靈にしたがはず ますます罪につみをくはへん かれらわが口にとはずして エジ

プトに下りゆきバロの力をかりておのれを強くしエジプトの蔭によらん 巴ロのちからは反てなんぢらの恥と

なりエジプトの蔭によるは反てなんぢらの辱かしめとなるべし かれの君たちはゾアンにあり かれの使者

五 たちはハネスにきたれり かれらは皆おのれを益することあたはざる民によりて恥をいなくかの民はたすけ
とならず益とならずかへりて恥となり謗となれり

六 南のかたの牲畜にかゝる重負のよげん曰く

七 かれらその財貨を若き驢馬のかたにおはせせその寶物を駱駝の背におはせて 牝獅 牡獅 まむし及びとび
かける蛇のいづる苦しみと艱難との國をすぎて 己をえきすること能はざる民にゆかん 七 そのエジプトの助は
いたづらにして虚しこのゆゑに我はこれを休みをるラハブとよべり

八 いま往てこれをその前にて牌にしるし書にのせ 後の世に傳へてとこしへに證とすべし 九 これは悖れる民

一〇 いつはりをいふ子輩 エホバの律法をきくことをせざる子輩なり 一〇 かれら見るものに對ひていふ見るなかれと
黙示をうる者にむかひていふ直きことを示すなかれ 滑かなることをかたれ虚偽をしめせ 二 なんとちら大道をさ

三 り逕をはなれ われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれと 三 此によりてイスラエルの聖者かくいひ
給ふ なんぢらこの言をあなたより暴虐と邪曲とをたのみて之にたよれり 三 斯るがゆゑにこの不義なんぢらには

四 凸出しておちんとするたかき垣のさけたるところのごとくその破壊にはかに暫しが間にきたらんと 一四 主これを
破りあだかも陶 工の瓶をくだきやぶるがごとくして惜みたまはずその碎のなかに爐より火をとり池より水を

くむほどの一片だに見出すことなからん

一五 主エホバ、イスラエルの聖者かくいひたまへり なんぢら立かへりて靜かにせば救をえ 平穩にして依頼ま

ば力をうべしと 然どなんぢらこの事をこのまざりき 一六 なんぢら反ていへり 否われら馬にのりて逃走らんと

イ耶二・三六 何八 八申八・一五 一四・三〇・一 一・二二・七・一三 二・二二

口察五七・九 何八 二耶三七・七 永哈二・二 一申三二・二〇 賽一 米二・六 一詩六二・三

九、一二・一 永哈二・二 一申三二・二〇 賽一 米二・六 一詩六二・三 又賽二九・五

ル詩二・九 耶一九・ワ太二三・三七

カ利二六・八 申二八 詩二・一二、三四、
 二五、三三、三〇 八 箴一六・二〇 王上三三・二七 詩
 書二三・一〇 耶一七・七 一三二・二 詩 一
 ソ詩七四・九 歴八・ 未代下三一・一 賽二
 ・二〇、三一・七 八 太六・三三 提前四
 ナ何一四・八 一三二・二 一四、一五、
 ム賽二・一四、一五、 四四・三
 ウ賽六〇・一九、二〇

一七 この故になんぢら逃走らん 又いへりわれら疾きものに乘んとこの故になんぢらを追もの疾かるべし ひとり
 叱咤すれば千人にげはしり 五人しつたすればなんぢら逃走りてその遺るものは僅かに山嶺にある杆のごとく
 岡のうへにある旗のごとくならん

一八 エホバこれにより俟てのち恩恵を汝等にほどこしこれにより上りてのちなんぢらを憐れみたまはん エホ

一九 バは公平の神にましませり 凡てこれを俟望むものは福ひなり シオンにをりエルサレムにをる民よなんぢは
 再びなくことあらじそのよばはる聲に應じて必ずなんぢに恵をほどこしたまはん 主きたまふとき直にこたへ

二〇 たまふべし 主はなんぢらになやみの糧とくるしみの水とをあたへ給はん なんぢを教るもの再びかくれじ 汝
 の目はその教るものを恒にみるべし なんぢ右にゆくも左にゆくもその耳にこれは道なりこれを歩むべしと

二一 後邊にてかたるをきかん 又なんぢら白銀をおほひし刻める像とがねをはりし鑄たる像をけがれとし穢物の
 ごとく打棄ていはん 去れと

二三 なんぢが地にまく種に主は雨をあたへ また地になりいづる糧をたまふ その土産こえて豊かならん その
 日なんぢの家畜はひろき牧場に草をはむべし 地をたがへす牛と驢馬とは團扇にてあふぎ箕にてとほし鹽をく

二四 はへたる飼料をくらはん 大なる殺戮の日やぐらのたふるゝ時もろもろのたかき山もろもろのそびえたる嶺に
 河とみづの流とあるべし かくてエホバその民のきずをつゝみそのうたれたる創痕をいやしたまふ日には

二五 月のひかりは日の光のごとく日のひかりは七倍をくはへて七の日のひかりの如くならん
 視よエホバの名はとほき所よりきたりそのはげしき怒はもえあがる焰のごとくその唇はいきどほりにて

二六

二七

イザヤ書

三〇・一七—二七

一二三

二八 みちその舌はやきつくす火のごとく 二八 その氣息はみなぎりて項にまでいたる流のごとし且ほろびの篩にて
 二九 もろもろの國をふるひ又まどはす韁をもろもろの民の口におきたまはん 二九 なんぢらは歌うたはん節會をまもる
 三〇 夜のごとしなんぢらは心によるこばん笛をならしエホバの山にきたりイスラエルの磐につくとき（三〇）の如し 三〇 エ
 ホバはその稜威のこゑをきかしめ 烈しき怒をはなちて焼つくす火のほのほと暴風と大雨と雹とをもてその臂の
 三二 くだることを示したまはん 三二 エホバのこゑによりてアツスリヤ人はくじけん 主はこれを笞にてうち給ふべし
 三三 エホバの豫じめさだめたまへる杖をアツスリヤのうへにくはへたまふごとに 鼓をならし琴をひかん 主は
 三三 うごきふるふ戰鬪をもてかれらとたゝかひ給ふべし 三三 トペテは往古よりまうけられまた王のために備へられ
 たりこれを深くしこれを廣くしこゝに火とおほくの薪とをつみおきたり エホバの氣息これを硫黄のながれの
 ごとくに燃さん

第三二章

一 助をえんとてエジプトにくだり馬によりたのむものは禍ひなるかな 戰車おほきが故にこれに
 たのみ騎兵はなはだ強きがゆるに之にたのむされどイスラエルの聖者をあふがずエホバを求るこ
 二 とをせざるなり 二 然はあれどもエホバもまた智慧あるべし かならず禍害をくだしてその言をひるがへしたま
 三 はず起てあしきものの家をせめ また不義を行ふ者の助をせめ給はん 三 かのエジプト人は人にして神にあらす
 その馬は肉にして靈にあらす エホバその手をのばしたまはゞ助くるものも躓きたすけらるゝ者もたふれてみな
 ひとしく亡びん
 四 エホバ如此われにいひたまふ 獅のほえ壯獅の獲物をつかみてほえたけれるとき 許多のひつじかひ相呼つ

イ賽一・四 撒後二 八賽三七・二九 へ賽二九・六 ち賽三七・三六 結一七・一五 力但九・一三何七・七 何一・一〇 歴三
 八 二詩四二・四 ト賽二八・二、三三 一 九 又賽一一・一五、一九 又賽三〇・二、三六、六 九 日民二三・一九 八
 口賽八・八 ホ賽二・三 一九 又賽一一・一五、一九 又賽三〇・二、三六、六 九 夕詩一四六・三、五

ソ 第四二・一三
ツ 中三二・一一 詩九
一・四
ネ 詩三七・四〇
ム 賽二・二〇、三〇、
二二二
六 賽三七・三六
五 何三・五
四 賽二九・一八、三五
ナ 何九・九
牛 賽三七・三七
九・九
五・六
ラ 王上一二・三〇
ウ 王下一九・三五、三
ノ 詩四五・一 耶二三
オ 賽四・六、二五・四

どひてむかひゆくともその聲によりて挫けずその喧嘩しきによりて臆せざるごとく萬軍のエホバくだりてシ
五 ンの山およびその岡にて戦ひ給ふべし 鳥の雛をまもるがごとく萬軍のエホバはエルサレムをまもりたまはん
六 これを護りてこれをすくひ踰越てこれを援けたまはん イスラエルの子輩よなんぢらさきには甚だしく主にそ
七 むけり今たちかへるべし なんぢらおのが手につくりて罪ををかしし白銀のぐうざう黄金の偶像をその日おの
八 おのなげすてん 爰にアツスリヤびとは劍にてたふれんされど人のつるぎにあらず 劍かれらをほろぼさんさ
九 れど世の人のつるぎにあらず かれら劍のまへより逃はしりその壯きものは役丁とならん かれらの誓はおそ
れによりて逝去りその君たちは旗をみてくじけん ことはエホバの御言なり エホバの火はシオンにありエホバの
爐はエルサレムにあり

第三二章

一 茲にひとりの王あり正義をもて統治めその君たちは公平をもて宰さどらん 二 また人ありて風の
さけどころ暴雨ののがれどころとなり 早ける地にある水のながれのごとく倦つかれたる地にある
三 大なる岩陰の如くならん 四 見るものの目はくらまず 聞ものの耳はかたぶけきくをうべし 五 躁がしきもの
五 心はさとりて知識をえ 吃者の舌はすみやけくあざやかに語るをうべし 六 愚かなる者はふたゝび尊貴とよばるゝ
六 ことなく狡猾なる者はふたゝび大人とよばるゝことなかるべし 七 そは愚なるものは愚なることをかたりその
七 心に不義をかもし邪曲をおこなひ エホバにむかひて妄なることをかたり 飢たる者のこゝろを空しくし 渴けるも
七 の飲料をつきはてしむ 八 狡猾なるものの用ゐる器はあしし 彼あしき企圖をまうけ 虚偽のことばをもて苦しむ
八 者をそこなひ 乏しき者のかたること正理なるも尙これを害へり 九 たふとき人はたふとき謀略をまうけ 恒にたふ

とき事をおこなふ

九 安逸にをる婦等よおきてわが聲をきけ 思煩ひなき女等よわが言に耳を傾けよ 思煩ひなきをんな

一〇 たちよ一年あまりの日をすぎて惜きあわてん そは葡萄の收穫むなく果ををさむる期きたるまじければなり

二 やすらかにをる婦等よふるひおそれよ おもひわづらひなき者よをのゝきあわてよ 衣をぬぎ裸躰になりて

三 腰に鹿服をまとへ かれら良田のため實りゆたかなる葡萄の樹のために胸をうたん 棘と荊わが民の地に

四 はえ 樂みの邑なるよろこびの家々にもはえん そは殿はすてられにぎはひたる邑はあれすたれ オペルと櫓

五 とはとこしへに洞穴となり 野の驢馬のたのしむところ羊のむれの草はむところとなるべし されど遂には

靈うへより我儕にそゝぎて 荒野はよき田となり 良田は林のごとく見ゆるとききたらん

六 そのとき公平はあれのにすみ 正義はよき田にをらん かくて正義のいさをは平和 せいぎのむすぶ果は

七 とこしへの平穩とやすきなり わが民はへいわの家にをり 思ひわづらひなき住所にをり 安らかなる休息所に

八 をらん されどまづ霜ふりて林くだけ 邑もことごとくたふるべし なんぢらもろもろの水のほとりに種を

おろし 牛および驢馬の足をはなちおく者はさいはひなり

第三三章

一 禍ひなるかななんぢ害はれざるに人をそこなひ 欺かれざるに人をあざむけり なんぢが害ふと

二 と終らば汝そこなはれ なんぢが欺くことはてなば汝あざむかるべし エホバよわれらを恵み給へ

三 われらなんぢを俟望めり なんぢ朝ごとにわれらの臂となり また患難のときにわれらの救となりたまへ

四 とどろく聲によりてもろもろの民にげはしり なんぢの起たまふによりてもろもろの國はちりうせぬ 蝨賊の

イザ六・一 八三三・二 二二二八 二二二九・一七、三五 ト三三・一八 又三三〇・二四 三三三・一〇
ロ三三・一三 何九 二二二七・一〇 二二二九・一七、三五 三三三・三〇 三三三・二二 二二二九・一七、三五 三三三・一〇
ホ三三・一〇 四・三〇 耳 二二二 二二二九・一七、三五 三三三・一〇 三三三・二二 二二二九・一七、三五 三三三・一〇

カ詩九七・九
 王下一八・一八、三
 タ士五・六
 王下一八・二四—
 ツ詩一二・五
 ナ賽九・二八
 ム詩一五・二、二四・四
 ウ詩一九・三七
 牛野前一・二〇
 ソ賽二四・四
 木詩七・一四
 賽五九
 ラ賽四九・一

ものをはみつくすがごとく人なんぢらの財をとり盡さん また蝗のとびつどふがごとく人なんぢらの財にとびつ

どふべし エホバは最たかし高處にすみたまふなり エホバはシオンに公正と正義とを充せたまひたり

んぢの代はかたくたち 救と智慧と知識とはゆたかにあらん エホバをおそるゝは國の寶なり

視よかれらの勇士は外にありてさけび 和をもとむる使者はいたく哭く 大路あれすたれて旅客たえ敵

は契約をやぶり諸邑をなみし人をもよかずとせず 地はうれへおとろへレバノンは恥らひて枯れシヤロン

はアラバの如くなりバシヤンとカルメルとはその葉をおとす エホバ言給はくわれ今おきん今たゝん今み

づからを高くせん なんぢらの孕むところは糶糠のごとくなんぢらの生ところは藁のごとしなんぢらの氣息

は火となりてなんぢらを食ひつくさん もろもろの民はやかれて灰のごとくなり荆のきられて火にもやされ

たるが如くならん

なんぢら遠にあるものよわが行ひしことをきけ なんぢら近にあるものよわが能力をしれ シオンの罪

人はおそる戦慄はよこしまなる者にのぞめり われらの中たれか焼つくす火に止ることを得んや我儕のうち誰か

とこしへに焼るなかに止るをえんや 義をおこなふもの直をかたるもの虐げてえたる利をいとひすつるもの

手をふりて賄賂をとらざるもの 耳をふさぎて血をながす謀略をきかざるもの 目をとちて悪をみざる者

る人はたかき處にすみかたき磐はその櫓となりその糧はあたへられその水はともしきことなからん

なんぢの目はうるはしき状なる王を見とほくひろき國をみるべし 汝の心はかの懼しかりしことどもを

思ひいでん 會計せし者はいづくにありや 貢をはかりし者はいづくにありや 櫓をかぞへし者はいづくにありや

一九 汝ふたゝび暴民をみざるべしかの民の言語はふかくして悟りがたくその舌は異にして解がたし
 二〇 節會の邑シオンを見よなんぢの目はやすらかなる居所となれるエルサレムを見んエルサレムはうつさるゝこと

二 なき幕屋にしてその杙はとこしへにぬかれずその繩は一すぢだに断れざるなり
 三 いまして稜威をあらはし給はん斯てそのところはひろき川ひろき流あるところとなりてその中には漕舟もいら

三 ず巨艦もすぐることなかるべし
 三 三 エホバはわれらを鞠きたまふもの エホバはわれらに律法をたてたまひし者

三 三 エホバはわれらの王にましまして我儕をすくひ給ふべければなり
 三 三 なんぢの船纜はとけたりその桅杆のもと
 二 二 を結びかたむることあたはず帆をあぐることにあたはずその時おほくの財をわかち跛者までも掠物あらん

しここに住るものの中われ病りといふ者なし彼處にをる民の咎はゆるされん

第三四章

一 もろもろの國よちかづきてきけもろもろの民よ耳をかたぶけよ地と地にみつるもの世界とせか
 一 一 いより出るすべての者きけ
 二 二 エホバはよろづの國にむかひて怒りそのよろづの軍にむかひて

三 三 忿恚りかれらをことごとく滅しかれらを屠らしめたまふ
 三 三 かれらは殺されて抛棄られその屍の臭氣たちの

四 四 ぼり山はその血にて融されん
 四 四 天の萬象はきえうせもろもろの天は書卷のごとくにまかれんその萬象のおつ

五 五 るは葡萄の葉のおつるがごとく無花果のかれたる葉のおつるが如くならん
 五 五 わが劍は天にてうるほひたり視よ

六 六 エドムの上にくだり滅亡に定めたる民のうへにくだりて之をさばかん
 六 六 エホバの劍は血にてみち脂にてこえ

小羊と山羊との血 牡羊の腎のあぶらにて肥ゆ
 七 七 エホバはボズラにて牲のけものをころしエドムの地にて大に

七 七 ぼふることをなし給へり
 七 七 その屠場には野牛こうし牡牛もともに下るそのくには血にてうるほされその塵は

イ王下一九・三二 詩四八・一二 水祭五四・二
 口申二八・四九・五〇 二詩四六・五、一二五 水祭三七・三三
 耶五・二五 二・二 ト雅四・二二 三詩八九・二八 ル申三三・一
 三二・七、八 耳二・ 三・一〇
 三・一、三・一五、 カ歌六・一四
 太二四・二九 彼後 三祭一四・二二
 二歌六・二三 二歌四六・一〇
 ソ耶四九・七馬一・四

あぶらにて肥こさるべし

九八 ^ハこはエホバの仇あをかへしたまふ日ひにしてシオンうたへの訟うたへのために報むくをなしたまふ年としなり ^九エドムエドムのもろもろ

一〇 河かははかはりて樹脂やにとなりその塵ちりはかはりて硫磺ゆわうとなりその土つちはかはりてもゆる樹脂やにとなり ^{一〇}晝ひるも夜よるもきえ

二 ずその烟けぶりつくる期ときなく上騰たちのぼらんかくて世々よよあれすたれ永遠とこしへまでもその所ところをすぐる者ものなかるべし ^{一一}鵜うと刺蝟はりねづと

そこを己おのがものとなし鷺さぎと鴉からすとそこにすまんエホバそのうへに亂みだれをおこす繩なはをはり空虚むなしきをきたらする錘おもしをさげ

三 給たまふべし ^{二三}國くにをつぐべき者ものをたてんとて貴たふとまもの者ものふたよび呼よびあつじ集あつることをせじもろもろの諸侯きみたちはみな失うせてなく

三 なるべし ^{二三}その殿とのにはことごとく荊いばらはえ城しろにはことごとく刺草いらつきと薊あざみとはえ野犬のいぬのすみか駝鳥たてうの場にはとならん

一四 野ののけものと豺狼おほかみとこゝにあひ 牡山羊をやぎその友ともをよび 鴟鴞ふくろふもまた宿やどりてこゝを安所やすみどころとせん ^{一五}蛇へびこゝに穴あなを

つくり卵たまごをうみてこれを孕かへしおのれの影かげの下したに子こをあつむ 鳶とびもまたその偶ともとともに此處こゝにあつまらん

一六 なんぢらエホバの書ふみをつまびらかにたづねて讀よむべしこれらのもの一つも缺かることなく又またひとつもその偶とも

一七 をかくものあらじそはエホバの口くちこのことを命めいじその靈みたまこれらを集あつめたまふべければなり ^{一七}エホバこれらの

ものに鬪くじをひかせ手てづから繩なはをもて量はかりこの地ちをわけあたへて永ながくかれらに保たもたしめ世々よよにいたるまでこゝに

住すましめたまはん

第三五章

一 荒野あれのとうるほひなき地ちとはたのしみ 沙漠さばくはよろこびて番紅さふらんの花はなのごとくに咲さきかゞやかん ^二盛さかん
に咲さきかゞやきてよろこび且かつよろこび且かつうたひレバノンの榮さかえをえカルメルおよびシヤロンの美うらはしき

を得えんかれらはエホバのさかえを見みわれらの神かみのうるはしきを見るべし

三 なんぢら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ 心さわがしきものに對ていへなんぢら雄々

四 しかれ懼るゝなかれなんぢらの神をみよ刑罰きたり神の報きたらん 神きたりてなんぢらを救ひたまふべし

五 そのとき替者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり啞者の

六 舌はうたうたはん そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり やけたる沙は池となりうるほひなき

七 地はみづの源となり野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあふ所となるべし かしこに大路ありそのみちは

八 聖道となへられん 穢れたるものはこれを過ることあたはずたゞ主の民のために備へらる これを歩むものは

九 おろかなりとも迷ふことなし かしこに獅をらずあらしき獸もその路にのぼることなし 然ばそこにて之にあふ

一〇 事なかるべしたゞ贖はれたる者のみそこを歩まん エホバに贖ひすくはれし者うたうたひつゝ歸てシオンに

きたりその首にとこしへの歡喜をいたゞき樂とよるこびとをえん 而して悲哀となげきとは逃さるべし

第三十六章

一 ヒゼキヤ王の十四年にアツスリヤの王セナケリブ上りきたりてユダのもろもろの堅固なる邑をせ

二 めとれり アツスリヤ王ラキシよりラブシヤケをエルサレムに遣はし大軍をひきゐてヒゼキヤ王

三 のもとに往しむラブシヤケ漂工の野のおほぢの傍なる上の池の樋にそひてたてり この時ヒルキヤの子なる

四 家司エリアキム書記セブナ、アサフの子なる史官ヨア出てこれを迎ふ

五 ラブシヤケかれらにいひけるはなんぢら今ヒゼキヤにいへ大王アツスリヤの王かくいへりなんぢの恃と

六 するその恃むところは何なるか 我いふなんぢが説ところの軍のはかりごととその能力とはたゞ口唇のことば

のみ 今なんぢ誰によりたのみて我にさかふことをなすや 視よなんぢエジプトに依頼めりこれ傷める葦の杖

イ伯四・三、四來一二・三、四、四二・七、三〇、二二・一四、三三、五・八、九徒三・二、三三、三三、一一・一九、約七・三八、チ察五二・一、耳三・一、太九・二七、一・一、約九・六、七、二太二・一五、一五・三、八・七、一四・八、二二、一五・三〇、三九、一七、默二一・二七、口察二九・一八、三三、五、一・二、二二、二〇、太二・一五、可七、〇、三二・一四、約、ホ察三三・四、太九・一、察四一・一八、四三、ト察三四・一三、リ利二六・六、察一一

によりたのめるがごとしもし人これに倚もたればその手をつきさよれんエジプト王パロがすべて己によりた

七 のむものに對するは斯のごとし 汝われらはわれらの神エホバに依頼めりと我にいはんかそは曩にヒゼキヤ

が高きところと祭壇とをみな取去てユダとエルサレムとにむかひ汝等こゝなる一つの祭壇のまへにて拜すべしと

八 いへる夫ならずや いま請わが君アツスリヤ王に賭をせよわれ汝に二千の馬を與ふべければ汝よりこれに

九 乗ものをいませ 果して出しうべしや 然ばいかで我君のいとちひさき僕の長一人をだに退くることを得んや

一〇 なんぞエジプトによりたのみて戦 車と騎兵とをえんとするや いま我のほりきたりてこの國をせめほるほす

はエホバの旨にあらざるべけんや エホバわれにいひたまはくのほりゆきてこの國をせめほるほせと

二 爰にエリアキムとセブナとヨアと共にラブシヤケにいひけるは請スリアの方言にて僕輩にかたれ我儕これ

三 をさとりうるなり石垣のうへなる民のきくところにてはユダヤの方言をもてわれらに語るなかれ ラブシヤケ

いひけるは わが君はこれらのことをなんぢの君となんぢとのみ語らんために我をつかはしよならんや なんぢ

らと共におのが糞をくらひおのが溺をのまんとする石垣のうへに坐する人々にも我をつかはしよならずや

三 斯てラブシヤケたちてユダヤの方言もて大聲によばはりいひけるは なんぢら大王アツスリヤ王のことば

一四 をきくべし 王かくのたまへりなんぢらヒゼキヤに惑はさるゝなかれ 彼なんぢらを救ふことあたはず

一五 ヒゼキヤがなんぢらをエホバに頼しめんとする言にしたがふなかれ 彼いへらくエホバかならず我儕をすくひこの

一六 邑はアツスリヤ王の手にわたさるゝことなしと ヒゼキヤに聽従ふなかれ アツスリヤ王かくのたまへりなん

ぢらわれと親和をなし出できたりて我にくだれ おのおのその葡萄とその無花果とをくらひ おのおのその井の水

一七 をのむことを得べし 一七 遂には我きたりて汝等をほかの國にたづさへゆかんその國はなんぢの國のごとき國に
 一八 して穀物ぶだう酒パンおよび葡萄園あり 一八 おそらくはヒゼキヤなんぢらに説てエホバわれらを救ふべしと
 一九 いはん然どももろもろの國の神等のなかにその國をアツスリヤ王の手より救へる者ありしや 一九 ハマテ、アル
 二〇 バデの神等いづこにありやセバルワイムの神等いづこにありや又わが手よりサマリヤを救出し、神ありや
 二〇 これらの國のもろもろの神のなかに誰かその國をわが手よりすくひいだし、者ありやさればエホバも何で
 わが手よりエルサレムを救ひいだし得んと

二一 如此ありければ民は黙して一言をもこたへざりきそは之にこたふるなかれとの王のおほせありつれば
 二二 なり 三三 そのときヒルキヤの子なる家司エリアキム書記セブナおよびアサフの子なる史官ヨアころもを裂てヒゼ
 キヤにゆき之にラブシヤケの言をつげたり

第三十七章

一 ヒゼキヤ王これをきゝてその衣をさき鹿衣をまとひてエホバの家にゆき 二 家司エリアキム書記
 セブナおよび祭司のなかの長老等をして皆あらたへをまとはせてアモツの子預言者イザヤのもとに
 三 ゆかしむ 三 かれらイザヤにいひけるは ヒゼキヤ如此いへりけふは患難と責と辱かしめの日なりそは子うま
 四 れんとして之をうみいだすの力なし 四 なんぢの神エホバあるひはラブシヤケがもろもろの言をきゝたまはん
 彼はその君アツスリヤ王につかはされて活る神をそしれりなんぢの神エホバその言をきゝて或はせめたまふ
 ならんされば請なんぢこの遺れるものために祈禱をさゝげよと
 五 かくてヒゼキヤ王の諸僕イザヤにいたる 六 イザヤかれらに言けるはなんぢらの君につげよエホバ斯

いひたまへり曰くアツスリヤ王のしもべら我をのゝしりけがせりなんぢらその聞しことばによりて懼るゝな
七 かれ 視よわれかれが意をうごかすべければ一つの風聲をきよておのが國にかへらんかれをその國にて劍に
たふれしむべし

八 爰にラブシヤケはアツスリヤ王がラキシを離れさりしときよて歸りけるととき際しも王はリブナを攻をれり
九 このときエテオピアの王テルハカの事についてきけり云くかれいでて汝とたゝかふべしとこのことをきよて
一〇 使者をヒゼキヤに遣していふ なんぢらエダの王ヒゼキヤにつげて如此いへなんぢが頼める神なんぢを欺き
二 てエルサレムはアツスリヤ王の手にわたされじといふを聽ことなかれ 視よアツスリヤの王等もろもろの國に
いかなることをおこなひ如何してこれを悉くほろぼしゝかを汝きゝしならんされば汝すくはるゝことを得んや
二三 わが先祖たちの滅ぼしゝゴザン、ハラシ、レゼフおよびテラサルなるエデンの族など此等のくにぐにの神は
二三 その國をすくひたりしや ハマテの王アルパデの王セバルワイルムの都の王ヘナの王およびイワの王はいづこに
ありやと

一四 ヒゼキヤつかひの手より書をうけて之を讀りしかしてヒゼキヤ、エホバの宮にのぼりゆきエホバの前にこ
一五 のふみを展ぶ ヒゼキヤ、エホバに祈ていひけるは ケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバ、イスラエルの
一七 神よたゞ汝のみ地のうへなるよろづの國の神なりなんぢは天地をつくりたまへり エホバよ耳をかたむけて
一八 聽たまへ エホバよ目をひらきて視たまへ セナケリブ使者して活る神をそしらしめし言をことごとくきゝたまへ
一九 エホバよ實にアツスリヤの王等もろもろの國民とその地とをあらし毀ち かれらの神たちを火になげい
れたりこれらのものは神にあらず人の手の工にしてあるひは木あるひは石なり 斯るがゆるゑに滅ぼされたり

二〇 さればわれらの神エホバよ今われらをアツスリヤ王の手より救ひいだして地のもろもろの國にたゞ汝のみ
 エホバなることを知しめたまへ

二一 こゝにアモツの子イザヤ人をつかはしてヒゼキヤにいはせけるはイスラエルの神エホバかくいひたまふ

二三 汝はアツスリヤ王セナケリブのことにつきて我にいのれり エホバが彼のことにつきて語り給へるみことばは

是なりいはくシオンの處女はなんぢを侮りなんぢをあざけりエルサレムの女子はなんぢの背後より頭をふれり

二三 汝がそしりかつ罵れるものは誰ぞなんぢが聲をあげ目をたかく向てさからひたるものはたれぞイスラエル

二四 の聖者ならずや なんぢその使者によりて主をそしりていふ我はおほくの戰車をひきゐて山々のいたゞきに

登りレバノンの奥にまでいりぬ我はたけたかき香柏とうるはしき松樹とをきりまたその境なるたかき處にゆき

二五 映たる地の林にゆかん 我は井をほりて水をのみたりわれは足跡をもてエジプトの河々をからさんと

二六 なんぢ聞はずやこれらのことはわが昔よりなす所にしへの日よりさだめし所なり今なんぢがこの堅城

二七 をこぼちあらしめて石堆となすも亦わがきたらしし所なり そのなかの民はちから弱くをのゝきて恥をいだき

二八 野草のごとく青き菜のごとく屋蓋の草のごとく未だそだたざる苗のごとし 我なんぢが居ること出入すること

二九 又われにむかひて怒りさけべることをしてなんぢが我にむかひて怒りさけべると汝がほこれる言とわが耳に

三〇 いらたれば我なんぢの鼻に環をはめ汝のくちびるに鑣をつけて汝がきたれる路よりかへらしめん

三〇 ヒゼキヤよ我がなんぢにたまふ徴はこれなりなんぢら今年は落穂より生たるものを食ひ 明年は葉生より

三二 出たるものを食はん 三年にあたりては種ことをなし收ことをなし 葡萄ぞのを作りてその果を食ふべし ユダ

イ賽三〇・二八 結三
 八・四
 口王下一九・三一 賽
 八・六
 二王下一九・三五
 へ王下二〇・六 賽三
 三王下二〇・一 代下
 三二・二四
 へ王下二〇・八 賽七
 ト尼一三・一四
 三三・三五
 二王下二〇・八 賽七

三 家ののがれて遺れる者はふたゝび下は根をはり上は果を結ぶべし 三三
その遺るものはエルサレムよりいで脱る
るものはシオンの山よりいづるなり 萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし

三四 この故にエホバ、アツスリヤの王については如此いひたまふ 彼はこの城にいらすこゝに箭をはなたず盾
を城のまへにならべず壘をきづきて攻ることなし 三三
かれはそのきたりし道よりかへりてこの城にいらす 我

おのれの故によりて僕ダビデの故によりて この城をまもりこの城をすくはんこれエホバ宣給るなり

三六 エホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八萬五千人をうちころせり早晨におきいでて見れ
ばみな死てかばねとなれり 三三
アツスリヤ王セナケリブ起てかへりゆきニネべにとどまる 三三
一日おのが神ニス

三六 エホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八萬五千人をうちころせり早晨におきいでて見れ
ばみな死てかばねとなれり 三三
アツスリヤ王セナケリブ起てかへりゆきニネべにとどまる 三三
一日おのが神ニス

第三十八章

一 そのころヒゼキヤやみて死んとせしにアモツの子預言者イザヤきたりて彼にいふ エホバ如此い
ひたまはくなんぢ家に遺言をとどめよ 汝しにて活ることあたはざればなり 二
爰にヒゼキヤ面を

壁にむけてエホバに祈りいひけるは 三
あゝエホバよ 願くはわがなんぢの前に眞實をもて 一心をもてあゆみ

四 なんぢの目によきことを行ひたるをおもひいでたまへ 斯てヒゼキヤ甚くなきぬ 四
エホバの言イザヤにのぞみて

五 曰く 三
なんぢ往てヒゼキヤにいへなんぢの祖ダビデの神エホバかくいひ給はく 我なんぢの禱告をきよなんぢ

六 の涙をみたり 我なんぢの齡を十五年ましくはへ 且なんぢとこの城とを救ひてアツスリヤわうの手をのがれ

八七 しめん又われこの城をまもるべし 七
エホバ語りたまひたる此事を成たまふ證にこの徴をなんぢに賜ふ 八
視よ

われアハズの日晷にすゝみたる日影を十度しりぞかしめんといひければ乃ちひばかりにすゝみたる日影十度しり

ぞきぬ

- 一九 ユダの王ヒゼキヤ病にかゝりてその病のいえしのち記し、書は左のごとし 我いへり わが齡ひの全盛
- 二〇 のとき陰府の門にいりわが餘年をうしなはんと 我いへり われ再びエホバを見奉ることあらじ 再びいける
- 三 ものの地にてエホバを見奉ることあらじ われは無ものの中にいりてふたゝび人を見ることがあらじ わが住所
- はうつされて牧人の幕屋をとりさるごとくに我をはなる わがいのちは織工の布をまきをはりて機より剪はなす
- 三 ごとくならん なんぢ朝夕のあひだに我をたえしめたまはん われは天明におよぶまで己をおさへてしづめ
- 四 たり 主は獅のごとくに我もろもろの骨を碎きたまふ なんぢ朝夕の間にわれを絶しめたまはん われは燕の
- ごとく鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめき わが眼はうへを視ておとろふ エホバよわれは迫りくるしめ
- 五 らる 願くはわが中保となりたまへ 主はわれともいひ且そのごとくみづから成たまへり われ何をいふべき
- 六 か わが世にある間わが靈魂の苦しめる故によりて慎みてゆかん 主よこれらの事によりて人は活るなり わが
- 七 靈魂のいのちも全くこれらの事によるなり 願くはわれを醫しわれを活したまへ 視よわれに 甚しき艱苦を
- あたへたまへるは我に平安をえしめんがためなり 汝わがたましひを愛して滅亡の穴をまぬかれしめ給へりそは
- 八 わが罪をことごとく背後にすてたまへり 陰府はなんぢに感謝せず 死はなんぢを讚美せず 墓にくだる者はな
- 九 んぢの誠實をのぞまず 唯いけるもののみ活るものこそ汝にかんしやするなれ わが今日かんしやするが如し
- 二〇 父はなんぢの誠實をその子にしらしめん エホバ我を救ひたまはん われら世にあらんかぎりエホバのいへ
- にて琴をひきわが歌をうたはん

イ詩二七・一三、一一 八八・二二、二五・
 六・九 二伯七・二一、二〇、一 一七 傳九・一〇
 口伯七・六 ホ詩六・五、三〇・九、へ申四・九、六・七 詩 七八・三、四

ト王下二〇・七 リ王下二〇・二二
 チ王下二〇・八 又代下三・三一 又代下三・三二
 九耶二〇・五 ヲ傳前三・一八
 一・七 ヲ伯四二・一〇 賽六

二三 一 一 イザヤいへらく無花果の一團をとりきたりて腫物のうへにつけよ王かならずいえん 二三
いへらくわがエホバの家にのぼることにつきては何の兆あらんか 二三

第三十九章

一 そのころバラダンの子バビロン王メロダクバラダン、ヒゼキヤが病をうれへて愈しことをきよければ書と禮物とおくれり 二 ヒゼキヤその使者のきたるによりて喜びこれに財物金銀香料たふとき油ををさめたる家およびすべての軍器ををさめたる家また庫のなかなる物をことごとく見すおほよそ 三 ヒゼキヤのいへの裏にあるものと全國のうちにあるものと見せざるものは一もあらざりき 三 一に預言者イザヤ、ヒゼキヤ王のもとに來りていひけるはこの人々はなにをいひしや何處よりなんぢのもとに來りしやヒゼキヤ曰けるはかれらはとほき國よりバビロンより我にきたれり 四 イザヤいふ彼等はなんぢの家にてなにを見たりしやヒゼキヤ答ふかれらはわが家にあるものを皆みたり又わが庫のなかにあるものは一つをもかれらに見せざるものなかりき 五 イザヤ、ヒゼキヤにいふなんぢ萬軍のエホバの言をきけ 六 みよ日きたらんなんぢの家のものなんぢの列祖がけふまで蓄へたるものは皆バビロンにたづさへゆかれて遺るもの一もなかるべし是はエホバのみことばなり 七 なんぢの身より生れいでん者もとらはれ寺人とせられてバビロン王の宮のうちにあらん 八 ヒゼキヤ、イザヤにいひけるは汝がかたるエホバのみことばは善しまた云わが世にあるほどは太平と眞實とあるべしと

第四十章

一 なんぢらの神いひたまはくなくさめよ汝等わが民をなくさめよ 二 懇ろにエルサレムに語り之によははり告よその服役の期すでに終りその咎すでに赦されたりそのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと

三 よばはるものの聲きこゆ云くなんぢら野にてエホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよ
 四 もろもろの谷はたかくもろもろの山と岡とはひくくせられ曲りたるはなほく崎嶇はたひらかにせらるべ
 五 し 斯てエホバの榮光あらはれ人みな共にこれを見んこはエホバの口より語りたまへるなり
 六 聲きこゆ云くよばはれ答へていふ何とよばはるべきかいはく人はみな草なりその榮華はすべて野の花
 七 のごとし 草はかれ花はしほむエホバの息そのうへに吹ければなり實に民はくさなり 草はかれ花はしほ
 八 然どわれらの神のことばは永遠にたよん
 九 よき音信をシオンにつたふる者よなんぢ高山にのぼれ嘉おとづれをエルサレムにつたふる者よなんぢ
 一〇 強く聲をあげよこゑを揚ておそるゝなかれユダのもろもろの邑につげよなんぢらの神きたり給へりと みよ
 二 主エホバ能力をもちて來りたまはんその臂は統治めたまはん 賞賜はその手にありはたらきの値はその前にあり
 二 主は牧者のごとくその群をやしなひその臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたづさへ乳をふくまする
 者をやはらかに導きたまはん
 三 たれか掌 心をもてもろもろの水をはかり指をのばして天をはかり また地の塵を量器にもり天秤をもても
 四 ろもろの山をはかり權衡をもてもろもろの岡をはかりしや 誰かエホバの靈をみちびきその議士となりて教し
 五 や エホバは誰とともに議りたまひしやたれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたへ明通
 のみちを示したりしや 視よもろもろの國民は桶のひとしづくのごとく 權衡のちりのごとくに思ひたまふ

イ太三・三 可一・三 二賽四五・二 一詩一〇三・一六 二二・二二 二五、五・四 歌七 三四 哥前二・一六
 路三・四 約一・二三 ホ伯一四・二 詩九〇 一約一二・三四 彼前 又賽四九・一〇 結三 四・三三、三七、二四 ル彼三〇・四
 口馬三・一 五、一〇二・二、一、一、二、五 一・二、五 約一〇・一一 來一 一七伯二一・二二、三六、
 一詩六八・四 賽四九 一〇三・一五 雅一 一賽五九・一六 一約一〇・一一 來一 一七伯二一・二二、三六、
 一〇 彼前二・二四 一賽六二・二一 歌二 三・一〇 彼前二 二二、二三 羅二一

七但四・三五
 五徒一七・二九
 一賽四一・七 耶一〇
 二一 賽四二・五、 耶一〇・二二 詩一
 一三 耶一〇・二二 賽四〇・一八 申四
 一四 賽四二・四、 五・一 〇七・四〇
 一五 賽四〇・一八 申四
 一六 賽四〇・一八 申四
 一七 賽四〇・一八 申四
 一八 賽四〇・一八 申四
 一九 賽四〇・一八 申四
 二〇 賽四〇・一八 申四
 二一 賽四〇・一八 申四
 二二 賽四〇・一八 申四
 二三 賽四〇・一八 申四
 二四 賽四〇・一八 申四
 二五 賽四〇・一八 申四
 二六 賽四〇・一八 申四
 二七 賽四〇・一八 申四
 二八 賽四〇・一八 申四
 二九 賽四〇・一八 申四
 三〇 賽四〇・一八 申四
 三一 賽四〇・一八 申四
 三二 賽四〇・一八 申四
 三三 賽四〇・一八 申四
 三四 賽四〇・一八 申四
 三五 賽四〇・一八 申四
 三六 賽四〇・一八 申四
 三七 賽四〇・一八 申四
 三八 賽四〇・一八 申四
 三九 賽四〇・一八 申四
 四〇 賽四〇・一八 申四
 四一 賽四〇・一八 申四
 四二 賽四〇・一八 申四
 四三 賽四〇・一八 申四
 四四 賽四〇・一八 申四
 四五 賽四〇・一八 申四
 四六 賽四〇・一八 申四
 四七 賽四〇・一八 申四
 四八 賽四〇・一八 申四
 四九 賽四〇・一八 申四
 五〇 賽四〇・一八 申四
 五一 賽四〇・一八 申四
 五二 賽四〇・一八 申四
 五三 賽四〇・一八 申四
 五四 賽四〇・一八 申四
 五五 賽四〇・一八 申四
 五六 賽四〇・一八 申四
 五七 賽四〇・一八 申四
 五八 賽四〇・一八 申四
 五九 賽四〇・一八 申四
 六〇 賽四〇・一八 申四
 六一 賽四〇・一八 申四
 六二 賽四〇・一八 申四
 六三 賽四〇・一八 申四
 六四 賽四〇・一八 申四
 六五 賽四〇・一八 申四
 六六 賽四〇・一八 申四
 六七 賽四〇・一八 申四
 六八 賽四〇・一八 申四
 六九 賽四〇・一八 申四
 七〇 賽四〇・一八 申四
 七一 賽四〇・一八 申四
 七二 賽四〇・一八 申四
 七三 賽四〇・一八 申四
 七四 賽四〇・一八 申四
 七五 賽四〇・一八 申四
 七六 賽四〇・一八 申四
 七七 賽四〇・一八 申四
 七八 賽四〇・一八 申四
 七九 賽四〇・一八 申四
 八〇 賽四〇・一八 申四
 八一 賽四〇・一八 申四
 八二 賽四〇・一八 申四
 八三 賽四〇・一八 申四
 八四 賽四〇・一八 申四
 八五 賽四〇・一八 申四
 八六 賽四〇・一八 申四
 八七 賽四〇・一八 申四
 八八 賽四〇・一八 申四
 八九 賽四〇・一八 申四
 九〇 賽四〇・一八 申四
 九一 賽四〇・一八 申四
 九二 賽四〇・一八 申四
 九三 賽四〇・一八 申四
 九四 賽四〇・一八 申四
 九五 賽四〇・一八 申四
 九六 賽四〇・一八 申四
 九七 賽四〇・一八 申四
 九八 賽四〇・一八 申四
 九九 賽四〇・一八 申四
 一〇〇 賽四〇・一八 申四

一六 島々はたちのぼる塵埃のごとし 一六 レバノンには柴にたらずそのなかの獣は燔祭にたらず 一七 エホバの前には

一七 もろもろの國民みななきにひとし エホバはかれらを無もののごとく空きもののごとく思ひたまふ

一八 然ばなんぢら誰をもて神にくらべいかなる肖像をもて神にたぐふか 一九 偶像はたくみ鑄てつくり金工こ

二〇 がねをもて之をおほひ白銀をもて之がために鏈をつくれり 二〇 かゝる寶物をそなへえざる貧しきものは朽まじき

二一 木をえらみ良匠をもとめてうごくことなき像をたゝしむ 二二 なんぢら知ざるかなんぢら聞ざるか 始よりなんぢ

二三 らに傳へざりしかなんぢらは地の基をおきしときより悟らざりしか 二三 エホバは地球のはるか上にすわり地に

二四 すむものを蝗のごとく視たまふ おほぞらを薄絹のごとく布きこれを住ふべき幕屋のごとくはり給ふ 二三 又もろ

二五 もろの君をなくならしめ地の審士をむなしくせしむ 二四 かれらは僅かに植られ僅かに播れその幹わづかに地に

二六 根ざししに神そのうへを吹たまへば即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし 二五 聖者いひ給はくさらば

二七 なんぢら誰をもて我にくらべ我にたぐふか 二六 なんぢら眼をあげて高をみよたれか此等のものを創造せしやを

二八 おもへ主は數をしらべてその萬象をひきいだしおのおのの名をよびたまふ 主のいきほひ大なりその力のつよ

二九 きがゆゑに一も缺ることなし

二七 ヤコブよなんぢ何故にわが途はエホバにかくれたりといふや イスラエルよ汝なにゆゑにわが訟はわが神

二八 の前をすぎされりとかたるや 二八 汝しらざるか聞ざるかエホバはとしへの神地のはての創造者にして倦たまふ

二九 ことなくまた疲れたまふことなくその聰明こと測りがたし 二九 疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには

三〇 強きをまし加へたまふ 三〇 年少きものもつかれてうみ壯なるものも衰へおとろふ 三一 然ばあれどエホバを俟望

むものは新なる力をえん また鷲のごとく翼をはりてのほらん 走れどもつかれず歩めども倦ざるべし

第四章

もろもろの島よわがまへに黙せもろもろの民よあらたなる力をえて近づききたれ 而して語れ われら寄集ひて論らはん たれか東より人をおこしよや われは公義をもて之をわが足下に召し

その前にもろもろの國を服せしめまた之にもろもろの王ををさめしめ かれらの劍をちりのごとくかれらの弓を

ふきさらるゝ藁のごとくならしむ 斯て彼はこれらのものを追 その足いまだ行ざる道をやすらかに過ゆけり

このことは誰がおこなひしやたが成しやたが太初より世々の人をよびいだしよや われエホバなり 我ははじ

めなり終なり もろもろの島はこれを見ておそれ地の極はをのゝきて寄集ひきたれり かれら互にその隣を

たすけその兄弟にいひけるはなんぢ雄々しかれ 木匠は鐵工をはげまし鋸をもて平らぐるものは鐵礮をうつ

ものを勵ましていふ 接合せいとよしとまた釘をもて堅うして揺くことなからしむ

然どわが僕イスラエルよ わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ われ地のはてより汝をたづさへ

きたり地のはしよりなんぢを召かくて汝にいへり 汝はわが僕われ汝をえらみて棄ざりきと おそるゝなかれ

我なんぢとともにあり 驚くなかれ我なんぢの神なり われなんぢを強くせん 誠になんぢを助けん 誠にわがたゞ

しき右手なんぢを支へん 視よなんぢにむかひて怒るものはみな恥をえて惶てふためかん なんぢと争ふもの

は無もののごとくなりて滅亡せん なんぢ尋ねるとも汝とたゝかふ人々にあはざるべし 汝といくさする者は

なきものの如くなりて虚しくなるべし そは我エホバなんぢの神はなんぢの右手をとりて汝にいふ 懼るゝ

- イ詩一〇三・五
- ホ賽四一・二六、四四
- 又申七・六、一〇・一
- 五・二四、六〇・一
- 口亞二・一三
- 七、四六・一〇
- ト賽四〇・一九、四四
- 五、一四・二詩一
- 二亞二・三
- ハ賽四六・一一
- ハ賽四三・一〇、四四
- チ賽四〇・一九
- 四三・五
- 二創一四・一四 賽四
- 六、四八・一二
- リ賽四〇・二〇
- 一、四四・一
- ワ申三一・六、八
- 一・二五、四五・一
- 一、一七、二二
- ル代下二〇・七 雅二
- カ出二三・二二 賽四
- ヨ賽四一・一〇

多米四・一三 哥後一
 ソ賽四五・二五
 〇・四・五
 ツ賽三五・六・七・四三
 ナ伯一二・九
 一・一九、四四・三
 ラ賽四五・二一
 約一三・一九
 四・九 哥前八・四
 ク賽四三・九
 ム賽四二・九、四四・
 ウ耶一〇・五
 七、八、四五・三
 牛詩二一五・八 賽四
 四・九 哥前八・四
 ノ彌一・二
 才賽四一・二
 九 賽四三・九

二四 なかれ我なんぢを助けんと 一四 またエホバ宣給ふなんぢ虫にひとしきヤコブよイスラエルの人よおそるゝなか

二五 我なんぢをたすけん汝をあがなふものはイスラエルの聖者なり 一五 視よわれ汝をおほくの鋭齒ある新しき打麥

二六 の器となさんなんぢ山をうちて細微にし岡を糝糠のごとくにすべし 一六 なんぢ簸げば風これを巻さり狂風これ

二七 を吹ちらさん汝はエホバによりて喜びイスラエルの聖者によりて誇らん 一七 貧しきものと乏しきものと水をもとめて水なくその舌かわきて衰ふるときわれエホバ聴てこたへん我イ

二八 スラエルの神かれらを棄ざるなり 一八 われ河をかぶるの山にひらき泉を谷のなかにいだしまた荒野を池となし

二九 乾ける地を水のみなもとと變ん 一九 我あれのに香柏合歡樹もちの樹および油の樹をうる沙漠に松杉及び黄楊

三〇 をともに置ん 二〇 かくて彼等これを見てエホバの手の作たまふところイスラエルの聖者の造り給ふ所なるをしり

且こゝろをとめ且ともどもにさとらん

三二 エホバ言給くなんぢらの道理をとり出せヤコブの王いひたまはく汝等のかたき證をもちきたれ 三三 これ

三三 を持來りてわれらに後ならんとする事をしめせそのいやさきに成るべきことを示せわれら心をとめてその終を

三四 しらん或はきたらんとする事をわれらに聞すべし 三三 なんぢら後ならんとすることをしめせ我儕なんぢらが

三四 神なることを知らんなんぢら或はさいはひし或はわざはひせよ我儕ともに見ておどろかん 三四 視よなんぢらは

三五 無ものごとしなんぢらの事はむなしなんぢらを撰ぶものは憎むべきものなり

三五 われ一人を起して北よりきたらせ我が名をよぶものを東よりきたらしむ彼きたりもろもろの長をふみて

三六 泥のごとくにし陶工のつちくれを踐がごとくにせん 三六 たれか初よりこれらの事をわれらに告てしらしめたりや

たれか上古よりわれらに告てこは是なりといはしめたりや 一人だに告るものなし 一人だに聞するものなし 一人だになんぢらの言をきくものなし われ豫じめシオンにいはんなんぢ視よかれらを見よと われ又よきおとづれを告るものをエルサレムに予へん われ見るに一人だになしかれらのなかに謀略をまうくるもの一人だになし 我かれらに問どこたふるもの一人だになし かれらの爲はみな徒然にして無もののごとしその偶像は風なりまた空しきなり

第四章

わが扶くるわが僕わが心よるこぶわが撰人をみよ 我わが靈をかれにあたへたり かれ異邦人に道をしめすべし かれは叫ぶことなく聲をあぐることなくその聲を街頭にきこえしめす また傷める蘆ををることなくほのくらし燈火をけすことなく眞理をもて道をしめさん かれは衰へず喪膽せずして道を地にたてをはらん もろもろの島はその法言をまちのぞむべし

天をつくりてこれをのべ地とそのうへの産物とをひらきそのうへの民に息をあたへその中をあゆむものに靈をあたへたまふ神エホバかく言給ふ 云くわれエホバ公義をもてなんぢを召たり われなんぢの手をとり汝をまもり なんぢを民の契約とし異邦人のひかりとなし 而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし暗にすめるものを檻のうちより出さしめん われはエホバなり是わが名なり 我はわが榮光をほかの者にあたへず わがほまれを偶像にあたへざるなり さきに預言せるところはや成れり 我また新しきことをつげん 事いまだ兆さざるさきに我まづなんぢらに聞せんと

イ賽四一・四 三、六、五二・二三、
 口賽四〇・九 五三・一一 太一一
 ハ賽六三・五 二八一・二〇 腓二
 二賽四一・二四 七
 ホ賽四三・一〇、四九 へ太三・一七、一七、
 五弗一・六 約三・
 ト賽一一・二二 又詩一三六・六
 三三 徒一七・二五
 三 賽四九・一〇 又賽四三・一
 二 賽四四・二四 亞一 又賽四九・八
 一 賽四九・六 路二・
 三二 徒一三・四七 來二・二四、一五
 三 賽三五・五 日 賽六一・一 路四・
 一 賽六一・一 路四・
 一八 提後二・二六

ツ詩一〇七・二三 ナ賽三一・四 四五・一六 四一
ネ詩三三・三、四〇・ラ詩九七・七 賽一・ム賽四三・八 結二二 ウ羅二・二二
三、九八・一 二九、四四・一一、二二 約九・三九

一〇 海にうかぶもの海のなかに充るものもろもろの島およびその民よ エホバにむかひて新しき歌をうたひ
地ちの極はてよりその頌美ほまれをたゞへまつれ 一〇 荒野あれのとその中なかのもろもろの邑まちとケダル人びとのすめるもろもろの村里むらはこゑ
をあげよ セラの民たみはうたひて山のいたゞきよりよばはれ 一〇 榮光えいこうをエホバにかうぶらせその頌美ほまれをもろもろの
島しまにて語りつげよ 一〇 エホバ勇士ますらをのごとく出たまふ また戦士いくさびとのごとく熱心ねっしんをおこし聲こゑをあげてよばはり大能ちからを
あらはして仇あだをせめ給はん
一四 われ久ひさしく聲こゑをいださず黙もだして己おのれをおさへたり 今いまわれ子をうまんとする婦人をんなのごとく叫まじばん 我われいきづか
一五 しくかつ喘あへがらん 一五 われ山やまと岡おかとをあらし且かつすべてその上うへの木草きくさをからしもろもろの河かはを島しまとしもろもろの池いけ
一六 を涸からさん 一六 われ瞽者めしひをその未いまだしらざる大路おほぢにゆかしめその未いまだしらざる徑みちをふましめ暗くらをその前まへに光ひかりと
一七 なし曲まがれるをその前まへになほくすべし 我われこれらの事ことをおこなひて彼らかれをすてじ 一七 刻きざみたる偶像ぐうざうにたのみ鑄いたる
偶像ぐうざうにむかひて汝等なんぢらはわれらの神かみなりといふものは退しりぞけられて大おほいに恥はぢをうけん
一八 瞽者めしひよきけ瞽者めしひよ眼めをそゞぎてみよ 一八 瞽者めしひはたれぞわが僕しもべにあらずや 誰たれかわがつかはせる使者つかひの如ごとき
一九 瞽者めしひあらんや 誰たれかわが友ともの如ごときめしひあらんや 誰たれかエホバの僕しもべのごときめしひあらんや 二〇 汝なんぢおほくのことを
二〇 見みれども顧かへりみず耳みみをひらけども聞きかざるなり 二〇 エホバおのれ義ぎなるがゆゑに大おほいにしてたふとき律法おきてをたまふを
二一 よろこび給たまへり 二一 然しかるにこの民たみはかすめられ奪うばはれて みな穴あな中なかにとらはれ獄ひとやのなかに閉とどめらる 斯かくてその
掠かすめらるゝを助たすくる者ものなくその奪うばはれたるを償つぐへといふ者ものなし
二二 なんぢらのうち誰たれかこのことことに耳みみをかたぶけん たれか心こゝろをもちゐて後のちのために之これをきかん 二二 ヤコブを

奪はせしものは誰ぞかすむる者にイスラエルをわたし、者はたれぞ是エホバにあらずやわれらエホバに罪を
 をかしその道をあゆまずその律法にしたがふことを好まざりき 二五 この故にエホバ烈しき怒をかたぶけ猛き
 いくさをきたらせ その烈しきこと火の如く四圍にもゆれども彼しらずその身に焚せまれども心におかざりき

第四章

一 ヤコブよなんぢを創造せるエホバいま如此いひ給ふイスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給
 二 ふおそるゝなかれ我なんぢを贖へり我なんぢの名をよべり汝はわが有なり 二 なんぢ水中をすぐ
 るときは我ともにあらん河のなかを過るときは水なんぢの上にあふれじなんぢ火中をゆくとき焚るゝことなく
 三 火焰もまた燃つかじ 我はエホバなんぢの神イスラエルの聖者なんぢの救主なり われエジプトを予へてなん
 四 ぢの贖代となし エテオピアとセバとをなんぢに代ふ われ見てなんぢを寶とし尊きものとし亦なんぢを愛す
 五 この故にわれ人をもて汝にかへ民をなんぢの命にかへん 懼るゝなかれ我なんぢとともにあり我なんぢの裔
 六 を東よりきたらせ西より汝をあつむべし われ北にむかひて釋せといひ南にむかひて留るなかれといはん
 七 わが子輩を遠きよりきたらせ わが女らを地の極よりきたらせよ すべてわが名をもて稱へらるゝ者をきたら
 八 せよ 我かれらをわが榮光のために創造せり われ曩にこれを造りかつ成をはれり 九 國々はみな相集ひもろもろの民は
 目あれども瞽者のごとく耳あれども聾者のごとき民をたづさへ出よ 國々はみな相集ひもろもろの民は
 あつまるべし 彼等のうち誰かいやさきに成るべきことをつけ之をわれらに聞することを得んやその證人をいだ
 して己の是なるをあらはすべし 彼等きよて此はまことなりといはん 一〇 エホバ宣給くなんぢらはわが證人

- イ王下二五・九
- ホ何七・九
- ハ四三・七
- ニ賽四三・二二、四四
- ・二二、二四、
- チ申三一・六、八
- ホ賽四四・六
- ハ賽四二・六、四五・四
- ト詩六六・一二、九一
- ニ賽四三・二二、四四
- ・三
- チ申三一・六、八
- リ但三・二五、二七
- 又箴一一・八、二二
- 一八
- ル賽四一・一〇、一四、
- 四四・二 耶三〇・
- ワ詩一〇〇・三 賽二
- ヨ賽六・九、四二・一九
- 一〇、一一、 四六・
- 九・二三 約三・三、
- 二七、二八
- ヲ賽六三・二九 雅二
- ・七
- カ賽四三・一
- レ賽四四・八
- 結二・一二
- 五 哥後五・一七
- タ賽四一・二二、三三、
- 二六
- ソ賽四二・一、五五・四
- ツ賽四一・四、四四・六
- ネ賽四五・二一 何一
- 三・四
- ナ申三三・二六 詩八
- 一・九
- ラ賽四三・一〇、四四
- ・八
- ム詩九〇・二 約八、

五八 牛出二四・二六・三二 ノ書三・一三・一六 ク耶一六・一四・二三 一・五 詩七八・一六 賽三 ノ詩一〇二・一八 賽 五・六
 ウ伯九・二二 賽一四 詩七七・一九 賽五 才出二四・四一・九、二 一・七 マ出二七・六 民二〇 五・六、四一・一八 四三・一、七 路一・ 一、三
 二・一〇 一・一〇 五 十野後五・一七 歌二 一・二一 申八・二五 ケ賽四八・二二 七四、七五 弗一・ 一、二五

わがえらみし僕なり 然ばなんぢら知てわれを信じわが主なるをさとりうべし 我よりまへにつくられし神なく我
 よりのちにもあることなからん 二一 我のみ我はエホバなり われの外にすくふ者あることなし 三三 われ前に
 つげまた救をほどこしまた此事をきかせたり 汝等のうちには他神なかりきなんぢらはわが證人なり われは
 神なりこれエホバ宣給るなり 一三 今よりわれは主なりわが手より救ひいだし得るものなし われ行はど誰かとど
 むることを得んや

二四 なんぢらを贖ふものイスラエルの聖者エホバかく言たまふ なんぢらの爲にわれ人をバビロンにつかはし
 彼處にあるカルデヤ人をことごとく下らせ その宴樂の船にのりてのがれしむ 一五 われはエホバなんぢらの聖者

二六 イスラエルを創造せしもの又なんぢらの王なり 一六 エホバは海のなかに大路をまうけ大なる水のなかに徑をつく
 二七 戦車および馬軍兵武士をいできたらせ ことごとく仆れて起ることあたはず 皆ほろびて燈火のきえうす

二八 るが如くならしめ給へり 一八 エホバ言給く なんぢら往昔のことを思ひいづるなかれ また上古のことをかながふ
 二九 るなかれ 視よわれ新しき事をなさん頓ておこるべしなんぢら知ざるべけんや われ荒野に道をまうけ沙漠に

三〇 河をつくらん 野の獸われを崇むべし野犬および駝鳥もまた然り われ水を荒野にいだし河を沙漠にまうけて
 三二 わが民わがえらびたる者にのましむべければなり 三二 この民はわが頌美をのべしめんとて我おのれのために造れ
 るなり

三三 然るにヤコブよ汝われを呼たのまさりき イスラエルよ汝われを厭ひたり 三三 なんぢ燔祭のひつじを我に
 もちきたらず犠牲をもて我をあがめざりき われ汝にそなへもの荷をおはせざりき また乳香をもて汝をわづら

二四 はせざりき 二四 なんぢは銀貨をもて我がために菖蒲をかはず 犠牲のあぶらをもて我をあかしめず 反てなんぢの
 罪の荷をわれに負せ なんぢの邪曲にて我をわづらはせたり

二五 われこそ我みづからの故によりてなんぢの咎をけし 汝のつみを心にとめざるなれ 二六 なんぢその是なるを
 二七 あらはさんがために己が事をのべて我に記念せしめよ われら相共にあげつらふべし 二八 なんぢの遠祖つみを

二八 をかし 汝のをしへの師われにそむけり 二九 この故にわれ聖所の長たちを汚さしめ ヤコブを誣はしめ イスラエルを
 のゝしらしめん

第四章

一 されどわが僕ヤコブよ わが撰みたるイスラエルよ 今きけ 二 なんぢを創造しなんぢを胎内につ
 くり又なんぢを助くるエホバ如此いひたまふ わがしもべヤコブよ わが撰みたるエシユルンよ おそ
 三 るゝなかれ 三 われ渴けるものに水をそゝぎ 乾たる地に流をそゝぎ わが靈をなんぢの子輩にそゝぎ わが恩恵を
 四 なんぢの裔にあたふべければなり 四 斯てかれらは草のなかにて川のほとりの柳のごとく生そだつべし 五 ある
 五 人はいふ我はエホバのものなりと ある人はヤコブの名をとなへん ある人はエホバの有なりと手にしるしてイス
 ラエルの名をなのらん

六 エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなふもの 萬軍のエホバ如此いひたまふ われは始なり われは終
 七 なり われの外に神あることなし 七 我いにしへの民をまうけしより以來 たれかわれのごとく後事をしめし又
 八 つげ又わが前にいひつらねんや 試みに成んとすること來らんとすることを告よ 八 なんぢら懼るゝなかれ 懼るゝ

イ賽一・一四 馬二・ 徒三・一九 へ詩七九・四 耶二四 三〇・一〇、四六・ 二八 約七・三八 一二 歌一・八、一
 一七 一賽一・一八 耶三一 九 但九・一一 二七・二八 徒二・二八 七、二三・二三
 口結三六・二二 三・三四 八・一三 七 賽四三・一、七 七 賽四一・四、二二、
 八 賽四四・二二、四八 ホ 賽四七・六 哀二・ 一 賽四一・八、四三 四四・二四 四四・二二
 九 耶五〇・二〇 二、六、七 一 四四・二二、耶 又 賽三五・七 耳二・ 一 賽四一・四、四八、

力賽四一・二二
 三三・三九 母前二レ賽四一・二四、二九 一八
 三賽四三・一〇、一二 二 母後二二・三 三 詩一一五・四 九 賽四〇・一九、四一 一 母後二二・一
 夕申四・三五、三九、 二 賽四五・五 三 耶一〇・五 哈二・ 二九、四二・一七、 六 耶一〇・三 一 賽四六・八

なかれ 我いにしへより聞せたるにあらずや告しにあらずや なんぢらはわが證人なり われのほか神あらんや 我
 のほかには誓あらずわれその一つだに知ことなし

九 偶像をつくる者はみな空しくかれらが慕ふところのものは益なしその證をするものは見ことなく知こと
 一〇 なし斯るがゆゑに恥をうくべし たれか神をつくり又えきなき偶像を鑄たりしや 視よその伴侶はみな

一〇 はぢんその匠工らは人なりかれら皆あつまりて立ときはおそれてもろともに恥るなるべし
 一一 鐵匠は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鎚もてこれを鍛へつよき腕をもてこれをうちかたむ 飢れば

一二 力おとろへ水をのまさればつかれはつべし 木匠はすみなはをひきはり朱にてゑがき鋸にてけづり文回をもて
 一三 畫き之を人の形にかたどり人の美しき容にしたがひて造り而して家のうちに安置す あるひは香柏をきり

一四 あるひは榲をとりあるひは檀をとり或ははやしの樹のなかにて一をえらびあるひは杉をうる雨をえて長たし
 一五 む 而して人これを薪となし之をもておのが身をあたゝめ又これを燃してパンをやき又これを神につくりて

一六 をがみ偶像につくりてその前にひれふす その半は火にもやしその半は肉をにて食ひあるひは肉をあぶりて
 一七 くひあきまた身をあたゝめていふ あゝ我あたゝまれりわれ熱きをおほゆ 斯てその餘をもて神につくり偶像

一八 につくりてその前にひれふし之ををがみ之にいのりていふ なんぢは吾神なり我をすくへと
 一九 これらの人は知ことなく悟ることなしその眼ふさがりて見えすその心とちてあきらかならず 心の

うちと思ふことをせず智識なく明悟なきがゆゑに我そのなかばを火にもやしその炭火のうへにパンをやき肉を
 あぶりて食ひその木のあまりをもて我いかで憎むべきものを作るべけんや 我いかで木のはしくれに俯伏すこと

二〇 をせんやといふ者もなし 二〇 かゝる人は灰をくらひ 迷へる心にまどはされて己がたましひを救ふあたはずまた
わが右手にいつはりあるにあらすやとおもはざるなり

二一 ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ汝はわが僕なり 我なんぢを造れりなんぢわが僕なりイ
スラエルよ我はなんぢを忘れじ 二二 我なんぢの愆を雲のごとくに消しなんぢの罪を霧のごとくにちらせりなん

二三 ぢ我にかへれ我なんぢを贖ひたればなり 二三 天ようたうたへエホバこのことを成たまへり 下なる地よばはれ
もろもろの山よ林およびその中のもろもろの木よこゑを發ちてうたふべしエホバはヤコブを贖へりイスラエル

二四 のうちに榮光をあらはし給はん 二四 なんぢを贖ひなんぢを胎内につくれるエホバかく言たまふ 我はエホバなり我よろづのものを創造したど
我のみ天をのべみづから地をひらき 二五 いつはるものの豫兆をむなくしト 者をくるはせ智 者をうしろに

二六 退けてその知識をおろかならしむ 二六 われわが僕のことばを遂しめ わが使者のはかりごとを成しめ エルサレム
については民また住はんといひ ユダのもろもろの邑については重ねて建らるべし我その荒廢たるところを舊に

二七 かへさんといふ 二七 また淵に命ず かわけ我なんぢのもろもろの川をほさんと 二八 又クロスについては彼はわが
牧者すべてわが好むところを成しむる者なりといひ エルサレムについてはかさねて建られその宮の基すゑられ

二八 ンといふ

第四五章

一 われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの國をそのまへに降らしめ もろもろの王
の腰をとき扉をその前にひらかせて門をとづるものなからしめん 二 われ汝のまへにゆきて崎嶇を

イ何四・二二 編一・ハ賽四三・二五 彼前一・一八、一九 二〇、四九・二三 ハ賽四三・二四、四四 チ伯九・八 詩一〇四 二、五一・二三
二二 撒後二・二一 二賽四三・一、四八・二 ホ詩六九・三四、九六 耶五一・四八 歌一 六 二一 賽四〇・二二、
リ耶五〇・三六 二二 賽四四・二二 〇 野後六・二〇 二二、二二 賽四二 八・二〇 二 賽四三・一 四三・五、四五・一 又賽四七・一三
ル野前一・二〇 二 亞一・六 二 耶五〇・三六、五一

三三三、三六
カ代下三六・二二、二
三 剛一・一 賽四
五・一三
三 賽四一・一三
三 賽四一・二
但五・
一三
レ 賽四〇・四
ソ 詩一〇七・一六
ツ 出三三・二二、一七
賽四三・一、四九・一
ネ 賽四一・二三
ナ 賽四四・一
ラ 撒前四・五
ム 申四・三五、三九
三二・三九 賽四四
ウ 賽四五・一四、一八、
二二、三二
中 詩一八・三二、三九
ノ 詩一〇二・二五 賽
三七・二〇 馬一・
一
オ 賽三・六
ク 詩七二・三、 八五・
一
ケ 耶三一・九
フ 賽二九・二三
マ 賽四二・五 耶二七
五
八・六 羅九・二〇
エ 創一・二六、二七

三 たひらかにし 銅の門をこぼち くるがねの關木をたちきるべし 三 われなんぢに暗ところの財寶とひそかなる
四 とおりに藏せるたからとを予へ なんぢに我はエホバなんぢの名をよべるイスラエルの神なるををしめん 四 わが
僕ヤコブわが撰みたるイスラエルのために我なんぢの名をよべり 汝われを知すといへどわれ名をなんぢに賜ひ
たり 五 われはエホバなり 我のほか神なし 一人もなし 汝われをしらずといへども我なんぢを固うせん
六 而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほか神なしと知べし 我はエホバなり他にひとりもなし
七 われは光をつくり又くらきを創造す われは平和をつくりまた禍害をさうざうす 我はエホバなり 我すべて
これらの事をなすなり

八 天ようへより滴らすべし 雲よ義をふらすべし 地はひらけて 救を生じ義をもともに萌いだすべし われ
エホバ之を創造せり
九 世人はすゑものの中のひとつの陶器なるに己をつくれる者とあらそふはわざはひなるかな 泥塊はすゑもの
のつくりむかひて 汝なにを作るかといふべけんや 又なんぢの造りたる者なんぢを手なしといふべけんや
一〇 父にむかひて 汝なにゆゑに生むことをせしやといひ 婦にむかひて 汝なにゆゑに産のくるしみをなしやと
いふ者はわざはひなるかな

二 エホバ、イスラエルの聖者イスラエルを造れるもの如此いひたまふ 後きたらんとずることを我にとへま
三 たわが子女とわが手の工につきて 汝等われに言せよ 三 われ地をつくりてそのうへに人を創造せり われ自ら
イ ガ ヤ 書 四五・三——一二

三の手をもて天をのべその萬象をさだめたり 三 われ義をもて彼のクロスを起せりわれそのすべての道をなほく

せん彼はわが邑をたてわが俘囚を價のためならず報のためならずして釋すべしこれ萬軍のエホバの聖言なり

四 エホバ如此いひたまふ エジプトがはたらきて得しものとエテオピアがあきなひて得しものとはなんぢの

有とならん また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがひ繩につながれて降りなんぢのまへに伏しなん

五 ぢに祈りていはんまことに神はなんぢの中にいませりこのほかに神なし一人もなしと 救をほどこし給ふイ

六 スラエルの神よまことに汝はかくれています神なり 偶像をつくる者はみな恥をいだき辱かしめをうけ 諸共

七 にはぢあわてゝ退かん されどイスラエルはエホバにすくはれて永遠の救をえんなんぢらは世々かぎりなく

恥をいだかず辱かしめをうけじ

八 エホバは天を創造したまへる者にしてすなはち神なり また地をもつくり成てこれを堅くし徒然にこれを

創造し給はずこれを人の住所につくり給へり エホバかく宣給ふわれはエホバなり 我のほかに神あることなし

九 と われは隠れたるところ地のくらき所にてかたらず 我はヤコブの裔になんぢらが我をたづぬるは徒然なり

といはず 我エホバはたゞしき事をかたり直きことを告ぐ

十 汝等もろもろの國より脱れきたれる者よつどひあつまり共にすゝみきたれ 木の像をになひ救ふことあた

はざる神にいのりするものは無智なるなり なんぢらその道理をもちきたりて述よ また共にはかれ 此事をた

れか上古より示したりや 誰かむかしより告たりしや 此はわれエホバならずや 我のほかに神あることなし われ

イ創二・一	二賽五三・三	羅三・	〇、一四、一六	亞	リ詩四四・二四	賽八	ヲ賽四二・五	・二三七、一三八	・九、四四・七、四六
口賽四一・二	二四	八・二二、二三	・二七、五七・二七	ワ賽四五・五	カ中三〇・一一	賽四	九、四六・七、四八・	・一〇、四八・一四	・一〇、四八・一四
ハ代下三六・二三、二	ホ詩六八・三二、七二	ヘ詩一四九・八	又賽四四・一一	カ中三〇・一一	賽四	九、四六・七、四八・	・一〇、四八・一四	・一〇、四八・一四	・一〇、四八・一四
三 喇一・一	賽四	一〇、一一	ト哥前一四・二五	九賽二六・四、四五	八・一六	七 羅一・二二、二三	八、四四・八、四六	・九、四八・三	・九、四八・三
四・二八	二二、六〇・九、一	チ賽四五・五	二五 羅一・二六	ヨ詩一九・八、一一九	レ賽四一・二二、四三	・九、四八・三	・九、四八・三	・九、四八・三	・九、四八・三

ツ詩三二・二七、六五
 五
 ネ創三二・二六 來六
 一三
 ナ編一四・二一 辨二
 ヲ創三一・五三 申六
 一三 詩六三・一 申賽四五・二七
 一 賽六五・二六 ノ賽前二・三一
 ヲ賽二一・九 耶五〇
 二二、 五二・四四
 七二・六 賽六三・九
 七 詩一〇三・二七 馬
 三・六
 三 賽四〇・一八、二五
 二 賽四〇・一九、四一
 六、 四四・一二、
 一九 耶一〇・三
 一 賽四五・二〇
 一 賽四四・一九、四七
 一 賽三三・二七
 一 賽一〇・五

三 は義をおこなひ救をほどこす神にして我のほか神あることなし 三 地の極なるもろもろの人よなんぢら我を

三 あふぎのぞめ然ばすくはれん われは神にして他に神なければなり 三 われは己をさして誓ひたりこの言はたゞ

二 しき口よりいでたれば反ることなしすべての膝はわがまへに屈み 二 すべては舌はわれに誓をたてん 二 人われに

二 就ていはん正義と力とはエホバにのみありと 二 人々エホバにきたらん 二 すべてエホバにむかひて怒るものは恥を

二 いだくべし 二 イスラエルの裔はエホバによりて義とせられ且ほこらん 二

第四章

二 荷となれる者をすくふこと能はずして己とらはれゆく 二 荷となりて疲れおとろへたるけもの負ところとなりぬ 二 かれらは屈みかれらは共にふしその

三 ヤコブの家よイスラエルのいへの遺れるものよ腹をいでしより我におはれ胎をいでしより我にもたげら

四 れしものよ 皆われにきくべし 四 なんぢらの年老るまで我はかはらず白髪となるまで我なんぢらを負ん 我つく

五 りたれば擡ぐべし我また負ひかつ救はん 五 なんぢら我をたれに比べたれに配ひたれに擬らへかつ相くらぶべ

六 きか 六 人々ふくろより黄金をかたぶけいだし權衡をもて白銀をはかり金工をやとひてこれを神につくらせ之

七 にひれふして拜む 七 彼等はこれをもたげて肩にのせ 負ひゆきてその處に安置す 七 汝等いにしへより以來の

九八 九 人これにむかひて呼はれども答ふること能はず 九 又これをすくひて苦難のうちより出すことあたはず

一〇 ことをおもひいでよ われは神なり 我のほかに神なし われは神なり 我のごとき者なし われは終の事を始よ

二 りつげいまだ成ざることを昔よりつげ わが謀畧はかならず立つといひ すべて我がよろこぶことを成んといへり

二 われ東より鷲をまねき 遠國よりわが定めおける人をまねかん 我このことを語りたれば 必ず來らすべし 我

このことを謀りたれば かならず成すべし

三 三 なんぢら心かたくなにして 義にとほさかるものよ 我にきけ われわが義をちかづかしむ可れば その來る

こと遠からず わが救おそからず 我すくひをシオンにあたへ わが榮光をイスラエルにあたへん

第四十七章

一 バビロンの處女よ くだりて塵のなかにすわれ カルデヤ人のむすめよ 座にすわらずして 地にすわ

れ 汝ふたゝび婀娜にして 嬌なりととなへらるゝことなからん 讐をとりて 粉をひけ 面帕をとり

三 さり 往をぬぎ 髓をあらはして 河をわたれ なんぢの肌は あらはれ なんぢの恥は みゆべし われ 仇をむくいて

五 四 人をかへりみず われらを贖ひたまふ者は その名を 萬軍の エホバ、イスラエルの 聖者といふ カルデヤ人の

六 ことなからん われわが民をいきどほり わが産業をけがして 之をなんぢの手にあたへたり 汝これに 憐憫をほど

七 ことなからん 汝いへらく 我とこしへに 主母たらんと 斯てこれらの

ことを心にとめず 亦その終をおもはざりき

八 なんぢ 歡樂にふけり 安らかにをり 心のうちにたゞ 我のみにして 我のほかに 誰もなく 我はやもめとなりて

イ 賽四五・五、二一	ニ 賽四一・二、二五	チ 羅一〇・三	ヲ 耶四八・一八	四 耶一三・二二、二六	四 耶一三・二二、二六	ソ 母前二・九	ナ 賽四三・二八	ウ 賽四六・八
ロ 賽四五・二一	ホ 賽四四・二八、四五	リ 賽五一・五	ワ 賽三三・二六	二六 翁三・五	二六 翁三・五	ツ 賽四七・七、一三	ラ 申二八・五〇	キ 申三三・二九
ハ 詩三三・一一、二九	ヘ 民二三・一九	ト 詩七六・五	カ 出一一・五、二六	二二 太二四・四一	レ 賽四三・三、一四	メ 母後二四・一四	ム 賽四七・五	ノ 賽四七・一〇
五・三九 來六・一七	ト 詩七六・五	ル 賽六二・二一	ニ 賽三二・一七、二〇	五〇・三四	下二八・九	代 一・七	一八 一・七	オ 歌一八・七

ク 賽五一・一九
 十 撒前五・三
 マ 翁三・四
 ケ 詩五二・七
 フ 賽二九・一五 結八
 ・二二、九・九
 エ 撒前五・三
 ラ 賽五七・一〇
 ア 賽四四・二五 但二
 ・二一
 サ 翁一・一〇 馬四・一
 ・一六 番一・五
 ユ 詩六八・二六
 ・二二
 メ 申六・二三 賽六五
 ・一
 シ 賽五二・一
 ・一七
 ヒ 賽四一・二三、四三・
 九、四三・九、四四
 ・七、八、四五・二
 一、四六・九、一〇

九 をらずまた子をうしなふことを知まじとおもへる者よなんぢ今きけ 子をうしなひ寡婦となるこの二つの

こと一日のうちに俄になんぢに來らん 汝おほく魔術をおこなひひろく呪詛をほどとすと雖もみちみちて汝に

きたるべし 汝おのれの惡によりたのみていふ我をみるものなしとなんぢの智慧となんぢの聰明とはなんぢ

を感せたりなんぢ心のうちにおもへらくたゞ我のみにして我のほかに誰もなしと この故にわざはひ汝に

きたらんなんぢ呪ひてこれを除くことをしらず艱難なんぢに落きたらん汝これをはらふこと能はずなんぢの

思ひよらざる荒廢にはかに汝にきたるべし

今なんぢわかきときより勤めおこなひたる呪詛とおほくの魔術とをもて立むかふべしあるひは益をうる

ことあらんあるひは敵をおそれしむることあらん なんぢは謀畧おほきによりて倦つかれたりかの天をうら

なふもの星をみるもの新月をうらなふ者もし能はずいざたちて汝をきたらんとする事よりまぬかれしむること

をせよ 彼らは藁のごとくなりて火にやかれんおのれの身をほのほの勢力よりすくひいだすこと能はずその

火は身をあたゝむべき炭火にあらず又その前にすわるべき火にもあらず 汝がつとめて行ひたる事は終にかく

のごとくならん汝のわかきときより汝とよりかひしたる者おのおのその所にさすらひゆきて一人だになんぢを

救ふものなかるべし

第四八章

ヤコブの家よなんぢら之をきけ 汝らはイスラエルの名をもて稱へられユダの根源よりいで

ホバの名によりて誓ひイスラエルの神をかたりつぐれども眞實をもてせず正義をもてせざるなり

かれらはみづから聖京のものとなへイスラエルの神によりたのめりその名は萬軍のエホバといふ

今よりさきに成しことを既にいにしへより告たりわれ口よりいだして既にのべつたへたり我にはかにこの事を

五 四 おこなひ而して成ぬ われ汝がかたくなにして項の筋はくろがねその額はあかどねなるを知れり このゆゑ

に我はやくよりかの事をなんぢにつげその成ざるさきに之をなんぢに聞しめたり 恐くはなんぢ云んわが偶像こ

六 れを成せり刻みたるさう鑄たる像これを命じたりと なんぢ既にきけり 凡てこれを視よ 汝ら之をのべつたへ

七 ざるか われ今より新なる事なんぢが未だしらざりし秘事をなんぢに示さん これらの事はいま創造せられし

にて上古よりありしにあらずこの日よりさきに汝これを聞ざりき 然らずば汝いはん視よわれこれを知れりと

八 汝これを聞こともなく知こともなくなんぢの耳はいにしへより開けざりき 我なんぢが欺きあざむきて生れ

九 ながら悖逆者となへられしを知ればなり わが名のゆゑによりて我いかりを遅くせん わが頌美のゆゑにより

一〇 我しのびてなんぢを絶滅すことをせし 視よわれなんぢを煉たり されど白銀の如くせずして患難の爐をもて

二 ころみたり われ己のため我おのれの爲にこれを成ん われ何でわが名をけがさしむべき 我わが榮光をほ

三 かの者にあたふることをせし ヤコブよわが召たるイスラエルよ われにきけ われは是なり われは始また終なり わが手は地のもと

四 れを置わが右の手は天をのべたり 我よべば彼等はもろともに立なり 汝ら皆あつまりてきけ エホバの愛する

ものエホバの好みたまふ所をバビロンに成しその臂はカルデヤ人のうへにのぞまん 彼等のうち誰かこれらの事

をのべつげしや 一五 たゞ我のみ我かたれり 我かれをめし 我かれをきたらせたり その道さかゆべし 一六 なんぢ

イ 卷二一・四五 出三二・九 申三一

ル 申三二・三九

レ 四四・二八

八 卷四三・二五

ヲ 卷四一・四 四四

ソ 卷四五・二 二

二二七

四八・二一 結二〇・

六 卷一・一七

九 卷四・七 四

ハ 卷四八・三

九 卷一四・二二 四四

又 卷四二・八

ワ 詩一〇二・二五

夕 卷四五・一

三 詩五八・三

へ 詩七八・三八

又 卷四二・八

ワ 詩一〇二・二五

夕 卷四五・一

ツ 賽四五・一九
 ヲ 詩三二・八
 ヲ 賽六一・二 亞三
 ヲ 中三三・二九 詩八
 ヲ 賽五三・二一 耶五
 ヲ 八、九、一一 一・二三
 ナ 賽四三・一四、四四 詩一九・一六五
 ナ 四、五 亞三・六、七
 ナ 出二七・六 民二〇
 ナ 六、二四、四八・二〇 半制三三・二七 何一
 ナ 一八・四 詩一〇五
 ナ 五本二・二〇、二二 一六 何六・五 來四
 ナ 賽四四・二三 約
 ナ 才出一九・四、五、六
 ナ 賽四四・二三、二三
 ナ 賽四一・一七、一八
 ナ 賽四九・五 耶一
 ナ 賽一・四、五一
 ナ 一六 何六・五 來四
 ナ 賽四四・二三 約
 ナ 路一・一五、三一 約
 ナ 一〇・三六 加一
 ナ 賽五一・一六
 ナ 詩四五・五
 ナ 賽四二・一 亞三・八
 ナ 一三・三一、一五
 ナ 八 弗一・六
 ナ 結三・一九

ら我にちかよりて之をきけ 我はじめより之をひそかに語りしにあらずその成しときより我はかしこに在りい
 ま主エホバわれとその靈とをつかはしたまへり

一七 なんぢの贖主イスラエルの聖者エホバかく言給く われはなんぢの神エホバなり 我なんぢに益すること

一八 を教へなんぢを導きてそのゆくべき道にゆかしむ 願くはなんぢわが命令にきゝしたがはんことをもし然ら

一九 ばなんぢの平安は河のごとく 汝の義はうみの波のごとく なんぢの裔はすなのごとく 汝の體よりいづる者は

細沙のごとくになりて その名はわがまへより絶るゝことなく亡さるゝことなからん

二〇 なんぢらバビロンより出てカルデヤ人よりのがれよ なんぢら歡の聲をもてのべきかせ地のはてにいたる

二一 まで語りつたへ エホバはその僕ヤコブをあがなひ給へりといへ エホバかれらをして沙漠をゆかしめ給へる

二二 とき彼等がかわきたることなかりき エホバ彼等のために磐より水をながれしめ また磐をさきたまへば水ほどば

二三 しりいでたり エホバいひたまはく悪きものには平安あることなし

第四九章

一 もろもろの島よ我にきけ 遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ 我うまれいづるよりエホ

二 バ我を召し われ母の胎をいづるよりエホバわが名をかたりつげたまへり エホバわが口を利劍と

三 なし我をその手のかげにかくし 我をときすましたる矢となして箠にをさめ給へり また我にいひ給はく 汝は

四 わが僕なり わが榮光のあらはるべきイスラエルなりと されど我いへり われは徒然にはたらき益なくむなし

五 ヤコブをふたゝび己にかへらしめイスラエルを己のもとにあつまらせんとて 我をうまれいでしより立て

六 おのれの僕となし給へるエホバひ給ふ(我はエホバの前にたふとくせらる 又わが神はわが力となりたまへり)

七 その聖言にいはくなんぢわが僕となりてヤコブのもろもろの支派をおこしイスラエルのうちののこりて全う

八 せしものを歸らしむることはいと輕し 我また汝をたてゝ異邦人の光となし 我がすくひを地のはてにまで到ら

九 しむ エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は 人にあなどらるゝもの民にいみきはるゝもの長たち

一〇 に役せらるゝ者にむかひて如此いひたまふ もろもろの王は見てたちもろもろの君はみて拜すべしこれ信實ある

エホバ、イスラエルの聖者なんぢを選びたまへるが故なり

一一 エホバ如此いひたまふ われ恵のときに汝にこたへ救の日になんぢを助けたり われ汝をまもりて民の契約

一二 とし國をおこし荒すたれたる地をまた産業としてかれらにつがしめん われ縛しめられたる者にいでよといひ

一三 暗にをるものに顯れよといはん かれら途すがら食ふことをなし もろもろの禿なる山にも牧草をうべし かれ

一四 らは飢ずかわかず 又やけたる砂もあつき日もうつことなし 彼等をあはれむもの之をみちびきて泉のほとりに和

一五 かにみちびき給ふべければなり 我わがもろもろの山を路とし わが大路をたかくせん 視よ人々あるひは

一六 遠きよりきたりあるひは北また西よりきたらん 或はまたシニムの地よりきたるべし 天ようたへ地よよろこ

べもろもろの山よ聲をはなちてうたへ エホバはその民をなぐさめその苦むものを憐みたまへばなり

一七 然どシオンはいへりエホバ我をすて主われをわすれたまへりと 婦その乳兒をわすれて己がはらの子を

一八 あはれまざることあらんや 縦ひかれら忘るゝことありとも 我はなんぢを忘るゝことなし われ掌になんぢ

イ太二三・三七

路二・三二 徒一三

・六七

へ詩六九・一三 哥後

テ賽四二・七 亞九

・六

又詩二二・六

ワ賽四三・五、六

夕詩一〇三・一三 馬

口賽四九・一

・四七、二六・二八 ホ詩七二・一〇、一一

六・二

ト賽四二・六

リ歌七・一六

ヲ賽四〇・四

ヨ賽四〇・二七

レ羅一一・二九

ソ出三一・九歌八・六　ネ賽六〇・四　二・四、一〇・一〇　ウ賽六〇・四、六六・　九・七、五二・一五、　一〇・一
 ナ儼一七・六　ム賽六〇・四・太三・九　二〇　六〇・一六　オ詩三四・二二　羅　ク太二二・二九　路一　マ歌一四・二〇、一六
 ツ賽四九・一九　ラ賽五四・一、二　亞　羅一一・二一、二二　牛詩七二・二一　賽四　ノ詩七二・九　米七・　五・五、九・三三、　一・二二、二二
 六

七 彫刻めり なんぢの石垣はつねにわが前にあり 七 なんぢの子輩はいそぎ來りなんぢを毀つもの汝をあらす者
 八 は汝より出さらん 一八 なんぢ目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべしエホバ
 九 宣給くわれは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし 新婦の帯のごとくに之をまどふべし 一九 なんぢの荒
 かつ廢れたるところ毀れたる地はこのち住ふもの多くして狭きをおほえんなんぢを吞つくしよもの遙に
 二〇 はなれ去るべし 二〇 むかし別れたりしなんぢの子輩はのちの日なんぢの耳のあたりにて語りあはん云くこゝは
 二 我がために狭しなんぢ外にゆきて我にすむべき所をえしめよと 二一 その時なんぢ心裏にいはん誰かわがため
 に此等のものを生しやわれ子をうしなひて獨居りかつ俘れ且さすらひたり 誰かこれを育てしや 視よわれ一人
 のこされたり 此等はいづこに居しや

三 主エホバいひたまはく 視よわれ手をもろもろの國にむかひてあげ 旗をもろもろの民にむかひてたてん
 四 斯てかれらはその懐中になんぢの子輩をたづさへ 二二 その肩になんぢの女輩をのせきたらん 二三 もろもろの王はな
 五 んぢの養父となりその后妃はなんぢの乳母となり かれらはその面を地につけて汝にひれふしなんぢの足の
 塵をなめん 而して汝わがエホバなるをしり われを俟望むものの恥をかうぶることなきを知るならん

六 勇士がうばひたる掠物をいかでとりかへし 強暴者がかすめたる虜をいかで救いだすことを得んや 二四 さ
 七 けれどエホバ如此いひたまふ云く ますらをが掠めたる虜もとりかへされ 強暴者がうばひたる掠物もすくひいださ
 八 るべしそは我なんぢを攻るものをせめてなんぢの子輩をすくふべければなり 二六 われなんぢを虐ぐるものにその
 九 肉をくらはせ またその血をあたらしき酒のごとくにのませて酔しめん 而して萬民はわがエホバにして汝を

イザヤ書 四九・一七——二六 一二四七

すくふ者ものなんぢを贖あがなふものヤコブの全能者ぜんんのうしやなることを知るべし

第五〇章

一 エホバかくいひ給たまふ わがなんぢらの母をさりたる離書さりがみはいづこにありや 我われいづれの債主さいしゆになんぢらなんぢらを賣うりわたしよや 視みよなんぢらはその不義ふぎのために賣うりられ なんぢらの母は汝なんぢららの咎戾とがのために

二 去さられたり 二 わがきたりし時ときなにゆゑ一人ひとりもをらざりしや 我われよびしとき何故なにゆゑひとりも答こたふるものなかりしや

わが手てみぢかくして贖あがなひえざるか われ救すくふべき力ちからなからんや 視みよわれ叱咤しつたすれば海うみはかれ河かははあれのとなり

三 そのなかの魚うをは水みづなきによりかわき死しにて臭氣におひをいだすなり 三 われ黒くろきころもを天てんにきせ鹿布あらたへをもて蔽おほひとなす

四 主しゆエホバは教をしへをうけしもの舌したをわれにあたへ言ことばをもて疲つかれたるものを扶たすけき 支たすけふることを知しりえ得えしめたまふ

五 また朝あさごとに醒さましわが耳みみをさまして教をしへをうけし者もののごとく聞きくことを得えしめたまふ 主しゆエホバわが耳みみをひらき給たまへり

六 われは逆さかふことをせず退しりぞくことをせざりき 六 われを撻むちうつものにわが背せをまかせ わが鬚ひげをぬくものにわが

七 頬ほをまかせ 恥はぢと唾つばとをさくるために面かほをおほふことをせざりき 主しゆエホバわれを助たすけたまはん この故ゆゑにわれ

八 恥はぢることなかるべし 我われわが面かほを石いしの如ごとくして恥はぢしめらるゝことなきを知る 八 われを義ぎとするもの近ちかきにあり

九 たれか我われとあらそはんや われら相共あひともにたつべし わが仇あだはたれぞや近ちかづききたれ 主しゆエホバわれを助たすけ給たまはん

誰たれかわれを罪つみせんや 視みよかれらはみな衣ころものごとくふるび蟲しむのためにくひつくされん 一〇 汝等なんぢらのうちエホバをおそれその僕しもべの聲こゑをきくものは誰たれぞや 暗くらきをあゆみて光ひかりをえざるともエホバの名みなをた

二 のみおのれの神かみにたよれ 二 火ひをおこし火把ひのたはを帯おびるものよ汝等なんぢらみなその火ひのほのほのなかをあゆめ 又またなんぢらの

イ詩九・一六 賽六〇 二五 八民一一・二三 賽五 一七 太一一・二八 太二六・六七、二七、 未伯一三・二八 詩一 二〇・七

二 賽五二・三 九・一 又出七・一八、二二 又出七・一八、二二 二六 約一八・二三 二〇・二六 賽五一

口中二四・一 耶三・ 六 太一一・二四 賽六五・ 一 出二〇・二二 獸六 ヨ太二六・三九 約一 一 哀三・三〇 六 六

八 何二・二 二二、六六、四 耶 四 四・三二 腓二・八 一 結三・八、九 一 賽五一・八

ハ王下四・一 太一八 七・一三、三五、一五 出二四・二二 一 出四・一一 來一〇・五 一 羅八・三二、三四 一 詩三三・四

ウ約九・三九 一・二二、二二 五二・二二 一 賽四六・二二、五六・ 二 賽四〇・二六 七 賽四四・二三 賽五 口伯二六・二二 詩八
 半詩一六・四 十 創二二・二二、二二 一 賽四一・二六、一七 二 賽四〇・二六 太 二 詩三七・三一 七・四、八九・一〇
 ノ羅九・三〇—三二 三 創二四・二二、三五 三 賽二・二二、二二 六 賽一〇二・二六、二六 太 二 詩一〇二・二六、二六 太 二 詩三七・三一 七・四、八九・一〇
 才賽五一・七 七 創二四・二二、三五 三 賽二・二二、二二 六 賽一〇二・二六、二六 太 二 詩一〇二・二六、二六 太 二 詩三七・三一 七・四、八九・一〇
 ク羅四・二、一六 來 四〇・二、五二・九、 二 賽二・二二、二二 六 賽一〇二・二六、二六 太 二 詩一〇二・二六、二六 太 二 詩三七・三一 七・四、八九・一〇

燃したる火把のなかをあゆめなんぢら斯のごとき事をわが手よりうけて悲みのうちに臥べし

第五章

義をおひ求めエホバを尋ねもとむるものよ我にきけなんぢらが斫出されたる磐となんぢらの掘
 出されたる穴とおもひ見よ 二 なんぢらの父アブラハム及びびなんぢらを生たるサラをおもひ見よ

われ彼をその唯一人なりしときに召しこれを祝してその子孫をまし加へたり 三 そはエホバ、シオンを慰めまた

その凡てあれたる所をなぐさめてその荒野をエデンのごとくその沙漠をエホバの園のごとくなしたまへり 斯て

その中によるこびと歡樂とあり感謝とうたうたふ聲とありてきこゆ

わが民よわが言にこゝろをとめよ わが國人よわれに耳をかたぶけよ 律法はわれより出づ われわが途をか

たく定めてもろもろの民の光となさん 五 わが義はちかづきわが救はずでに出たり わが臂はもろもろの民をさ

ばかん もろもろの島はわれを俟望み わがかひなに依頼ん 六 なんぢら目をあげて天を觀また下なる地をみよ

天は烟のごとくきえ地は衣のごとくふるびその中にすむ者これとひとしく死ん されどわが救はとこしへになが

らへ わが義はくだくることなし

義をしるものよ心のうちにわが律法をたもつ民よわれにきけ 人のそしりをおそるゝなかれ人ののゝしり

に憎くなかれ 八 そはかれら衣のごとく蠶にはまれ羊の毛のごとく蟲にはまれん されどわが義はとこしへに存

らへ わがすくひ萬代におよぶべし

さめよ醒よエホバの臂よちからを着よ さめて古への時むかしの代にありし如くなれ ラハブをきりころし

一〇 鱷をさしつらぬきたるは汝にあらずや 海をかわかし大なる淵の水をかわかしまた海のふかきところを贖は
 二 れたる人のすぐべき路となしは汝にあらずや エホバに贖ひすくはれしもの歌うたひつゝ歸りてシオンに
 きたりその首にとこしへの歡喜をいたゞきて快樂とよることびとをえん 而してかなしみと歎息とはにげさるべし
 二三 我こそ我なんぢらを慰むれ汝いかなる者なれば死べき人をおそれ草の如くなるべき人の子をおそるゝか
 二三 いかねば天をのべ地の基をすゑ汝をつくりたまへるエホバを忘れしや 何なれば汝をほろぼさんとて豫備
 二四 する虐ぐるものの憤れるをみて常にひねもす懼るゝか 虐ぐるものの忿恚はいづこにありや 身をかぢめぬる
 二五 俘囚はすみやかに解れて死ることなく穴にくだることなくその食はつくること無るべし 我は海をふるは
 二六 せ波をなりどよめかする汝の神エホバなりその御名を萬軍のエホバといふ 我わが言をなんぢの口におき
 二七 わが手のかげにて汝をおほへりかくてわれ天をうるゑ地の基をすゑ シオンにむかひて汝はわが民なりといはん
 二七 エルサレムよさめよさめよ起よなんぢ前にエホバの手よりその忿恚のさかづきをうけて飲みよるめかす
 二八 大杯をのみ且すひほしたり なんぢの生るもろの子のなかに汝をみちびく者なく汝のそだてたるもろも
 二九 ろの子の中にてなんぢの手をたづさふる者なし この二のこと汝にのぞめり誰かなんぢのために歎んや 荒廢
 三〇 の饑饉ほろびの劍なんぢに及びり我いかにして汝をなぐさめんや なんぢの子らは息たえだえにして網にかゝ
 れる羚羊のごとくして街衢の口にふす エホバの忿恚となんぢの神のせめとはかれらに満たり
 三二 このゆゑに苦しめるもの酒にあらで酔たるものよ之をきけ なんぢの主エホバおのが民の訟をあげつら

イ詩七四・一三、一四 八賽三五・一〇 二二 賽四〇・二二、 四・二三 耶三一・ 七 賽六五・二七、六六 申二八・二八、三四 賽四七・九
 賽二七・一 結二九 二 賽五一・三 四二・五、四四・二四 三五 申一八・一八 賽五 力 賽五二・一 結二三・三三、三四 二 賽七・二 賽二五・二一、二二 賽二二・二 賽二二・二 賽二二・二 賽二二・二
 口出二四・二二 賽四 八 賽四〇・六 六 賽九・二 約三・三四 三 伯二二・二〇 耶二 二〇 二 賽二二・二 賽二二・二 賽二二・二
 三・二六 三 伯九・八 詩一〇四 又 伯二六・二二 詩七 七 賽四九・二 五・一五、一六 一五 耶二五・一七、二六、
 二八 亞二二・二 詩六六・一一、一二

ウ寮五一・九、一七 二二・二二 オ黙二一・二七 ヤ歴二・七
牛尼一一・一 寮四八 ノ寮三五・八、六〇・ク寮三・二六、五一・マ詩四四・二二 寮四 ケ創四六・六 徒七・
二二 太四・五 黙 二一 第一・一五 二二三 五・一三 耶一五・一四 一四 一三 一四 一四 一四 一四 一四 一四
フ結三六・二〇、二三 一五
羅二・二四 一〇、九七・一
エ詩九三・一、九六・
ア寮四八・二〇
サ詩九八・二、三

ひ給ふ なんぢの神かくいひ給ふ 我よろめかす酒杯をなんぢの手より取除き わがいきどほりの大杯をとりのぞ
きたり 汝ふたゝびこれを飲ことあらじ 我これを汝をなやますものの手にわたさん 彼らは曩になんぢの靈魂
にむかひて云らくなんぢ伏せよわれら越ゆかんと 而してなんぢその背を地のごとくし 衝のごとくし 彼等のこえ
ゆくに任せたり

第五章

一 シオンよ醒よさめよ 汝の力を衣よ 聖都エルサレムよなんぢの美しき衣をつけよ 今より割禮を
二 うけざる者および潔からざるものふたゝび汝に在ること無るべければなり なんぢ身の塵をふり
おとせ エルサレムよ起よすわれ 俘れたるシオンのむすめよ汝がうなじの繩をときすてよ

三 そはエホバかく言給ふ なんぢらは價なくして賣られたり 金なくして贖はるべし 主エホバ如此いひ給
五 ふ曩にわが民エジプトにくだりゆきて彼處にとゞまれり アツスリヤ人ゆるゑなくして彼等をしへたげたり 一
ホバ宣給く わが民はゆるゑなくして俘れたり されば我こゝに何をなさん エホバのたまはく 彼等をつかさどる者

六 さげびよばはり わが名はつねに終日けがさるゝなり 此の故にわが民はわが名をしらん このゆるゑにその日に
は彼らこの言をかたるもの我なるをしらん 我こゝに在り

七 よろこびの音信をつたへ 平和をつげ 善おとづれをつたへ 救をつげ シオンに向ひてなんぢの神はすべ治め
八 たまふといふものの足は 山上にありていかに美しきかな なんぢが斥候の聲きこゆ かれらはエホバのシオン
九 に歸り給ふを目と目とあひあはせて視るが故に みな聲をあげてもろともうたへり エルサレムの荒廢れたる

一〇 ところよ聲をはなちて共にうたふべし エホバその民をなくさめ エルサレムを贖ひたまひたればなり 一〇 エホバ

そのきよき手をもろもろの國人の目のまへにあらはしたまへり 地のもろもろの極までもわれらの神のすくひを見ん

二 なんぢら去よされよ 彼處をいでて汚れたるものに觸るなかれ その中をいでよ エホバの器をになふ者よ

三 なんぢら潔くあれ なんぢら急ぎいづるにあらす趨りゆくにあらず エホバはなんぢらの前にゆきイスラエルの神はなんぢらの軍後となり給ふべければなり

四 視よわがしもべ智慧をもておこなはん 上りのほりて甚だたかくならん 曩にはおほくの人かれを見て

五 おどろきたり（その面貌はそこなはれて人と異なり その形容はおとろへて人の子とことなれり） 後には彼お

ほくの國民にそゝがんと王たち彼によりて口を緘まん そはかれら未だつたへられざることを見いまだ聞ざること

を悟るべければなり

第五章

一 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや エホバの手はたれにあらはれしや かれは主のまへに芽えのごとく 燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり われらが見るべきうるはしき容なき

二 くうつくしき貌はなく われらがしたふべき艶色なし かれは侮られて人にすてられ 悲哀の人にして病患を

しれり また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく侮られたり われらも彼をたふとまさりき

三 まことに彼はわれらの病患をおひ我儕のかなしみを擔へり 然るにわれら思へらく彼はせめられ神にうた

四 れ苦しめらるゝなりと 彼はわれらの愆のために傷けられ われらの不義のために碎かれ みづから懲罰をう

イ路三・六 八・八出四・一九 又結三六・二五 徒二二・一、一六 哥前一・二八 七

ロ賽四八・二〇 耶五 八利二三・二 三三三 來九・一三、二六 弗三・五、九 ヨ賽一一・一 一六 哥前一・二八 七

〇・八、五一、六、四 二出二二・三三、三九 二六 弗三・五、九 ヨ賽一一・一 一六 哥前一・二八 七

五 亞二・六、七、七 ホ米二・一三 三三三 來九・一三、二六 弗三・五、九 ヨ賽一一・一 一六 哥前一・二八 七

後六・一七 歌一八 へ民一〇・二五 賽五 三三三、三 一四 賽四九・七、二二 〇・一六 二二 詩二二・六 賽四九 二八 彼前二・二四

ナ羅四・二五 哥前一 五三 彼前三・一八

六〇 一五・五 六〇 一七・三 二二・三七 四二・七
 六二 一五・五 六二 一七・三 二二・三七 四二・七
 六三 一五・五 六三 一七・三 二二・三七 四二・七
 六四 一五・五 六四 一七・三 二二・三七 四二・七
 六五 一五・五 六五 一七・三 二二・三七 四二・七
 六六 一五・五 六六 一七・三 二二・三七 四二・七
 六七 一五・五 六七 一七・三 二二・三七 四二・七
 六八 一五・五 六八 一七・三 二二・三七 四二・七
 六九 一五・五 六九 一七・三 二二・三七 四二・七
 七〇 一五・五 七〇 一七・三 二二・三七 四二・七
 七一 一五・五 七一 一七・三 二二・三七 四二・七
 七二 一五・五 七二 一七・三 二二・三七 四二・七
 七三 一五・五 七三 一七・三 二二・三七 四二・七
 七四 一五・五 七四 一七・三 二二・三七 四二・七
 七五 一五・五 七五 一七・三 二二・三七 四二・七
 七六 一五・五 七六 一七・三 二二・三七 四二・七
 七七 一五・五 七七 一七・三 二二・三七 四二・七
 七八 一五・五 七八 一七・三 二二・三七 四二・七
 七九 一五・五 七九 一七・三 二二・三七 四二・七
 八〇 一五・五 八〇 一七・三 二二・三七 四二・七
 八一 一五・五 八一 一七・三 二二・三七 四二・七
 八二 一五・五 八二 一七・三 二二・三七 四二・七
 八三 一五・五 八三 一七・三 二二・三七 四二・七
 八四 一五・五 八四 一七・三 二二・三七 四二・七
 八五 一五・五 八五 一七・三 二二・三七 四二・七
 八六 一五・五 八六 一七・三 二二・三七 四二・七
 八七 一五・五 八七 一七・三 二二・三七 四二・七
 八八 一五・五 八八 一七・三 二二・三七 四二・七
 八九 一五・五 八九 一七・三 二二・三七 四二・七
 九〇 一五・五 九〇 一七・三 二二・三七 四二・七
 九一 一五・五 九一 一七・三 二二・三七 四二・七
 九二 一五・五 九二 一七・三 二二・三七 四二・七
 九三 一五・五 九三 一七・三 二二・三七 四二・七
 九四 一五・五 九四 一七・三 二二・三七 四二・七
 九五 一五・五 九五 一七・三 二二・三七 四二・七
 九六 一五・五 九六 一七・三 二二・三七 四二・七
 九七 一五・五 九七 一七・三 二二・三七 四二・七
 九八 一五・五 九八 一七・三 二二・三七 四二・七
 九九 一五・五 九九 一七・三 二二・三七 四二・七
 一〇〇 一五・五 一〇〇 一七・三 二二・三七 四二・七

六 けてわれらに平安をあたふ そのうたれし瘻によりてわれらは癒されたり 六 われらはみな羊のごとく迷ひてお
 のおの己が道にむかひゆけり 然るにエホバはわれら凡てのものに不義をかれのうへに置たまへり

七 彼はくるしめられるれどもみづから謙だりて口をひらかず 屠場にひかる、羔羊の如く毛をきる者のまへに

八 もだす羊の如くしてその口をひらかざりき 八 かれは虐待と審判によりて取去れたり その代の人のうち誰か

九 彼が活るものの地より絶れしことを思ひたりしや 彼はわが民のとがの爲にうたれしなり 九 その墓はあしき者

一〇 とともに設けられたれど死るときは富るものとともになれり かれは暴をおこなはずその口には虚偽なかりき

一〇 されどエホバはかれを砕くことをよるこびて之をなやましたまへり 斯てかれの靈魂とがの献物をなすに

二 いたらば彼その末をみるを得その日は永からん かつエホバの悦び給ふことは彼の手によりて榮ゆべし 二 かれ

は己がたましひの煩勞をみて心たらはん わが義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし又かれらの不義

三 をおはん 三 このゆゑに我かれをして大なるものとともに物をわかち取しめん かれは強きものとともに掠物を

わかちとるべし 彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ懲あるものとともに數へられたればなり 彼はおほ

くの人の罪をおひ懲あるもの爲にとりなしをなせり

第五十四章

一 なんぢ孕まず子をうまざるものよ歌うたふべし 産のくるしみなきものよ聲をはなちて謳ひよば
 はれ 夫なきものの子はとつげるものの子よりおほしと 此はエホバの聖言なり 汝が幕屋のうち
 を廣くしなんぢが住居のまくをはりひろげて吝むなかれ 汝の綱をながくしなんぢの杓をかたくせよ 三 そは

なんぢが右に左にひろがりなんぢの裔はもろもろの國をえ荒廢れたる邑をもすむべき所となさしむべし

四 懼るゝなかれなんぢ恥ることなからん惶てふためくことなかれ汝はぢしめらるゝことなからん若きとき

五 の恥をわすれ寡婦たりしときの恥辱をふたゝび覺ることなからんなんぢを造り給へる者はなんぢの夫なり

六 その名は萬軍のエホバなんぢを贖ひ給ふものはイスラエルの聖者なり全世界の神となへられ給ふべし

七 エホバ汝をまねきたまふ棄られて心うれふる妻また若きとき嫁てさられたる妻をまねくがごとしと此はなんぢの

八 神のみことばなり我しばし汝をすてたれど大なる憐憫をもて汝をあつめんわが忿恚あふれて暫くわが面

九 をなんぢに隠したれど永遠のめぐみをもて汝をあはれまんと此はなんぢをあがなひ給ふエホバの聖言なり

一〇 しめんと誓ひしがそのごとく我ふたゝび汝をいきどほらず再びなんぢを責じとちかひたり山はうつり岡は

うごくともわが仁慈はなんぢよりうつらず平安をあたふるわが契約はうごくことなからんと此はなんぢを憐

二 みたまふエホバのみことばなり

三 なんぢ苦しみをうけ暴風にひるがへされ安慰をえざるものよ我うるはしき彩色をなしてなんぢの石をす

四 青き玉をもてなんぢの基をおきくれなるの玉をもてなんぢの櫓をつくりむらさきの玉をもてなんぢの

五 門をつくりなんぢの境内はあまねく寶石にてつくるべし又なんぢの子輩はみなエホバに教をうけなんぢの

六 子輩のやすきは大きならんなんぢ義をもて堅くたち虐待よりとほざかりて憐ることなくまた恐懼よりとほざ

七 かるべしそは恐懼なんぢに近づくことなければなり縦ひかれら群集ふとも我によるにあらず凡てむれつ

イ賽五五・五、六一・九 二亞一四・九 羅三・ へ詩三〇・五 賽二六・ ト賽五五・三 耶三一・ 賽五五・一 耶三 六 太五・一八 哥前二・一〇 撒前

口耶三・一四 二九 二〇、六〇・一〇 三 一・三五、三六 又詩八九・三三、三四 ヲ賽一一・九 耶三一・ 四・九 約壹二・二〇 八路一・三二 ホ賽六二・四 哥後四・一七 チ創八・二二、九・一一 詩四六・二 賽五一・ ル代上二九・二 黙二 三四 約六・四五 詩一一九・一六五

力賽四五・二四、二五 獸三・二八 二八 徒一三・三四 何三・五 一三 才亞八・一七 才申三・二
 ヨ約四・一四、七・三七 太一一・二八 一 約一八・三七 獸一 一 賽五二・一五 弗二 牛詩三二・六 太五 一 詩一三〇・七 耶三
 獸二一・六、二二 賽五四・八、六一・八 五 二 耶三〇・九 結三四 ム賽六〇・五 約七・三四、八・二二 才申後七・一九
 一七 耶三二・四〇 一 耶三〇・九 結三四 ム賽六〇・五 約七・三四、八・二二 才申後七・一九
 才太一三・四四、四六 才申後七・八 詩八九 二 二二 但九・二五 才賽六〇・九 徒三 一 賽一・一六 才申一〇三・一一

一六 どひて汝をせむる者はなんぢの故にたふるべし 一六 みよ炭火をふきおとして用るべき器をいだす鐵工はわが創造
 一七 するところ 又あらし滅ぼす者もわが創造するところなり 一七 すべてなんぢを攻んとてつくられしうつはものは
 利あることなし 興起ちてなんぢとあらしむ訴ふる舌はなんぢに罪せらるべし 一七 これエホバの僕等のうくる産業
 なり 是かれらが我よりうくる義なりとエホバのたまへり

第五十五章

一 噫なんぢら渴ける者ことごとく水にきたれ 金なき者もきたるべし 汝等きたりてかひ求めてくら
 へ きたれ金なく價なくして葡萄酒と乳とをかへ 二 なにゆる糧にもあらぬ者のために金をいだし

飽ことを得ざるものために勞するや われに聽従へ さらばなんぢら美物をくらふをえ脂をもてその靈魂をたの
 三 しまするを得ん 耳をかたづけ我にきたりてきけ 汝等のたましひは活べし われ亦なんぢらととしへの契約
 四 をなしてダビデに約せし變らざる恵をあたへん 四 視よわれ彼をたてゝもろもろの民の證とし又もろもろの民の
 五 君となし命令する者となせり 五 なんぢは知ざる國民をまねかん 汝をしらざる國民はなんぢのもとに走りきた
 らん 此はなんぢの神エホバ、イスラエルの聖者のゆゑによりてなり エホバなんぢを尊くしたまへり
 七六 なんぢら遇ことをうる間にエホバを尋ねよ 近くゐたまふ間によびもとめよ 七六 悪きものはその途をすて
 よこしまなる人はその思念をすてゝエホバに反れ さらば憐憫をほどこしたまはん 我等の神にかへれ豊に赦をあ
 九八 たへ給はん エホバ宣給く わが思はなんぢらの思とことなり わが道はなんぢらのみちと異なれり 九八 天の地
 一〇 よりたかきがごとく わが道はなんぢらの道よりも高く わが思はなんぢらの思よりもたかし 一〇 天より雨くだり

雪おちて復かへらず地をうるほして物をはえしめ 萌をいださしめて播ものに種をあたへ食ふものに糧をあたふ
 二 如此わが口よりいづる言もむなしくは我にかへらず わが喜ぶところを成し わが命じ遣りし事はたさん
 三 なんぢらは喜びて出きたり平穩にみちびかれゆくべし 山と岡とは聲をはなちて前にうたひ野にある樹はみな
 三 手をうたん 松樹はいばらにかはりてはえ岡拈樹は棘にかはりてはゆべし 此はエホバの頌美となり並とこし
 への徴となりて絶ることなからん

第五十六章

一 エホバ如此いひ給ふなんぢら公平をまもり正義をおこなふべし わが救のきたるはちかくわが
 義のあらはるゝは近ければなり 安息日をまもりて汚さず その手をおさへて悪きことをなさず
 二 斯おこなふ人かく堅くまもる人の子はさいはひなり エホバにつらなれる異邦人はいふなかれ エホバ必ず
 三 我をその民より分ち給はんと 寺人もまたいふなかれ われは枯たる樹なりと エホバ如此いひたまふ わが安
 四 息目をまもり わが悦ぶことをえらみて我が契約を堅くまもる 寺人には 我わが家のうちにてわが垣のうちにて
 五 子にも女にもまさる記念のしるしと名とをあたへ 並とこしへの名をたまふて絶ることなからしめん

六 またエホバにつらなりこれに事へ エホバの名を愛しその僕となり 安息日をまもりて汚すことなく 凡て
 七 わが契約をかたくまもる異邦人は 我これをわが聖山にきたらせ わが祈の家のうちにて樂ましめん かれらの
 八 燔祭と犠牲とはわが祭壇のうへに納めらるべし わが家はすべての民のいのりの家となへらるべければなり
 九 イスラエルの放逐れたるものを集めたまふ主エホバのたまはく 我さらに人をあつめて既にあつめられたる者

イ 賽五四・九 三五・二、四二・一
 ロ 賽三五・一〇、六五 一
 ハ 詩九六・二二、九八 八 賽一四・八、八 賽四一・一九
 ト 耶一三・一一 又申二三・一一三 徒 一・二二 約登三・一五 彼前二・五
 チ 賽四六・二三 太三・二、四・二七 羅 二・三四、一七・四、一八・七 彼前一・一
 リ 賽五八・二三 提前三・二五 カ 羅二二・一 來一三・一 夕馬一・一一
 ヲ 太二二・一三 可 一・二二 一・一七 路一九・一 約一〇・二六 弗一
 ッ 詩二四七・二 賽一

ツ耶一・二・九
 米太一五・一四、二三
 結三四・二・三
 詩一〇・六、三三
 三三・三三
 路一・二・一九、哥前
 一五・三二
 半詩一・二・米七・二
 王上二・四・二三、五
 下二・二・二〇
 才代下・一六・一四
 ク太一六・四
 王下二・一六・四、一七
 耶二・二・二〇
 利一八・二・二〇
 王下二・一六・三、
 二・三・一〇、耶七、
 結一六・二六、二八、
 二・三・二・二〇
 二〇・二六
 結二六・一六、二五
 結二二・四一
 結一六・二六、二八、
 二・三・二・二〇
 二・三・二・二〇
 二・三・二・二〇
 何七・一・一、二・二・一

にくはへん

九の、けもの
 野獸よみなきたりてくらへ 林にをるけものよ皆きたりてくらへ 斥候はみな瞽者にしてしることな

二 しみな嘔なる犬にして吠ることあたはず みな夢みるもの臥るもの眠ることをこのむ者なり 一の犬はむさ

三 ぼること甚だしくして飽ことをしらず かれらは悟ることを得ざる牧者にして皆おのが道にむかひゆき 何れにを

三 る者もおのおの己の利をおもふ かれら互にいふ請われ酒をたづさへきたらん われら濃酒にのみあかん かく
 て明日もなほ今日のごとく大にみち足はせんと

第五十七章

一 義者ほろぶれども心にとむる人なく 愛しみ深き人々とりさらるれども義きものの禍害のまへ
 より取去るゝなるを悟るものなし 二 かれは平安にいり 直きをおこなふ者はその寐床にやすめり

三 なんぢら巫女の子淫人また妓女の裔よ 近ききたれ 四 なんぢら誰にむかひて戯れをなすや 誰にむかひて

五 口をひらき舌をのばすや なんぢらは悖逆の子輩いつはりの黨類にあらずや 五 なんぢらは檀樹のあひだ緑りなる

六 木々のしたに心をこがし 谷のなか岩の狭間に子をころせり 六 なんぢは谷のなかの滑かなる石をうくべき嗣業

七 としこれをなんぢが所有とす なんぢ亦これに灌祭をなし之にそなへものを献げたり われ之によりていかで心

八 をなだむべしや 七 なんぢは高くそびえたる山の上になんぢの床をまうけ かつ其處にのほりゆきて犠牲をさゝ

九 げたり 八 また戸および柱のうしろに汝の記念をおけり なんぢ我をはなれて他人に身をあらはし 登りゆきて

九 その床をひろくしかれらと誓をなし 又かれらの床を愛しこれがためにその所をえらびたり 九 なんぢ香膏と

〇 おほくの薫物とをたづさへて王にゆき 又なんぢの使者をとほきにつかはし陰府にまで己をひくゝせり なん

ぢ途のながきに疲れたれどなほ望なしといはずなんぢ力をいきかへされしによりて衰弱ざりき

二 なんぢ誰をおそれ誰のゆるに憎きていつはりをいひ 我をおもはず亦そのことを心におかざりしや われ久

しく黙したれど汝かへりて我をおそれざりしにあらずや 我なんぢの義をつげしめさんなんぢの作はなんぢ

三 に益せじ なんぢ呼るときその集めおきたるもの汝をすくへ 風はかれらを悉くあげさり 息はかれらを吹さ

らん 然どわれに依頼むものは地をつぎわが聖山をうべし

二四 また人いはん 土をもり土をもりて途をそなへよ わが民のみちより 躓礙をとりされと 至高く至上な

る永遠にすめるもの聖者となづくもの如此いひ給ふ 我はたかき所よき所にすみ 亦こゝろ砕けてへりくだる

者とともにすみ 謙だるものの靈をいかし砕けたるものの心をいかす われ限なくは争はじ我たえずは怒らじ

二七 然らずば人のこゝろ我がまへにおとろへん わが造りたる靈はみな然らん 彼のむさぼりの罪により我いかり

二八 て之をうちまた面をおほひて怒りたり 然るになほ恃りて己がこゝろの途にゆけり されど我その途をみたり

二九 我かれを愈すべし 又かれを導きてふたゝび安慰をかれとその中のかなしめる者にかへすべし 我くちびる

の果をつくれり 遠きものにも近きものにも平安あれ平安あれ 我かれをいやさん 此はエホバのみことばなり

三〇 然はあれど悪者はなみだつ海のごとし 靜かなること能はずしてその水つねに濁と泥とをいだせり わが

神いひたまはく悪きものには平安あることなしと

イ耶二・二五 水伯六・一〇 路一・二七、一三八・六 九 米七・一八 一五 徒二・三九 弗二・一七
ロ 賽五一・一二、一三 賽六六・二 又民一六・二二 伯三 ワ 賽九・一三 一七
ハ 詩五〇・二二 へ 詩六八・四 亞二・チ 詩一四七・三 賽六 四・二四 來一二・九 カ 耶三・二二 一六
ニ 賽四〇・三、六二 一三 一・一 ル 耶六・一三 三 賽六二・二 一六
一〇 ト 詩三四・一八、五一 一 詩八五・五、一〇三 七 賽八・二七、四五 夕 來一三・一五 一六
ツ 賽四八・二二

未馬三・一四
 ナ利一六・二九、三一、
 二二三・二七
 ラ王上二一・九、一二、
 一三三
 ヲ利一六・二九
 一三三
 平帖四・三 伯二・八
 但九・三 拿三・六
 夕結一八・七、一六
 ノ尼五、一〇—一二
 太二五・三五
 才耶三四・九
 マ創二九・一四 尼五・
 五
 ケ伯一一・二七
 フ出二四・一九 賽五
 二・一二
 コ時一二・二二

第五八章

一 大によばはりて聲ををしむなかれ 汝のこゑをラツパのごとくあげ わが民にその愆をつけヤコブ
 二 の家いへにその罪つみをつけしめせ 二 かれらは日々われを尋たづねめわが途みちをしらんことをこのむ義ぎをおこ
 三 なひ神かみの法のりをすてざる國くにのごとく義たしき法のりをわれにもとめ神かみと相近あひちかづくことをこのめり 三 かれらはいふわれら
 四 断食だんじきするになんぢ見たまはず われら心をくるしむるになんぢ知しりたまはざるは何ぞやと視みよなんぢらの断食だんじきの日
 五 にはおのがこのむ作わざをなしその工人はたらきびとをことごとく惱なやめつかふ 四 視みよなんぢら断食だんじきするときは相あひあらそひ相あひき
 六 そひ惡あくの拳こぶしをもて人ひとをうつつ なんぢらの今いまのだんじきはその聲こゑをうへに聞きえしめんとならざるなり 五 斯かくの
 七 ごとき断食だんじきはわが悦よろこぶところのものならんや かくのごときは人ひとその靈魂たましひをなやますの日ひならんや その首かぶを葦よしの
 八 ごとくにふし鹿服あらたへと灰はひとをその下したにしくをもて断食だんじきの日ひまたエホバに納いれらるゝ日ひとなふべけんや 六 わが悦よろこぶ
 九 ところの断食だんじきはあくの繩なはをほどき輓くびきのつなをととき虐しへたげらるゝものを放はなちさらしめすべての輓くびきををるなどの事ことに
 一〇 あらずや 七 また飢うゑたる者ものになんぢのパンぱんを分わかちあたへさすらへる貧民まづしきものをなんぢの家いへにいれ裸はだかなるものを見て
 一一 これに衣きせ おのが骨肉こつにくに身みをかくさざるなどの事ことにあらずや 八 しかる時ときはなんぢのひかり 曉あかつきの如ごとくにあら
 一二 はれいで 汝なんぢすみやかに愈いやさるゝことを得えなんぢの義ぎはなんぢの前まへにゆきエホバの榮光えいこうはなんぢの軍後しんがりとなるべ
 一三 し 九 また汝なんぢよぶときはエホバ答こたへたまはん なんぢ叫よびぶときは我われこゝに在ありといひ給たまはん
 一四 もし汝なんぢのなかより輓くびきをのぞき指點ゆびさしをのぞき惡あしきことをかたるを除のき 一〇 なんぢの靈魂たましひの欲ほつするものをも
 一五 飢うゑたる者ものにほどこし苦くるしむもの的心こころを満足みちたらしめばなんぢの光ひかりくらきにてりいで なんぢの闇やみは晝ひるのごとくなら
 一六 ん 二 エホバは常つねになんぢをみちびき乾かわけるところにても汝なんぢのこゝろを満足みちたらしめなんぢの骨ほねをかたうし給たまはん

三 なんぢは潤ひたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし 汝よりいづる者はひさしく荒廢れたる所をおこしなんぢは累代やぶれたる基をたてん 人なんぢをよびて破隙をおぎなふ者といひ 市街をつくるひてすむべき所となす者といふべし

二三 もし安息日になんぢの歩行をとどめ 我聖日になんぢの好むわざをおこなはず 安息日をとなへて樂日となし エホバの聖日をとなへて尊むべき日となし之をたふとみて己が道をおこなはず おのが好むわざをなさず おのが言をかたらずば 其の時なんぢエホバを樂しむべし エホバなんぢを地のたかき處にのらしめなんぢが先祖ヤコブの産業をもて汝をやしなひ給はん 此はエホバより語りたまへるなり

第五九章

一 エホバの手はみぢかくして救ひえざるにあらずその耳はにぶくして聞えざるにあらず 惟なんぢらの邪曲なる業なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり 又なんぢらの罪その面をおほひて聞えざらしめたり 是はなんぢらの手は血にてけがれなんぢらの指はよこしまにて汚れなんぢらのくちびるは虚偽をかたりなんぢらの舌は惡をさしやき 其の一人だに正義をもてうつたへ眞實をもて論らふものなし 彼らは虚浮をたのみ虚偽をかたり 惡しきくはだてをはらみ不義をうむ かれらは蝮の卵をかへし蛛網をおる 其の卵をくらふものは死るなり 卵もし踐るればやぶれて毒蛇をいだす 其の織るところは衣になすあたはず 其の工をもて身をおほふこと能はず かれらの工はよこしまの工なり かれらの手には暴虐のおこなひあり かれらの足はあくにはしり罪なき血をながすに速しかれらの思念はよこしまの思念なり 殘害と滅亡とその路徑にのこれり 彼らは平穩なる道をしらずその過るところに公平なく又まがれる小徑をつくる 凡てこれを踐もの

イ 賽六一・四 二 申三三・二三、三三 五 米四・四 ト 賽一・二五 八 伯八・二四、一五 九 詩一二五・五 箴二・
 口 賽五六・二 二 民一一・二三 賽五 十 伯一五・三五 詩七 又 箴一・二六 羅三・ 一五
 ハ 伯二二・二六 六 賽一・二〇、四〇、 〇・二 一四

ラ耶八・一五
カ察三八・一四 結七・タ結三二・三〇
ツ弗六・一四、一七
ナ詩一一三・三馬一・ム羅一一・二六
ウ來八・一〇、一〇・一〇・
一六

ワ申二八・二九 伯五・
レ可六・六
提前五・八
一四 察八・九
ヨ太一一・三四
ソ察六三・五
ネ察六三・六
ラ歌一一・二五

は平穩をしらず

- 九 このゆゑに公平はとほくわれらをはなれ正義はわれらに追及すわれら光をのぞめど暗をみ光輝をのぞめ
- 一〇 ど闇をゆく われらは替者のごとく牆をさぐりゆき目なき者のごとく摸りゆき正午にても日暮のごとくにつま
- 二 づき強壯なる者のなかにありても死るもののごとし 我儕はみな熊のごとくにほえ鴿のごとくに甚くうめき
- 三 審判をのぞめどもあることなく救をのぞめども遠くわれらを離る われらの愆はなんぢの前におほくわれら
- 三 のつみは證してわれらを訟へわれらのがは我らとともに在りわれらの邪曲なる業はわれら自らしれり わ
- れら罪ををかしてエホバを棄われらの神にはなれてしたがはず 暴虐と悖逆とをかたり虚偽のことばを心にはら
- 四 みて説出すなり 公平はうしろに退けられ正義ははるかに立りそは眞實は衢間にたふれ正直はいることを得
- 五 ざればなり 眞實はかけてなく悪をはなるものは掠めうばはる
- 六 エホバこれを見てその公平のなかりしを悦びたまはざりき エホバは人なきをみ中保なきを奇しみたま
- 七 へり斯てその臂をもてみづから助けその義をもてみづから支たまへり エホバ義をまとひて護胸とし救を
- 八 その頭にいたゞきて兜となし仇をまとひて衣となし熱心をきて外服となしたまへり かれらの作にしたがひ
- 九 て報をなし敵にむかひていかり仇にむかひて報をなしまた島々にむくいをなし給はん 西方にてエホバの名
- をおそれ日のいづる所にてその榮光をおそるべし エホバは堰ぎとめたる河のその氣息にふき潰えたるがごとく
- 一〇 に来りたまふ可ればなり エホバのたまはく贖者シオンにきたりヤコブのなかの愆をはなる者につかんと
- 二 エホバいひ給くなんぢの上にあるわが靈なんぢの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんぢの口

よりなんぢの裔の口より汝のすゑの裔の口よりはなれざるべし わがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホバのみことばなり

二一 起よひかりを發てなんぢの光きたりエホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり 視よ

三 榮光なんぢのうへに顯はるべし もろもろの國はなんぢの光にゆきもろもろの王はてり出るなんぢが光輝に

ゆかん

四 なんぢの目をあげて環視せかれらは皆つどひて汝にきたり汝の子輩はとほきより來りなんぢの女輩は

五 いだかれて來らん そのときなんぢ視てよろこびの光をあらはしなんぢの心おどろきあやしみ且ひろらかに

六 なるべしそは海の富はうつりて汝につきもろもろの國の貨財はなんぢに來るべければなり おほくの駱駝

ミデアンおよびエバのわかき駱駝なんぢの中にあまねくみちシバのもろもろの人こがね乳香をたづさへきたり

七 エホバの譽をのべつたへん ケダルのひつじの群はみな汝にあつまりきたりネバヨテの牡羊はなんぢに

八 事へわが祭壇のうへにのぼりて受納られん斯てわれわが榮光の家をかどやかすべし 雲のごとくとび鳩の

九 その窠にとびかへるが如くしてきたる者はたれぞ もろもろの島はわれを俟望みタルシシのふねは首先になん

ぢの子輩をとほきより載きたり並かれらの金銀をとものにのせきたりてなんぢの神エホバの名にさゝげイスラエ

ルの聖者にさゝげんエホバなんぢを輝かせたまひたればなり

一〇 異邦人はなんぢの石垣をきづきかれらの王等はなんぢに事へんそは我いかりて汝をうちしかどまた惠

イ弗五・二四 ハ賽四九・一八 ホ羅一・二五 チ賽六一・六 太二・ 又基二・七、九 ヲ加四・二六 カ耶三・一七
ロ賽四九・六、二三 歌 二賽四九・二〇、二二、 へ創二五・四 ル詩七二・一〇 賽四 一詩六八・三〇 臨一 ヲ賽五五・五
二二・二四 二二、六六・二二 ト詩七二・一〇 リ創二五・二三 二・四、五一・五 四・一四 夕臨六・一五 ソ賽五七・一七

一 二七
 二 二七
 三 二七
 四 二七
 五 二七
 六 二七
 七 二七
 八 二七
 九 二七
 一〇 二七
 一一 二七
 一二 二七
 一三 二七
 一四 二七
 一五 二七
 一六 二七
 一七 二七
 一八 二七
 一九 二七
 二〇 二七
 二一 二七
 二二 二七
 二三 二七
 二四 二七
 二五 二七
 二六 二七
 二七 二七
 二八 二七
 二九 二七
 三〇 二七
 三一 二七
 三二 二七
 三三 二七
 三四 二七
 三五 二七
 三六 二七
 三七 二七
 三八 二七
 三九 二七
 四〇 二七
 四一 二七
 四二 二七
 四三 二七
 四四 二七
 四五 二七
 四六 二七
 四七 二七
 四八 二七
 四九 二七
 五〇 二七
 五一 二七
 五二 二七
 五三 二七
 五四 二七
 五五 二七
 五六 二七
 五七 二七
 五八 二七
 五九 二七
 六〇 二七
 六一 二七
 六二 二七
 六三 二七
 六四 二七
 六五 二七
 六六 二七
 六七 二七
 六八 二七
 六九 二七
 七〇 二七
 七一 二七
 七二 二七
 七三 二七
 七四 二七
 七五 二七
 七六 二七
 七七 二七
 七八 二七
 七九 二七
 八〇 二七
 八一 二七
 八二 二七
 八三 二七
 八四 二七
 八五 二七
 八六 二七
 八七 二七
 八八 二七
 八九 二七
 九〇 二七
 九一 二七
 九二 二七
 九三 二七
 九四 二七
 九五 二七
 九六 二七
 九七 二七
 九八 二七
 九九 二七
 一〇〇 二七

一 二 をもて汝を憐みたればなり 二 二 なんぢの門はつねに開きて夜も日もとどすことなしこは人もろもろの國の貨財
 二 三 をなんぢに携へきたりその王等をひきゐる來らんがためなり 三 三 なんぢに事へざる國と民とはほろびそのくにぐ
 三 三 には全くあれすたるべし 三 三 レバノンの榮はなんぢにきたり松杉黄楊はみな共にきたりて我が聖所をかどや
 三 四 かさんわれ亦わが足をおく所をたふとくすべし 一四 汝を苦しめたるものの子輩はかゞみて汝にきたり汝をさげ
 一五 しめたる者はことごとくなんぢの足下にふし斯て汝をエホバの都イスラエルの聖者のシオンとなへん (井)
 一六 となさん 一六 なんぢ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をとしへの華美よの歡喜
 一七 ヤコブの全能者なるを知るべし 一七 われ黄金をたづさへきたりて赤銅にかへ白銀をたづさへきたりて鐵にかへ
 一八 赤銅を木にかへ鐵を石にかへなんぢの施政者をおだやかにしなんぢを役するものを義うせん 一八 強暴のこと
 一九 再びなんぢの地にきこえず 殘害と敗壞とはふたゝびなんぢの境にきこえず 汝その石垣をすくひととなへその
 二〇 門を譽となへん 一九 晝は日ふたゝびなんぢの光とならず 月もまた輝きてなんぢを照さず エホバ永遠になんぢ
 二〇 の光となりなんぢの神はなんぢの榮となり給はん 二〇 なんぢの日はふたゝび落すなんぢの月はかくることなか
 二一 るべしそはエホバ永遠になんぢの光となり 汝のかなしみの日畢るべければなり 二二 汝の民はことごとく義者
 二三 となりてとしへに地を嗣ん かれはわが植たる樹株わが手の工わが榮光をあらはす者となるべし 二三 その小き
 ものは干となりその弱きものは強國となるべし われエホバその時いたらば速かにこの事をなさん

ウ 賽六〇・一八、六二
ノ 賽六二・四、二二
オ 亞九・二六
ク 何一・二〇 俄前二・
六、七
マ 賽四九・一四、五四
ケ 賽六五・一九
フ 結三・二七、三三・七
エ 申二八・三一 耶五・
二〇
コ 賽六一・一一 番三・
一七
テ 申一二・一二、一四
ア 賽四〇・三、五七
サ 賽一一・一二
キ 亞九・九 太二一・
五 約一二・一五

ものを生ずるがごとく主エホバは義と譽とをもろもろの國のまへに生ぜしめ給ふべし

第六二章

一 われシオンの義あさ日の光輝のごとくにいでエルサレムの救もゆる松火のごとくになるまでは
二 シオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし
三 もろもろの國はなんぢの義を見もろ

もろの王はみななんぢの榮をみん斯てなんぢはエホバの口にて定め給ふ新しき名をもて稱へらるべし
また

汝はうるはしき冠のごとくエホバの手にあり王の冕のごとくなんぢの神のたなごころにあらん
人ふたゝび

汝をすてられたる者といはず再びなんぢの地をあれたる者といはじ却てなんぢをへフジバ(わが悦ぶところ)
ととなへなんぢの地をべウラ(配偶)ととなふべしそはエホバなんぢをよろこびたまふなんぢの地は配偶をえん

わかきものの處女をめとる如くなんぢの子輩はなんぢを娶らん新郎の新婦をよろこぶごとくなんぢの神なん

ぢを喜びたまふべし

六 エルサレムよ我なんぢの石垣のうへに斥候をおきて終日終夜たえず黙すことなからしむなんぢらエホバ

に記念したまはんことを求むるものよ自らやすむなかれ
エホバ、エルサレムをたて、全地に譽をえしめ給ふ

までは息め奉るなかれ
エホバその右手をさしその大能の臂をさし誓ひて宣給くわれ再びなんぢの五穀をな

んぢの敵にあたへて食はせず異邦人はなんぢが勞したる酒をのまざるべし
收穫せしものは之をくらひてエ

ホバを讚たゝへ葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之をのむべし

一〇 門よりすゝみゆけ進みゆけ民の途をそなへ土をもり土をもりて大路をまうけよ石をとりぞけもろも

ろの民に旗をあげて示せ
エホバ地の極にまで告てのたまはく汝等シオンの女にいへ視よなんぢの救きたる

三 視よ主の手にその恩賜ありはたらきの價はその前にあり 而してかれらはきよき民またエホバにあがなはれたる者ととなへられんなんぢは人にもとめ尋らるゝもの棄られざる邑ととなへらるべし

第六三章

一 このエドムよりきたり緋衣をきてボツラよりきたる者はたれぞその服飾はなやかに大なる能力をもて厳しく歩みきたる者はたれぞこれは義をもてかたり大にすくひをほどこす我なり なんぢの服飾はなにゆゑに赤くなんぢの衣はなにゆゑに酒樽をふむ者とひとしきや 我はひとりにて酒樽をふめりもろもろの民のなかに我とともにする者なし われ怒によりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを踏にじりたればかれらの血わが衣にそゝぎわが服飾をことごとく汚したり 是は刑罰の日わが心の中にあり 救贖の歳すでにきたれり われ見てたすくる者なく扶る者なきを奇しめり この故にわが臂われをすくひ我いきどほり我をささへたり われ怒によりてもろもろの民をふみおさへ 忿恚によりてかれらを酔しめかれらの血を地に流れしめたり

七 われはエホバのわれらに施したまへる各種のめぐみとその譽とをかたりつけ 又その憐憫にしたがひ其おほくの恩恵にしたがひてイスラエルの家にほどこし給ひたる大なる恩寵をかたり告ん エホバいひたまへり 誠にかれらはわが民なり 虚偽をせざる子輩なりと斯てエホバはかれらのために救主となりたまへり かれらの艱難のときはエホバもなやみ給ひてその面前の使をもて彼等をすくひ その愛とその憐憫によりて彼等をあがなひ彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまへり 然るにかれらは悖りてその聖靈をうれへしめたる故に エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻たま

イ賽四〇・一〇 黙二 八 黙一九・二三 一五 一六 八 徒九・四 馬三・一 一 出二九・四 申一・三
 二・二二 二 哀一・二五 黙一四 一 賽三四・八 六一・二 一 約一六・三二 一 出二四・一九 二 三三 徒一二・二 一
 口 賽六二・四 一九・二〇 一九 一 賽四一・二八 五九 一 詩九八・一 賽五九 一 又士一〇・二六 亞二 二 二〇 二二 三三 一 申七七・八 一 二 賽四六・三 四

力出一五・二四 民一
 四・一 詩七八
 五六・九五・九
 詩七八・四〇 徒七
 五一 弗四・三〇
 夕出二三・二二

出二四・三〇・三二
 一・二 民一四
 一三・一四 耶二・六
 民一・二七・二五
 尼九・二〇 但四・八
 基二・五

出二五・六
 出二四・二一
 書三
 詩一〇六・九
 申二六・一五
 詩

八〇・二四
 詩三三・二四
 牛耶三一・二〇 何一
 一・八
 申三三・六 代上二
 九・一〇 賽六四・

八
 才伯一四・二一 傳九
 五
 詩二一九・一〇
 賽六・一〇 約二・

民一〇・三六 詩九
 〇・一三
 申七・六・二六・一九
 賽六二・二二 但八
 二・二四
 詩七四・七

詩一四四・五
 五十五・五 米一・四
 出三四・一〇 士五
 四・五 詩六八・
 八 哈三・三・六

二 へり 爰にその民いにしへのモーセの日をおもひいでて曰けるは かれらとその群の牧者とを海より携へあげ

三 し者はいづこにありや 彼等のなかに聖靈をおきしものは何處にありや 榮光のかひなをモーセの右にゆか

三 しめ 彼等のまへに水をさきて自らとこしへの名をつくり 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく躓か

四 淵をすぎしめたりし者はいづこに在りや 谷にくだる家畜の如くにエホバの靈かれらをいとはせ給へり 主よ

一五 なんぢは斯おのれの民をみちびきて榮光の名をつくり給へり

一五 ねがはくは天より俯視なはしその榮光あるきよき居所より見たまへ なんぢの熱心となんぢの大能あるみ

一六 わざとは今いづこにありや なんぢの切なる仁慈と憐憫とはおさへられて我にあらはれず 汝はわれらの父

一七 なりアブラハムわれらを知すイスラエルわれらを認めずされどエホバよ汝はわれらの父なり 上古よりなんぢ

一七 の名をわれらの贖主といへり エホバよ何故にわれらをなんぢの道より離れまどはしめ我儕のこゝろを頑固

一八 にして汝を畏れざらしめたまふや 願くはなんぢの僕等のためになんぢの産業なる支派のために歸りたまへ

一八 汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんぢの聖所をふみにじれり 我儕はなんぢに上古

一八 より治められざる者のごとくなんぢの名をもて稱られざる者のごとくなりぬ

二一 願くはなんぢ天を裂てくだり給へなんぢのみまへに山々ふるひ動かんことを 火の柴をもや

二一 第六十四章 火の水を沸すがごとくして降りたまへ かくて名をなんぢの敵にあらはしもろもろの國をなんぢ

二一 のみまへに戦慄かしめたまへ 汝われらが逆料あたはざる懼るべき事をおこなひ給ひしときに降りたまへり

四 山々はその前にふるひうごけり 上古よりこのかた汝のほかに何なる神ありて俟望みたる者にかゝる事をおこ

五 なひしや いまだ聴すいまだ耳にいらすいまだ目にみしことなし 汝はよろこびて義をおこなひなんぢの途に

六 ありてなんぢを記念するものを迎へたまふ 視よなんぢ怒りたまへり われらは罪ををかせり かゝる状なること

七 既にひさし 我儕いかで救はるゝを得んや 我儕はみな潔からざる物のごとくなり われらの義はことごとく

汚れたる衣のごとし 我儕はみな木葉のごとく枯れ われらのよこしまは暴風のごとく我らを吹去れり なんぢ

の名をよぶ者なくみづから勵みて汝によりすがる者なしなんぢ面をおほひてわれらを顧みたまはず われらが

邪曲をもてわれらを消失せしめたまへり

八 されどエホバよ汝はわれらの父なり われらは泥塊にしてなんぢは陶工なり 我らは皆なんぢの御手のわざ

九 なり エホバよいたく怒りたまふなかれ 永くよこしまを記念したまふなかれ 願くは顧みたまへ 我儕はみな

二〇 なんぢの民なり 汝のきよき諸邑は野となりシオンは野となりエルサレムは荒廢れたり 我らの先祖が汝を

二一 讚たゝへたる榮光ある我儕のきよき宮は火にやかれ 我儕のしたひたる處はことごとく荒はてたり エホバよ

これらの事あれども汝なほみづから制へたまふや なんぢなほ黙してわれらに深くくるしみを受しめたまふや

一 我はわれを求めざりしものに問もとめられ 我をたづねざりしものに見出され わが名をよばざり

二 第六五章 國にわれ曰らく われは此にあり我はこゝに在と 善らぬ途をあゆみおのが思念にしたがふ悖

三 れる民をひねもす手をのべて招けり この民はまのあたり恒にわが怒をひき 園のうちにて犠牲をさゝげ 瓦の

イ詩三一・一九 哥前 六餅三・九 九 耶一八・六 詩七九・二三 結二四・二一、二五 弗二・二二、二三 二九、六六・一七

二・九 へ詩九〇・五、六 羅九・二〇、二一 詩七九・一 王下二五・九 代下 詩八三・一 賽六三・一九

口徒一〇・三五 何七・七 弗二・一〇 力王下二五・九 代下 詩八三・一 賽六三・一九

ハ賽二六・八 賽六三・一六 賽七四・一、二、七 三六・一九 詩七四 羅九・二四—二六、 申三三・二一

二馬三・六 賽二九・一六、四五 九・八 七 三〇、一〇・二〇 利一七・五 賽一・

申一八・一一 一九 六・一八 結二一・一 二・一五 二・一五 六・一八・一二路一三・
 一七 二七 二二 二二 六・一八・一二路一三・ 六・一八・一二路一三・
 一六 一六 二二 二二 六・一八・一二路一三・ 六・一八・一二路一三・
 申太九・一一 路五・ 才詩五〇・三 才出二〇・五 才出二〇・五 六・一八・一二路一三・
 三〇・一八・一一 路五・ 才詩五〇・三 才出二〇・五 才出二〇・五 六・一八・一二路一三・
 三〇・一八・一一 路五・ 才詩五〇・三 才出二〇・五 才出二〇・五 六・一八・一二路一三・

壇にて香をたき 墓のあひだにすわり隠密なる處にやどり 猪の肉をくらひ憎むべきものの羹をその器皿にも

五 人にいふなんぢ其處にたちて我にちかづくなかれそは我なんぢよりも聖しと彼らはわが鼻のけぶり終日

六 もゆる火なり 視よこの事わが前にしるされたり われ黙さずして報いかへすべし 必ずかれらの懐中に報いか

七 へすべし エホバいひ給くなんぢらの邪曲となんぢらが列祖のよこしまとはともに報いかへすべし かれらは

山上にて香をたき岡のうへにて我を汚し、がゆるに 我まづその作をはかりてその懐中にかへすべし

八 エホバ如此いひたまふ 人ぶだうのなかに汗あるを見ばいはん これを壊るなかれ福祉その中にあるはなり

九 我わが僕等のために如此おこなひてことごとくは壊らじ ヤコブより一裔をいだしユダよりわれ山々を

一〇 うけつぐべき者をいださん わが撰みたる者はこれをうけつぎ我がしもべらは彼處にすむべし シヤロンは羊の

二 むれの牧場となりアコルの谷はうしの群のふす所となりて我をたづねもとめたるわが民の有とならん 然ど

なんぢらエホバを棄わがきよき山をわすれ 机をガド(禍福の神)にそなへ雑合せたる酒をもちてメニ(運命の神)

三 にさゝぐる者よ われ汝らを劍にわたすべく定めたり なんぢらは皆かゞみて屠らるべし 汝等はわが呼しとき

ことたへす わが語りしとききかず わが目にあしき事をおこなひ わが好まざりし事をえらみたればなり

三 このゆるに主エホバかく言給ふ わが僕等はくらへども汝等はうる わが僕等はのめども汝等はかわき我

四 しもべらは喜べどもなんぢらははぢ わが僕等はこゝろ樂きによりて歌うたへども汝等はこゝろ哀きによりて

五 叫び また靈魂うれふるによりて泣嘆ぶべし なんぢらが遺名はわが撰みたるものの呪詛の料とならん 主エホ

一六 パなんぢらを殺したまはん 然どおのれの僕等をほかの名をもて呼たまふべし 斯るがゆゑに地にありて己のために福祉をねがふものは眞實の神にむかひて福祉をもとめ 地にありて誓ふものは眞實の神をさして誓ふべし

さきの困難は忘れられてわが目よりかくれ失たるに因る

一七 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す 人さきのものを記念することなく之をその心におもひ出る

一八 ことなし 然どなんぢらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ 視よわれはエルサレムを造りてよろこびとしその民を快樂とす われエルサレムを喜びわが民をたのしまん 而して泣聲とさけぶ聲とはふたゝ

二〇 びその中にきこえざるべし 日數わづかにして死る嬰兒といのちの日をみたさざる老人とはその中にまたある

二二 ことなかるべし 百歳にて死るものも尙わかしとせられ 百歳にて死るものを誼れたる罪人とすべし かれら家をたてゝ之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらふべし かれらが建るところにほかの人すまず かれらが

二三 造るところの果はほかの人くらははずそはわが民のいのちは樹の命の如く 我がえらみたる者はその手の工ふるび

二三 うするとも存ふべければなり かれらの勤勞はむなしからずその生ところの者はわざはひにかゝらず 彼等は

二四 エホバの福祉をたまひしもの裔にしてその子輩もあひ共にをる可ればなり かれらが呼ざるさきにわれこた

二五 へ 彼らが語りをへざるに我きかん 豺狼とこひつじと食物をともし 獅は牛のごとく藁をくらひ 蛇はちりを糲とすべし 斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん これエホバの聖言なり

第六十六章

一 エホバ如此いひたまふ 天はわが位地はわが足凳なり なんぢら我がために如何なる家をたてんとするか 又いかなる處かわが休憩の場とならん エホバ宣給く 我手はあらゆる此等のものを造り

イ賽六二・二徒一一・二
 二六 申六・一三詩六三・二 賽五一・一六、六六 ホ賽六二・五
 口詩七二・一七耶四・一一 賽一九・一八、二二 彼後三・一三 へ賽三五・一〇、五一 ト傳八・二二
 四五・二三番一・五 歌二一・一
 二一 歌七・一七、チ利二六・一六 申二 詩九二・二二
 八・三〇 賽六二・八 又賽六五・九、一五 又賽六一・九
 九 申二八・四一 何九・ワ詩三二・五 但九・

三 ごとくその豊なる榮をうけておのづから心さわやかならん 二 エホバ如此いひたまふ 視よわれ河のごとく彼に

平康をあたへ 漲ぎる流のごとく彼にもろもろの國の榮をあたへん 而して汝等これをすひ背におはれ膝におかれ

三 て樂しむべし 二 母のその子をなぐさむるごとく我もなんぢらを慰めん なんぢらはエルサレムにて安慰を

二 四 うべし 二 なんぢら見て心よろこばん なんぢらの骨は若草のさかゆるごとくなるべし エホバの手はその僕等に

あらはれ又その仇をばげしく怒りたまはん

二 五 視よエホバは火申にあらはれて來りたまふ その車輦ははやちのごとし 烈しき威勢をもてその怒をもらし

二 六 火のほのほをもてその譴をほどし給はん エホバは火をもて劍をもてよろづの人を刑ひたまはん エホバに

二 七 刺殺さるゝもの多かるべし エホバ宣給くみづからを潔くしみづからを別ちて園にゆき その中にある木の像

にしたがひ 豕の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせん

二 八 我かれらの作爲とかれらの思念とをしれり 時きたらばもろもろの國民ともろもろの族とをあつめん 彼等

二 九 きたりてわが榮光をみるべし 我かれらのなかに一つの休徴をたてゝ 逃れたる者をもろもろの國すなはち

タルシシよく弓をひくプル、ルデおよびトバル、ヤワン又わが聲名をきかずわが榮光をみざる遙かなる諸島につか

二 一〇 はさん 彼等はわが榮光をもろもろの國にのべつたふべし エホバいひ給ふ かれらはイスラエルの子輩がきよ

き器にそなへものをもりてエホバの家にとづさへきたるが如くなんぢらの兄弟をもろもろの國の中よりたづさ

二 へて馬車、轎、駱駝にのらしめ わが聖山エルサレムにきたらせてエホバの祭物とすべし エホバいひ給ふ

我また彼等のうちより人をえらびて祭司としレビ人とせんと

イ賽四八・一八、六〇 ハ賽四九・二二、六〇 ホ賽九・五 撒後一・八 申路二・三四 ル出一九・六 賽六一・
五
ハ賽二七・一
ト賽六五・三、四 又羅一五・一六 一・六
六 彼前二・九 獸

ラ 賽六五・一七 撒後 カ詩六五・二
三・一三 歌二一・一 ヨ 賽六六・一六
ワ 亞一四・一六 タ 可九・四四、四六、四

二三 エホバのたまは宣給く わが造らんとする新あたしき天とあたらしき地とわが前まへにながくとどまる如ごとくなんぢの裔すえとな
 二三 ンぢの名なはながくとどまらん エホバのたまはいひ給ふ 新月しんげつごとに安息日あんそくにちごとによろづの人ひとわが前まへにきたりて崇拜すかむを
 二四 なさん 二四 かれら出いでてわれに逆さむきたる人ひとの屍かばねをみん 二四 其その蛆うじしなず其その火ひきえずよろづの人ひとにいみきはるべし

イザヤ書をはり